松江市文化財調査報告書　第91集

市道真名井神社線整備事業に伴う
大坪遺跡発掘調査報告書

2002年9月

松江市教育委員会

財団法人松江市教育文化振興事業団

松江市文化財調査報告書　第91集

市道真名井神社線整備事業に伴う
大坪遺跡発掘調査報告書

2002年9月

松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

1号木簡

例　　言

1．本書は、平成11年度から平成13年度にかけて松江市教育委員会および松江市教育文化振興事業団が実施した、市道真名井神社線整備事業に伴う大坪遺跡発掘調査報告書である。

2．本書で報告する発掘調査は、松江市（土木課）から依頼を受け、松江市教育委員会が立会人となり、財団法人松江市教育文化振興事業団が委託を受けて実施したものである。

3．調査組織は下記のとおりである。

依頼者　松江市　（都市建設部　土木課）

主体者　松江市教育委員会

調査者　財団法人松江市教育文化振興事業団

・平成11年度

＜事務局＞松江市教育委員会

教育長	原　敏	文化財室長	岡崎雄二郎
副教育長	神田　義之	文化財室主幹	吉岡　弘行
生涯学習課課長	谷　正次	主事	古藤　博昭

＜実施者＞財団法人松江市教育文化振興事業団

理事長	宮岡　寿雄	調査係長	瀬古　諒子
専務理事	北村　悦男	調査員	江川　幸子
事務局長	柳浦　孝行	嘱託員	青山　悦朗

・平成12年度

＜事務局＞松江市教育委員会

教育長	原　敏	副教育長	神田　義之
（平成12年９月30日まで）		生涯学習課課長	川原　良一
	伊藤　忠志	文化財室主幹	吉岡　弘行
（平成12年10月１日から）		主任主事	古藤　博昭

＜実施者＞財団法人松江市教育文化振興事業団

理事長	宮岡　寿雄	専務理事	米田　喜雄
（平成12年５月６日まで）		事務局長	柳浦　孝行
理事長職務代理者	安藤　瑞也	調査係長	瀬古　諒子
（平成12年５月７日から）		調査員	江川　幸子
（平成12年９月６日まで）		嘱託員	青山　悦朗
理事長	松浦　正敬		
（平成12年９月７日から）			

・平成13年度

＜事務局＞松江市教育委員会

教　育　長　山本　弘正　　文化財課係長　飯塚　康行
文化財課課長　岡崎雄二郎　　主　任　主　事　古藤　博昭

＜実施者＞財団法人松江市教育文化振興事業団

理　事　長　松浦　正敬　　調　査　係　長　瀬古　諒子
専　務　理　事　米田　喜雄　　調　査　員　江川　幸子
事　務　局　長　吉岡　正夫　　嘱　託　員　野津　里佳

・平成14年度

＜事務局＞松江市教育委員会

教　育　長　山本　弘正　　文化財課係長　飯塚　康行
文化財課課長　岡崎雄二郎

＜実施者＞財団法人松江市教育文化振興事業団

理　事　長　松浦　正敬　　調　査　係　長　瀬古　諒子
専　務　理　事　田中寿美夫　　調　査　員　江川　幸子
事　務　局　長　吉岡　正夫　　嘱　託　員　陶山　隆

4．調査の実施および報告書作成にあたっては、下記の方々より多大なご教示、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい（敬称略、順不同）。

勝部昭（島根県文化財課）、柳浦俊一（島根県埋蔵文化財調査センター）、熊真治（島根県文化財課）、平野芳英（八雲立つ風土記の丘）、宮沢明久（島根県八雲立つ風土記の丘）、内田律雄（島根県埋蔵文化財調査センター）、中村唯史（島根大学汽水域研究センター客員研究員、現、島根県立三瓶自然館）、平川南（国立歴史民俗博物館）、舘野和己（奈良国立文化財研究所）、渡辺晃宏（奈良国立文化財研究所）、吉川聡（奈良国立文化財研究所）、田中文生（関東学院大学）、平石充（島根県古代文化センター）、森田喜久男（島根県古代文化センター）、真名井神社、角薫吉（土地所有者）、梅原明枝（土地所有者）、石原皎（土地所有者）、三代要（土地所有者）、秋山育男（土地所有者）、荒川芳正（土地所有者）、前田豊（土地所有者）、小村貢（土地所有者）、多久和姫子（土地所有者）、角正治（土地所有者）、渡部徳康（土地所有者）、渡部志栄子（土地所有者）

5．本書の作成には下記の者が携わった。

（遺物整理）花田陽子、福田万里、大森裕子、鹿野純子、東裕美、高橋歩実、花田真介、野々内孝雄、寺本憲司、青山、野津、陶山

（遺物復原）花田、福田、野津、陶山

（遺物実測）花田、福田、青山、野津、江川

（浄　　書）花田、福田、高橋、青山、野津、江川

（拓　　本）花田、福田

6．本書に掲載した写真は、青山、野津、江川が撮影した。遺物写真の撮影にあたっては、島根県埋蔵文化財調査センターの写真撮影場を借用させていただいた。

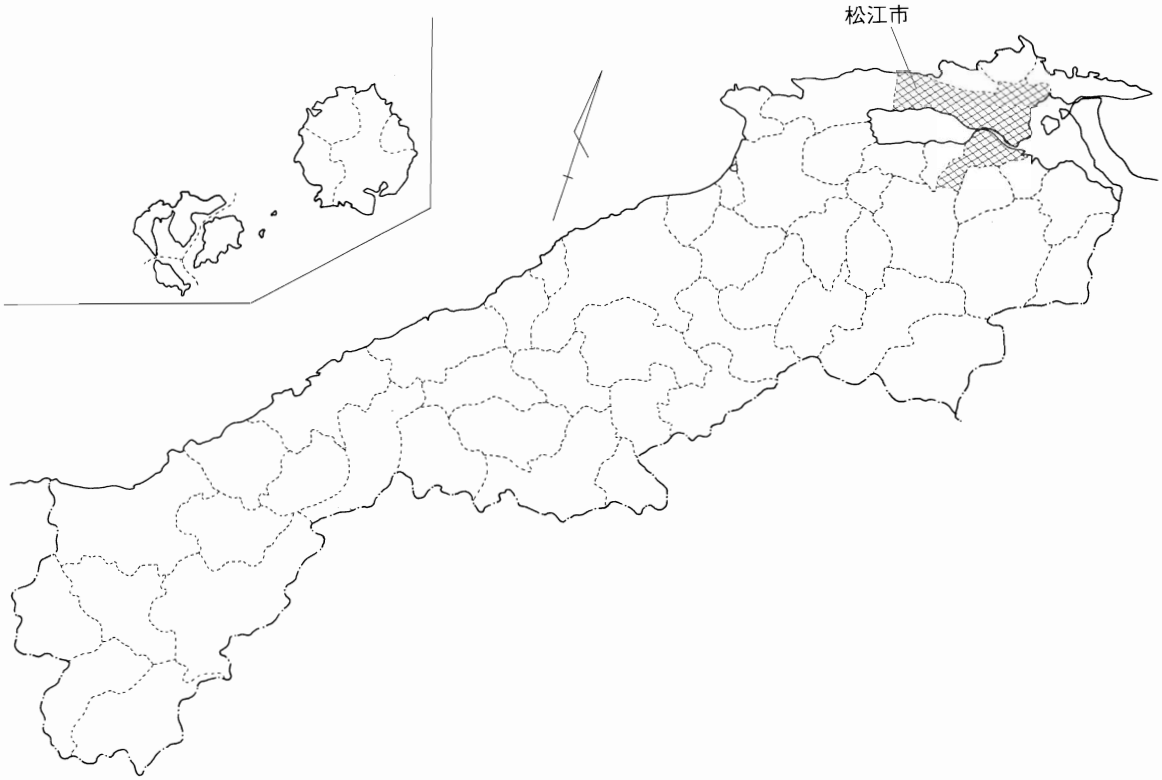
7．本書の執筆は、調査に至る経緯と経過を飯塚（松江市教育委員会）が、その他については江川が

おこない、編集は江川がおこなった。

8．木製品の樹種同定は、㈱吉田生物研究所に委託した。

9．本書挿図中の方位は磁北を示す。

10．出土遺物は松江市教育委員会文化財課で保管している。



目　　次

１．調査に至る経緯と経過 …… 1

２．位置と歴史的環境 …… 2

３．調査の概要 …… 5

４．平成11年度調査について …… 7

Ⅰ．調査の概要 …… 7

Ⅱ．調査結果報告 …… 9

土器観察表 ……23

Ⅲ．小　　結 ……24

５．平成12年度調査について ……25

Ⅰ．調査の概要 ……25

Ⅱ．調査結果報告 ……26

土器観察表 ……55

Ⅲ．小　　結 ……61

６．平成13年度調査について ……62

Ⅰ．調査の概要 ……62

Ⅱ．調査結果報告 ……62

土器観察表 ……73

Ⅲ．小　　結 ……75

７．結　　語 ……76

松江市大坪遺跡出土木製品の樹種調査結果 ……78

図　　版

抄　　録

挿　図　目　次

第１図　大坪遺跡位置図 …… 1
第２図　大坪遺跡周辺の遺跡分布図 …… 3
第３図　大坪遺跡調査区配置図 …… 6
第４図　４・５・６区トレンチ配置図 …… 8
第５図　４区トレンチ土層断面図 …… 9
第６図　５・６区トレンチ土層断面図 ……10
第７図　５区出土瓦実測図 ……11
第８図　６区出土土器実測図 ……11
第９図　６区出土瓦実測図 ……11
第10図　６区出土木簡実測図 ……12
第11図　６区出土木製品実測図 ……14
第12図　７・８・９区トレンチ配置図 ……15
第13図　７区土層断面図 ……16
第14図　８・９区土層断面図 ……17
第15図　８区出土土器実測図 ……18
第16図　９区完掘状況図 ……19
第17図　溝ＳＤ０１埋土土層断面図 ……20
第18図　溝ＳＤ０１出土土器実測図 ……21
第19図　９区包含層出土土器実測図 ……21
第20図　９区包含層出土砥石実測図 ……22
第21図　９区包含層出土石鏃実測図 ……22
第22図　１・２・３区トレンチ配置図 ……26
第23図　１・２・３区トレンチ、１区拡張調査区土層断面図 ……27
第24図　１区トレンチ出土土器実測図 ……28
第25図　１区拡張調査区出土木製品実測図 ……29
第26図　10～12・14・15区遺構配置図 ……31
第27図　10～12区土層断面図 ……32
第28図　14・15区土層断面図 ……33
第29図　10区遺構検出状況 ……34
第30図　溝ＳＤ０３遺物分布図 ……35
第31図　溝ＳＤ０３埋土土層断面図 ……35
第32図　溝ＳＤ０３上層出土土器実測図 ……36
第33図　溝ＳＤ０３下層出土土器実測図（１）……37

第34図　溝ＳＤ０３下層出土土器実測図（２）……38
第35図　溝ＳＤ０３下層出土土器実測図（３）……39
第36図　10区包含層出土土器実測図　……39
第37図　11区遺構検出状況　……40
第38図　Ｐ１出土土器実測図　……41
第39図　Ｐ２土器出土状況　……41
第40図　Ｐ２出土土器実測図　……41
第41図　南西角土器集中部分出土土器実測図　……42
第42図　11区包含層出土土器実測図　……43
第43図　12区遺構検出状況図　……44
第44図　掘立柱建物ＳＢ０１検出状況図　……45
第45図　不明遺構ＳＸ０１実測図　……46
第46図　不明遺構ＳＸ０１出土遺物実測図　……46
第47図　北西角土器集中出土状況図　……47
第48図　北西角土器集中部分出土土器実測図　……47
第49図　12区包含層出土土器実測図　……48
第50図　12区包含層出土石器実測図　……48
第51図　14区弥生土器分布状況図　……49
第52図　14区濁灰褐色砂質土出土弥生土器実測図　……50
第53図　14区包含層出土土器実測図　……51
第54図　15区遺構検出状況図　……52
第55図　溝ＳＤ０５埋土土層断面図　……53
第56図　溝ＳＤ０５出土土器実測図　……54
第57図　15区包含層出土土器実測図　……54
第58図　調査区配置図　……63
第59図　Ａ・Ｂ・Ｃグリッド土層堆積状況図　……64
第60図　Ａグリッド出土土器実測図　……65
第61図　Ａグリッド出土木製品実測図（１）……66
第62図　Ａグリッド出土木製品実測図（２）……67
第63図　Ｃグリッド自然河道検出状況図　……68
第64図　Ｃグリッド出土土器実測図　……69
第65図　Ｃグリッド出土石鏃実測図　……69
第66図　Ｃグリッド出土木製品実測図　……70
第67図　Ｄグリッド出土土器実測図　……72
第68図　Ｅグリッド土層堆積状況図　……73

図　版　目　次

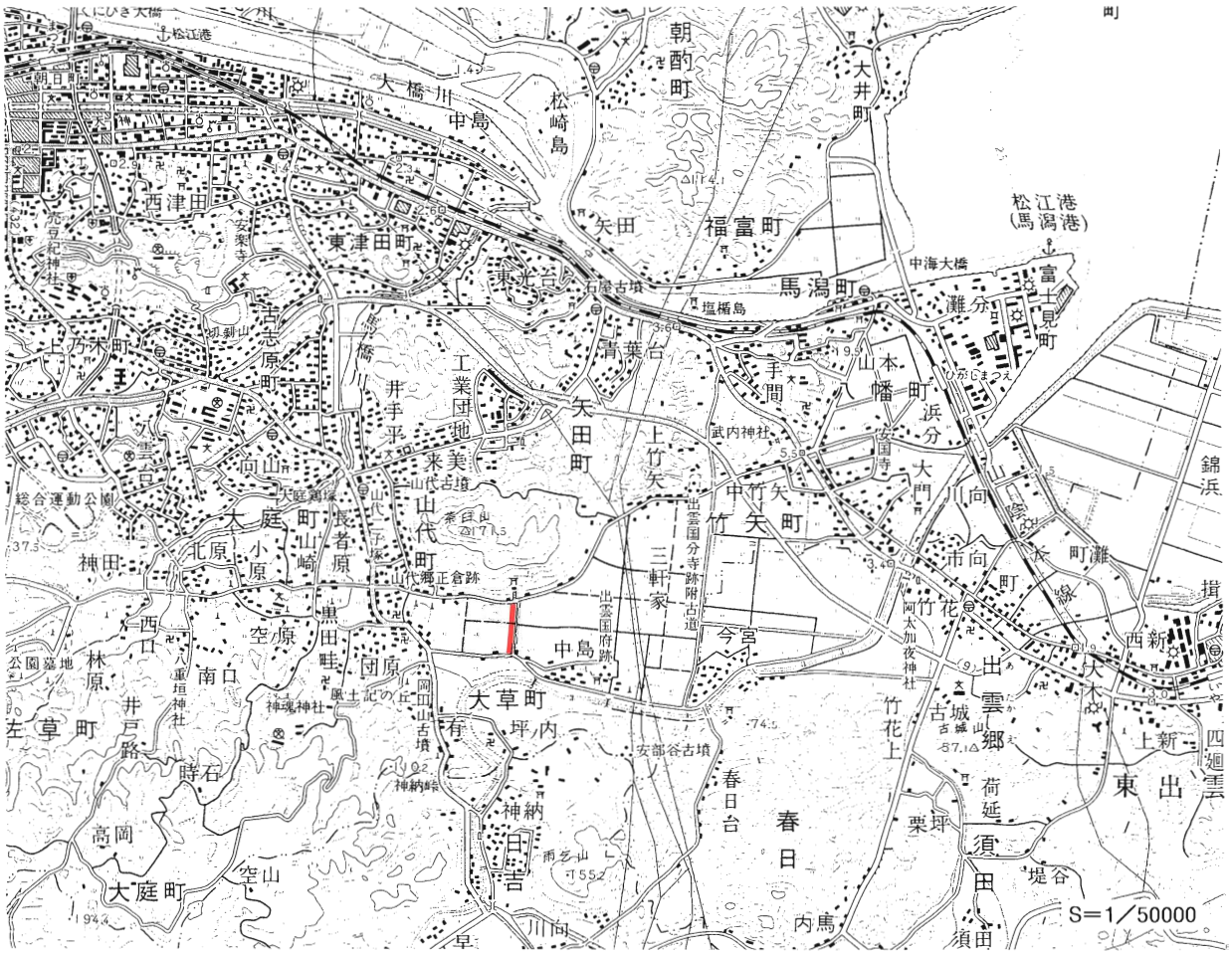
図版１　大坪遺跡遠景（西上より）
大坪遺跡近景（北より）
図版２　４～６区完掘状況
４区トレンチ掘削状況
５区河原石検出状況
図版３　６区木簡①出土状況
６区木簡③出土状況
７～９区完掘状況
図版４　８区トレンチ掘削状況
９区完掘状況
９区溝ＳＤ０１完掘状況
図版５　１区トレンチ壁面土器出土状況
１区拡張区完掘状況
１区拡張区木製品出土状況
図版６　10～12区完掘状況
10区溝ＳＤ０３完掘状況
10区溝ＳＤ０３上層土器出土状況
図版７　11区完掘状況
11区Ｐ２土器出土状況
12区掘立柱建物ＳＢ０１検出状況
図版８　14区土器出土状況
15区溝ＳＤ０５完掘状況
15区溝ＳＤ０６完掘状況
図版９　Ａ～Ｅグリッド完掘状況
Ａグリッド土層堆積状況
Ａグリッド土器出土状況
図版10　Ｂグリッド土層堆積状況
Ｃグリッド木製品出土状況
Ｃグリッド南端基盤層浸食状況
図版11　４～６区出土遺物
図版12　８・９区溝ＳＤ０１出土遺物
９区包含層出土遺物
図版13　６区・１区トレンチ出土遺物
１区拡張区・４区溝ＳＤ０３出土遺物
図版14　10区溝ＳＤ０３出土遺物
図版15　10区溝ＳＤ０３出土遺物
図版16　10区溝ＳＤ０３出土遺物
図版17　10区溝ＳＤ０３出土遺物
図版18　10区溝ＳＤ０３出土遺物
10区包含層出土遺物
11区南西角土器集中部分出土遺物
図版19　11区南西角土器集中部分出土遺物
11区包含層出土遺物
不明遺構ＳＸ０１出土遺物
12区北西角土器集中部分出土遺物
図版20　12区北西角土器集中部分出土遺物
12区包含層出土遺物
図版21　12区包含層出土遺物
14区濁灰褐色砂質土出土遺物
図版22　14区濁灰褐色砂質土出土遺物
14区包含層出土遺物
図版23　14区包含層出土遺物
15区溝ＳＤ０５出土遺物
15区包含層出土遺物
図版24　Ａグリッド出土遺物
図版25　Ａグリッド出土遺物
Ｃグリッド出土遺物
図版26　Ｃグリッド出土遺物
図版27　Ｃ・Ｄグリッド出土遺物

1．調査に至る経緯

松江市南東部の山代町、大草町を中心とした意宇川下流域には、意宇川の沖積によって形成された意宇平野が広がっている。この平野一帯には古代からの条里制跡がよく残り、南側の出雲国庁跡とあわせて国史跡として指定されている。また平野北側には国史跡出雲国分寺跡があるなど、奈良時代から中世にかけて出雲の中心地であった地域である。

市道真名井神社線は、意宇平野を南北に縦断する市道であり、もとは真名井神社の参道にあたる。この道路は古来より松並木の風光明媚さで有名であったが、近年の松喰い虫被害により現在は松並木が失われている。

この松並木が枯損したことには惜しむ声が多く、平成９年度において地元自治会から、松並木の復元を求める陳情書が提出された。これに対して松江市は市道の拡幅を含めた松並木の整備計画したが、文化庁および島根県教育委員会との協議の結果、当該地が国史跡出雲国府跡の指定地西端にあたることから、現道の東側は現状のままとして西側水田地を拡幅して整備することとなった。しかし当該地には古代の山陰道（正西道）ほか国府跡関連の遺構が存在する可能性が推定されたことから、事前に発掘調査を実施することとなった。



第1図　大坪遺跡位置図

2．位置と環境

大坪遺跡は、松江市山代町・大草町地内に所在する（第２図１）。

松江市南東部の意宇平野の西寄りの場所で、現在は水田として利用されている。調査範囲は真名井神社参道の西側で、参道に沿って東西幅約12m、南北長約337mと南北に細長く、意宇平野西部をほぼ南北に断つ位置にある。

意宇平野は、南方の八束郡八雲村方面から北流してくる１級河川、意宇川の沖積作用による小規模の扇状地と下流の三角州から形成された小平野である。標高は扇央にあたる坪ノ内付近がやや高く、北～北東の周縁部にいくほど低くなっている。ただし、高低差は非常に緩やかなものである。地下には豊富な伏流水が流れる砂（礫）層が存在している。

意宇平野を形成した意宇川は、八束郡八雲村から北流して意宇平野に入るとほぼ直角の東方へと流路を変えて出雲国国庁跡に南接し、さらに東へいくと北東方向に流れを変えて中海にそそいでいる。この流路は自然河道としては非常に不自然であることから、国庁が設置される時点で人工的な流路変更がおこなわれたのではないかという説もある。このような流路をとる意宇川がたびたび氾濫を起こしたであろうことは想像に難くない。耕地整理以前に残っていた平野中央部の条里は乱れており、「大川田」、「船底」といった字名にも氾濫の痕跡を見いだすことができる。出雲国国庁は意宇平野の中では扇央に近い微高地に設置されていて好立地といえるが、周辺官笂の存在を考慮すると、意宇平野に国庁の関連施設を設置することは一見非常に危険なことのように思われる。ところが、かつての意宇川は上流の八雲村日吉地内で耕作地を囲むように山際に沿って大きく蛇行して流れていた時期があり、当時はそこで流速が急に低下して、大量の降雨があった際には日吉地内で流水が停滞して氾濫をおこして自然ダムの役割をはたし、意宇平野は比較的水害を受けにくい状況にあったのではないかと考えられている。

延享四年（1747年）、八雲村日吉地内で耕作をおこなっていた住民は、意宇川の氾濫で甚大な被害を被っていたため、日吉地内での氾濫を鎮めるために蛇行する川にバイパスを通して堤防を築く土木工事「日吉切通し」（２）を完成させ、旧河道地を新田として開拓している。このことにより、それまでは八雲村内で氾濫をおこしていた意宇川が意宇平野に流れ込んだ時点で氾濫をおこす結果を生み出したようである。「日吉切通し」が完成して17年後の明和元年（1764年）、山代村庄屋の長沢伊助が真名井神社前の作道の両端を広めて松を植樹し、現在に見られる真名井神社参道を完成させている。耕作地を削り、さらに田圃に影を作る植樹までおこなって強固化をはかったと思える参道工事は、単なる参道づくりだけではなく、洪水時における激流による耕土流出を防ぐ堤防の役割をはたすものであったと考えられている。これらの一連とも思える土木工事を逆に解釈すると、「日吉切通し」が完成するまでは、意宇平野は多量の降水があったとしても比較的安定した場所ではなかったかと思えるのである。

次に意宇平野周辺の主な遺跡について記す。

縄文時代の遺跡は北側丘陵縁辺に多く、竹矢小学校校庭遺跡（３）、法華寺前遺跡（４）、間内遺跡（５）、上小紋遺跡（６）、向小紋遺跡（７）、国分寺周辺遺跡（８）が知られている。いずれも遺物散布地で、遺構は検出されていない。

弥生時代では、意宇平野は稲作に適した場所であることから遺跡数は増加している。遺物としては、意宇平野から採集されたと伝わる細形銅剣が著名である。遺跡ごとに見てみると、夫敷遺跡（９）や上小紋遺跡（６）から水田遺構、間内遺跡（５）では粘土採掘坑が検出されているほか、平浜八幡宮前遺跡（10）、国分寺跡付近遺跡（８）、布田遺跡（11）で土器の散布が知られている。また、今回発掘調査を実施した大坪遺跡でも広く遺構、遺物が出土しており、平野内部における遺跡の面積は広がっていたものと推察される。

古墳時代に入ると、四配田遺跡（12）や神田遺跡（13）から中期の遺構、遺物が出土している。また、出雲国国庁所在地（14）の下層から遺構や遺物が多く出土しており、時期的には中期以降の数量が飛躍的に増加している。この時期の意宇平野には、すでに後の出雲国国庁設置に至る素地ができあがっていたと考えてよいであろう。意宇平野周縁の丘陵上には古墳の数も多く、平野の西側微高地では大型古墳が多く分布し、一辺42mの方墳、大庭鶏塚古墳（15）のほか全長90mの前方後方墳、山代二子塚（１６）、一辺45mの方墳、山代方墳（17）などが知られているほか、数多くの中、小規模古墳が分布している。平野の南側丘陵上には群集墳、東百塚山古墳群（18）、西百塚山古墳群（19）の

第2図　大坪遺跡周辺の遺跡分布図

ほか、岩盤を端整にくりぬいて造られた安部谷横穴墓群（20）が目をひく存在である。

奈良時代の状況については、733年に勘造された『出雲国風土記』に詳しい記載があり、文献と遺跡からのアプローチが可能である。『出雲国風土記』によれば、意宇郡の最後尾に「通道。……前件一郡、入海之南。此則國庁也」とあり、意宇郡に出雲国国庁が設置されていたことが記載されている。出雲国国庁跡は大草町にあり、現在も継続的に発掘調査がおこなわれ次々と新しい遺構が発見されている。また、「自國東堺去西廿里一百八十歩至野城橋。……又西廿一里、至國庁意宇郡家北十字街。即分二道。一正西道、一枉北道。」とあり、意宇郡郡家は出雲国国庁とほぼ同じ場所に位置しており、伯耆國國堺から続く古代山陰道は国庁の北側で十字路となっており、意宇平野は交通の要衝であったことがうかがえる。また、「黒田駅。郡家同処。」「意宇軍団。即属郡家。」との記載から、軍団や駅も郡家と同じ場所に存在していたようであるが、郡家に関連する遺構は現時点では明確にされていない。意宇平野の周辺では、そのほか「山代郷。……即有正倉。」とあり、この正倉は発掘調査によって大量の焼米を伴う倉庫群の遺構、山代正倉跡（21）として確認されている。また、「新造院一所。有山代郷中。郡家西北二里。建立教堂。住僧一躯。飯石郡少領出雲臣弟山之所造也。」、「新造院一所。有山代郷中。郡家西北四里二百歩。建立厳堂也。無僧。日置君目烈之所造。……」とあり、前者は四王寺（22）、後者は来美廃寺（23）として発掘調査が実施されている。四王寺では伽藍跡が明確にされていないが、小無田Ⅱ遺跡（24）から四王寺の瓦を焼いた登り窯が検出され、来美廃寺では金堂跡から須弥壇が検出されている。

『出雲国風土記』に記載が無い奈良時代の遺跡としては、意宇平野ほぼ中央北の山際に出雲国国分寺跡（25）、その約0.6キロ東の山際に出雲国国分尼寺跡（26）、両者のほぼ半ばに瓦窯跡（27）がある。平野西側の微高地では下黒田遺跡（28）、出雲国造館跡（29）が知られている。

また、意宇平野そのものも大部分が耕地整理で失われてはいるが、条里制地割が残る遺跡である。現在残っている条里地割がいつの時代に造られたものかは不明であるが、樋の口遺跡（30）ではほぼ条里地割の方位に沿った奈良時代の庇付掘立柱建物跡が検出されている。

参考文献

松江市教育委員会『出雲国庁跡発掘調査概報』 1970年
中澤四郎「条里制遺跡」『島根県文化財調査報告書第五集』島根県教育委員会　昭和43年
おおばの歴史編集委員会『おおばの歴史』 平成十年
島根県教育委員会『北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 昭和62年
島根県教育委員会『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ』 平成元年
島根県教育委員会『一般国道９号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ』 1991年
加藤義成『修訂出雲国風土記参究』 昭和32年
島根県教育委員会『史跡出雲国山代郷正倉跡』 昭和56年
島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告Ⅹ』 平成６年
松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団『小無田Ⅹ遺跡発掘調査概報』 1997年
松江市建設部建築課・松江市教育委員会『下黒田遺跡発掘調査報告書』 昭和63年
松江市教育委員会『出雲国造館跡発掘調査報告』 1980年

3．調 査 の 概 要

大坪遺跡発掘調査は平成11年～13年度の３年度にわたって実施した。

大坪遺跡の調査範囲は真名井神社参道の西側の最大幅12m、南北約340mを測り、意宇平野の西寄りの場所を南北に断つような位置にある。

当初は『出雲国風土記』に記載された「正西道」つまり古代山陰道が遺構として検出できる可能性が高いと期待されたほか、国庁周辺に広がる官笂関連の遺跡が出土する可能性も高いと考えられた。したがって、今回の調査は古代山陰道の位置と遺構確認に主眼をおき、奈良時代における周辺の古環境の復原に努めることとした。また、意宇平野は歴史的に非常に重要な場所でありながら『風土記』以前の状況についてはほとんど解明されていないため、意宇平野にきざまれた『風土記』以前の歴史を解明することにも留意した。

そのほか、周辺に立地する遺跡を理解するためにも、現在の意宇平野が形成されるまでの自然地理的な側面についても可能な限り観察をおこなうこととした。

調査区は、北から田圃ごとに１～15区と設定した（第３図）。

平成11年度は、最も有力な古代山陰道推定地[註1]を中心とする、４～９区について発掘調査を実施した。４～８区は試掘トレンチの結果、遺構が存在する可能性は非常に低いと考えられたため、トレンチ調査にとどめ、９区のみ全面発掘調査を実施した。

平成12年度は、１～３、10～12、14、15区について発掘調査を実施した。１～３区については遺構が存在する可能性が非常に低いと考えられたためトレンチ調査のみにとどめる予定であったが、トレンチ調査成果から全面調査が必要となり、１区北半分についてのみ拡張して面的調査を実施した。２、３区も全面調査が必要であったが、期間等の都合上、来年度に実施することとした。13区はビニールハウスで畑作がおこなわれているため調査は実施できず、10～12、14、15区については全面発掘調査を実施した。

平成13年度は、平成12年度にトレンチ調査のみを実施した１～３区について全面調査が必要な結果が得られたことから、１区南半分～３区の全面発掘調査を実施した。

以上、３年間の調査の概略を記したが、調査地が現在も耕作中の田圃であるため、実際に調査が開始できたのは稲刈りや刈り取られた稲の現地天日干しが終了した後であり、また、春の田植え前の荒おこしに間に合うように田圃を復旧して土地所有者に返却する必要があったため、実際の現地調査実施期間は年度後半期の３ケ月程度に限られた。山陰地方の冬季の悪天候のもと、天からの降雨および降雪、地下からの豊富な湧水により調査は困難をきわめ、心ならずも十分な調査がおこなえなかったことが遺憾の極みである。

本調査報告書は、年度ごとに図面等を作製、整理していたものを、平成14年４～６月にまとめて作成したものである。

註１　中村太一「『出雲国風土記』の方位・里程記載と古代道路」『出雲古代史研究（第二号）』 1992年　ほか。

第3図　大坪遺跡調査区配置図

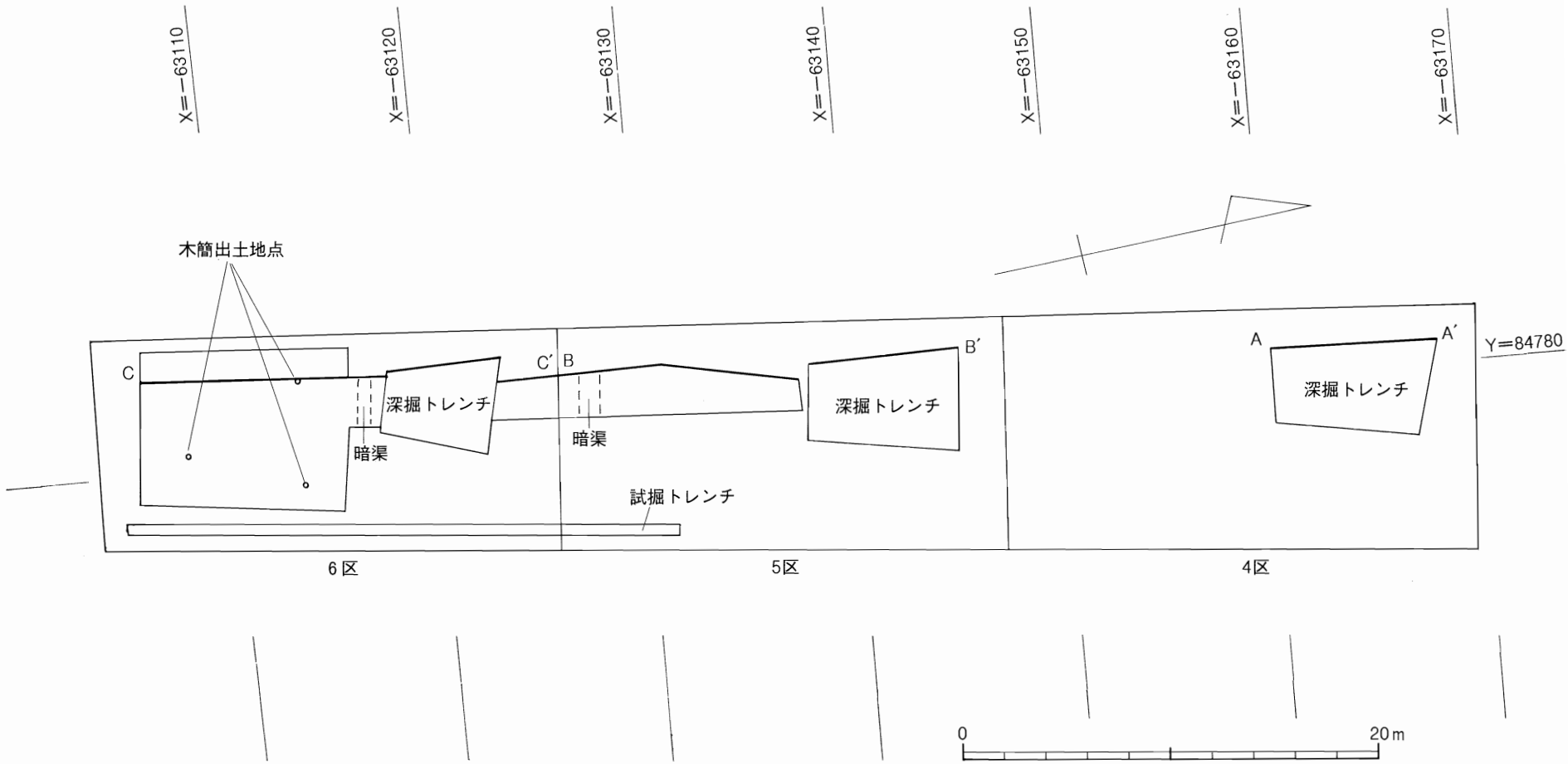
4．平成11年度調査について

Ⅰ．調査の概要

平成11年度は、古代山陰道推定地として最も重要視されている７区を中心とする４～９区について発掘調査を実施した。

４～６区については小型重機を使用して幅の狭い試掘トレンチを南北に掘り、その土層の堆積状況を観察した。耕作基盤土下の土層は低湿地状で遺物は出土せず、遺構が存在する可能性は少ないと考えられた。そこで、各区に１カ所づつ湧水砂層まで達する深掘りトレンチを掘り、土層堆積状況の観察記録をおこなうことにした。ただし、６区は古代山陰道の遺構が存在する可能性が考えられたため、トレンチを南端まで延長した。その結果、６区のトレンチ延長部分で古代山陰道の遺構を検出することはできなかったが、湧水砂層直上のレベルから木簡の破片を包含した葦類の植物遺体など有機質を多量に含む沼地状の土層を確認した。そこで６区の南側半分については調査区を拡張して遺物の収集をおこなった。その結果、木簡状木製品多数と木簡の破片３点が出土した。また、６区の延長トレンチ北側から６区深掘トレンチにかけて河原の一部と思われる大円礫を隙間無く検出したため、５区方向に向けてもトレンチを延長し、大河の痕跡を確認することにした。

７～９区については、７～８区付近が古代山陰道の最有力推定地にあたっていたため、まず小型重機を使用して南北方向に一貫したトレンチを掘って土層の観察をおこなった。トレンチの深さは湧水砂層までにとどめた。その結果、７区は６区とほぼ同様の土層であったが、７区南端には暗渠が存在したほか北端には車道があったため、調査範囲を最小限にとどめる必要が生じ、まずトレンチの幅を少し広げてみた。トレンチ調査では、６区で出土したような木製品は出土しなかったため、全面調査は実施しなかった。８区は、北側では湧水砂層が深く、近世の真名井神社参道にともなうと思われる橋脚らしい柱根を確認したため、西側にトレンチの幅を拡張し柱根の分布範囲を確認することにした。ところが、湧水砂層に達する以前に壁面から大量の砂を含んだ湧水がトレンチ内に流れ込んで壁面が崩落し、特に東側の車道方向からの砂を含む湧水量が著しく危険な状態となったため、緊急に埋め戻さねばならない状況となった。夕暮れ時で暗く、柱根の図面はおろか写真も撮ることができなかった。このことは今回の調査の中で最も悔やまれる出来事であった。８区南側は、試掘トレンチで灰色系粘質土の厚い水平堆積の下に流水の層を確認した。トレンチの幅を少し広げて様子をみたが、遺構、遺物とも出土しなかったため、全面調査は実施しなかった。９区については、耕作基盤土層から須恵器や土師器片が多数出土したほか、その下に出雲国国庁の基盤面と同じ淡褐色砂質土（シルト）層の広がりを確認したため、全面調査を実施した。



第4図　4・5・6区トレンチ配置図

Ⅱ．調査結果報告

4　区

トレンチ調査をおこなったが、遺構、遺物とも出土しなかった。

・層序（第５図）

表土下約２m掘り下げたところ、最下層は小円礫で、その上には約50cmの厚さで砂層と粘質土層の複雑な堆積がみられた。緩やかな川の流れや滞水が繰り返された状況と思われ、これらの層からは著しい湧水がみられた。さらにその上には約１m厚さで灰色系の粘質土がほぼ水平に堆積しており、一部薄い砂層も挟まれていた。

上から３層目の灰褐色粘質土は松ぼっくりを大量に含む層で、近世以降に真名井神社参道に松並木が植えられた後の耕作土層である。

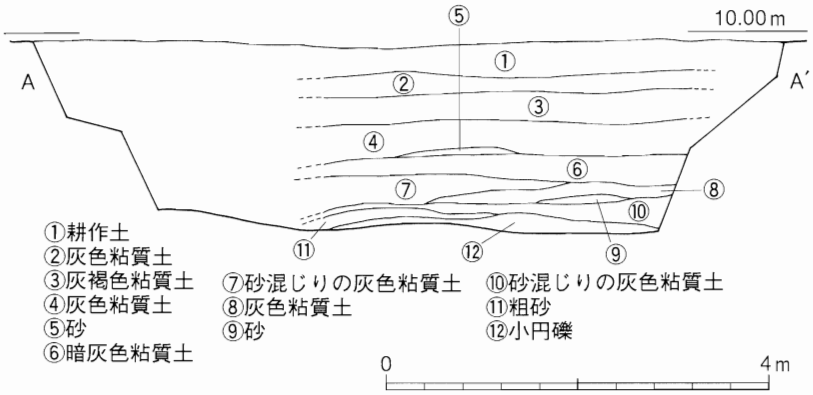
5　区

河原石の広がりを確認し、大河が流れていた時期のあることがわかった。遺物が出土していないため、川が流れていた時期は不明である。遺構は存在しなかった。

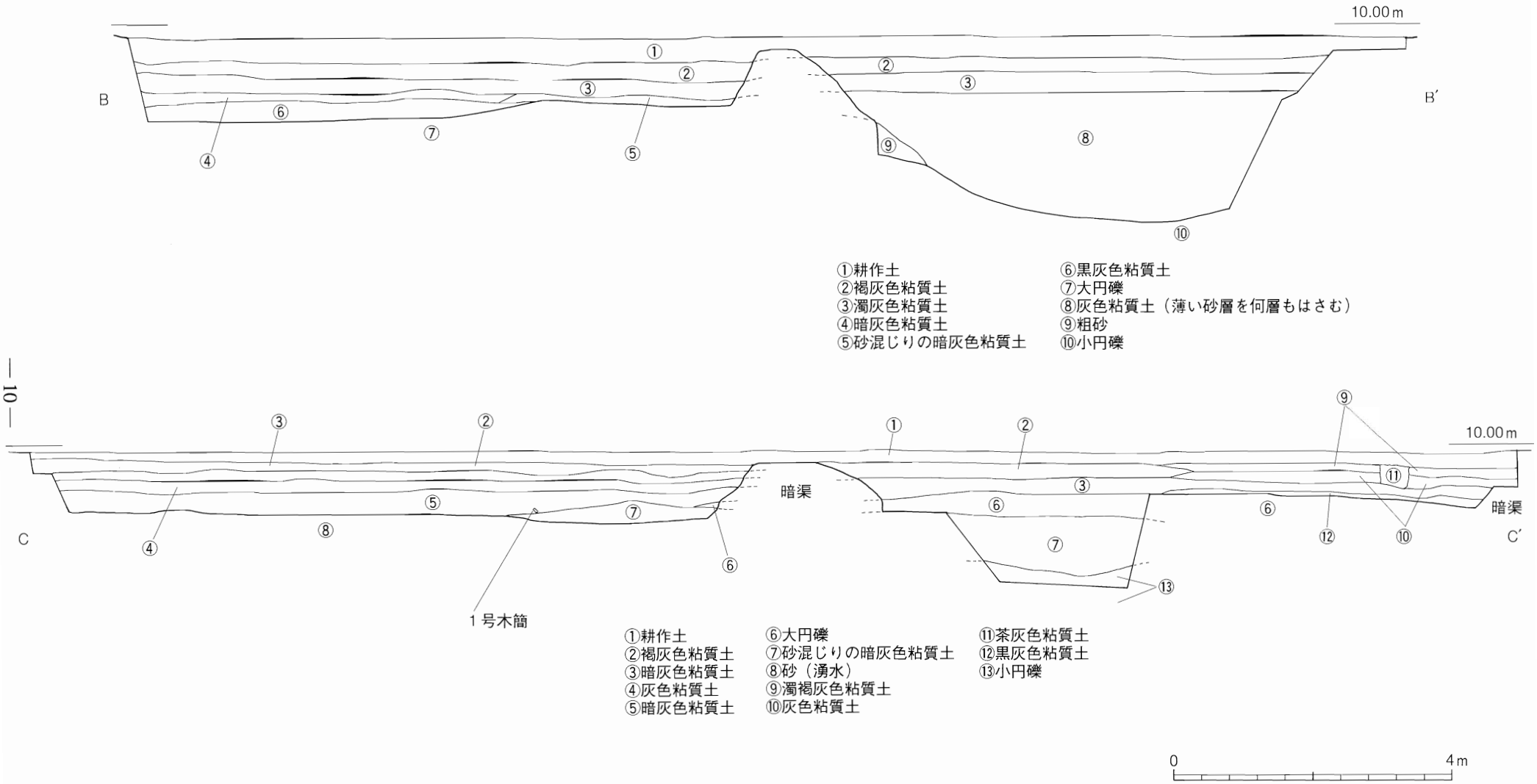
・層序（第６図）

最初の深掘トレンチ調査では表土下約2.6mの小円礫層まで掘り下げた。小円礫層は北方に向かって若干レベルが下がっている。深掘トレンチの南端では小円礫層の上に砂層が堆積しており、約１m北の小円礫上で消滅している。この砂や小円礫層の上には厚い灰色粘質土が堆積している。湧水の勢いが激しくて灰色粘質土下方の細かい層を分層及び記録することはできなかったが、小円礫層上約50cmは極めて薄い砂層と粘質土層が交互に堆積していた。

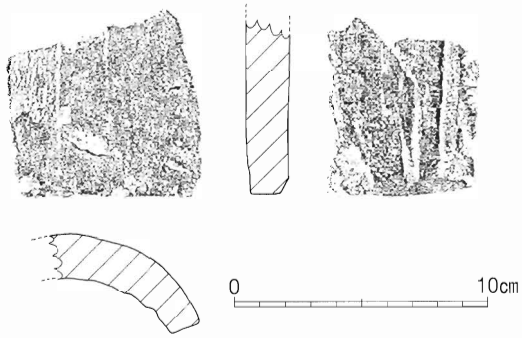
６区へ続く細長いトレンチは、径10cm強の大円礫が一面に広がっている面まで掘り下げた。大円礫層上面のレベルは地表面下１m前後と浅く、５区の南端から３mくらいで若干レベルの低下がみられた。円礫にはほとんど角張ったものが混じっていなかったことから、大河がある程度の流速を保ちながら、長期間にわたって流れていたと思われる。大円礫層の上には黒灰色粘質土が堆積していた。



第5図　4区トレンチ土層断面図



第6図　5・6区トレンチ土層断面図



第7図　5区出土瓦実測図

ここでの大円礫層と深掘トレンチでの小円礫層との切り合い関係は、深掘トレンチからの著しい湧水を防ぐために土手を残さねばならず、確認することはできなかった。大円礫層の上には濁黒灰色粘質土が堆積していた。上から３層目の濁灰色粘質土は松ぼっくりを大量に含む層で、４区で見られた灰褐色粘質土層に続くものである。この層の中から古代瓦片１点が出土した。

・遺物（第７図）

古代瓦１片が出土した。丸瓦の一部で、表側は縄目叩き、裏側は布目痕が観察できる。焼成は良好、色調は濃灰色である。

6　区

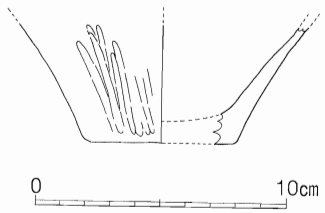
・層序（第６図）

暗渠を挟んで北と南では下層部の土層に違いがみられた。

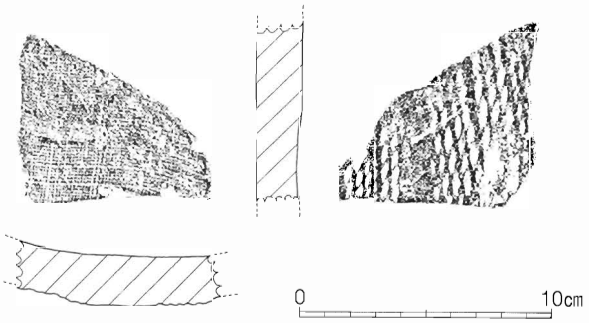
北側では５区で確認した径10cm強の大円礫層の続きまでの掘り下げをおこなった。ここでは大円礫層上面のレベルが５区よりも若干上がっているようである。このことから、大河の中心は６区付近で、５区にかけて浅くなり河原を形成していたと思われる。大円礫層の上には５区から続く黒灰色粘質土が堆積していた。

深掘トレンチでは、現地表面下約２ｍの小円礫層まで掘り下げた。小円礫層中からは弥生時代中期の土器片が１点出土した。小円礫層の上には薄い砂層を若干挟む暗灰色粘質土が厚く堆積し、その上に大円礫層が堆積していた。小円礫層を形成した河道が弥生時代には流れていたと判断されたため、大円礫層を形成した河道はそれよりもさらに新しい時期に流れていたものである。大円礫層の上は暗灰色粘質土層で、その上が現在の耕作基盤土層となっている。

深掘トレンチの南側では、地表面下約１ｍで湧水の著しい砂層となり、掘り下げの深さは湧水砂層の上面までとした。暗渠寄りの場所では、北側から続く黒灰色粘質土が湧水砂層の下に潜り込み、大円礫層の続きが約40cm程度のぞいて砂混じりの暗灰色粘質土上で終結していた。その上には暗灰色



第8図　6区出土土器実測図



第9図　6区出土瓦実測図

粘質土が堆積していた。この暗灰色粘質土中には砂層がみられず、葦類と思われる多くの植物遺体や昆虫遺体が含まれていたことから、典型的な沼地の層と考えてよいであろう。この層の中からは、丁寧な削りで加工された長さ20～40cm、厚さ１cm弱の木簡状木製品が多数出土したほか、木簡３点が出土した。木簡はいずれも暗灰色粘質土層中でも湧水砂層直上の深いレベルから出土した。木簡は字体および年号の記載から奈良時代のものと判断できたことから、暗灰色粘質土は奈良時代以降の堆積層と考えられる。

・遺構

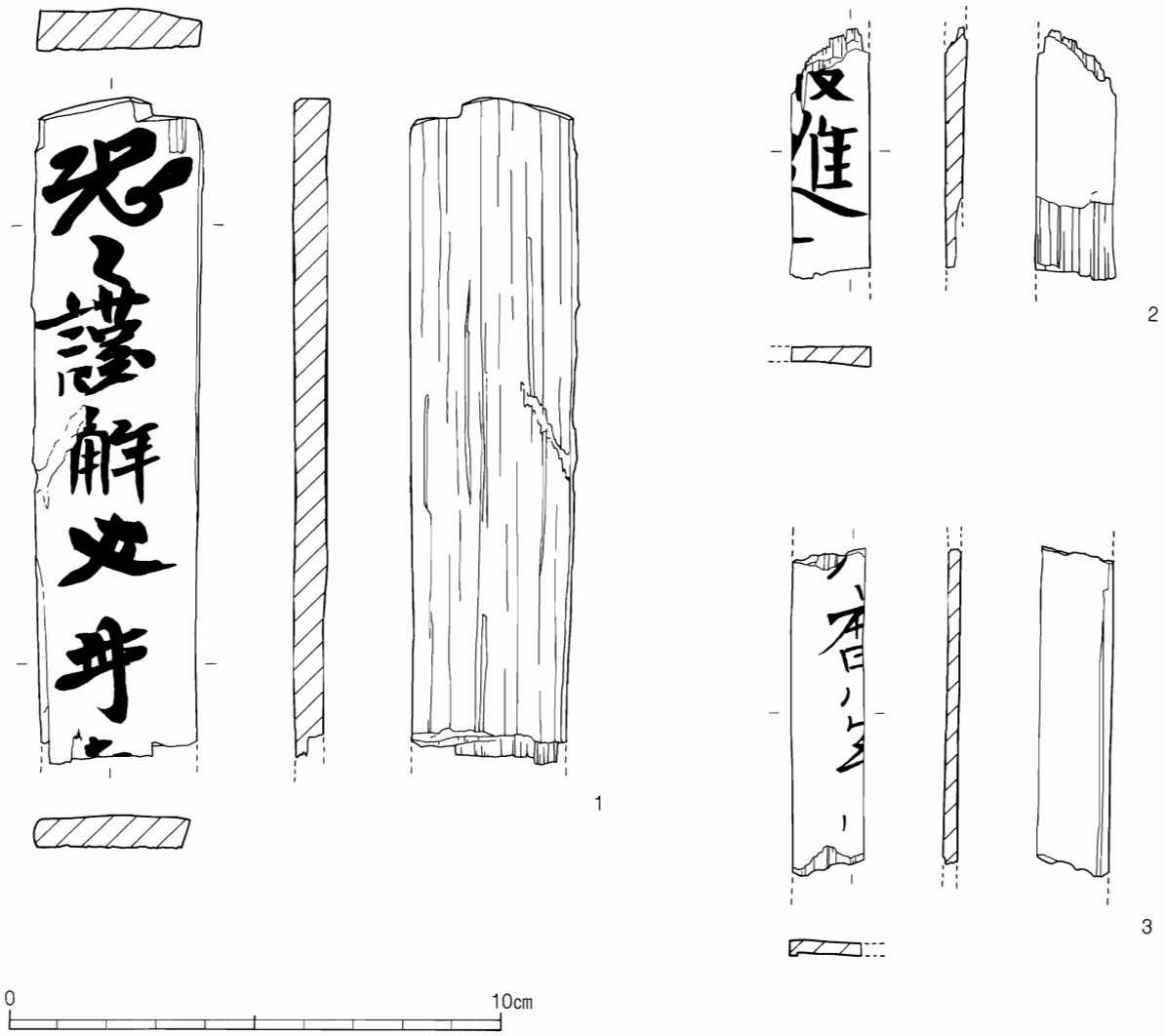
検出されなかった。

・遺物

須恵器片１点と木簡３点（第10図）のほか、木製品多数（第11図）が出土した。

須恵器片は暗灰色粘質土層から出土したが、甕胴部の小片であるため時期は不明である。図面化はしていない。

木簡は破片３点出土した。いずれも暗灰色粘質土層の下方からから出土したものである。以下で詳細に記す。



第10図　6区出土木簡実測図

①１号木簡（第10図１）

「恐々謹解□□□

［丈牛カ］

肉太の墨書７文字が残存している。上四文字は上申書の冒頭常套句「恐々謹解」と記されており、文書木簡の一部であることがわかる。この下の二文字は肉太の墨痕が明瞭であるにもかかわらず解読が困難で、最後の一文字は上端がわずかに残存するのみである。「謹解」の下の文字については、人名が記されている可能性が高く、「丈牛」と解釈できるかもしれないが現時点では断定できない[註1]。

この木簡は比較的残存状況が良く、上端は左右から段違いに刃が入れられているため、「ㄴ」状を呈している。上端が「ㄴ」状に加工されている意味は不明である。墨書は上記したとおり７文字の存在が確認できるが、７文字目から下は欠損している。両側面はケズリで、裏面は未調整である。

法量は、残存長13.8cm、幅3.35cm、厚さ0.8cmを測る。使用材はヒノキ科アスナロ属である。

②２号木簡（第10図２）

□進

肉太の墨書２文字のみが残存している。「進」の上には「又」の文字が見えるが、やや右寄りに書かれているため旁りである可能性が高い[註2]。

この木簡は木質の含水率が高くて残存状況が悪く、墨痕も不明瞭である。上下端は欠損し、左側は割れている。右側面、裏面はケズリである。

法量は、残存長5.2cm、残存幅1.6cm、厚さ0.4cmを測る。使用材はヒノキ科アスナロ属である。

③３号木簡（第10図３）

延暦八年□

肉細の墨書５文字のみが残存している。「延」は下端部しか残存していないが、「延」の一部を観察することができるため、年号「延暦八年」と読める[註3]。延暦八年は西暦789年で、奈良時代末期にあたる。

この木簡は、木質の残存状況は良好だが、墨痕がやや不明瞭である。上下端は欠損し、右側は割れている。左側面と裏面はケズリである。

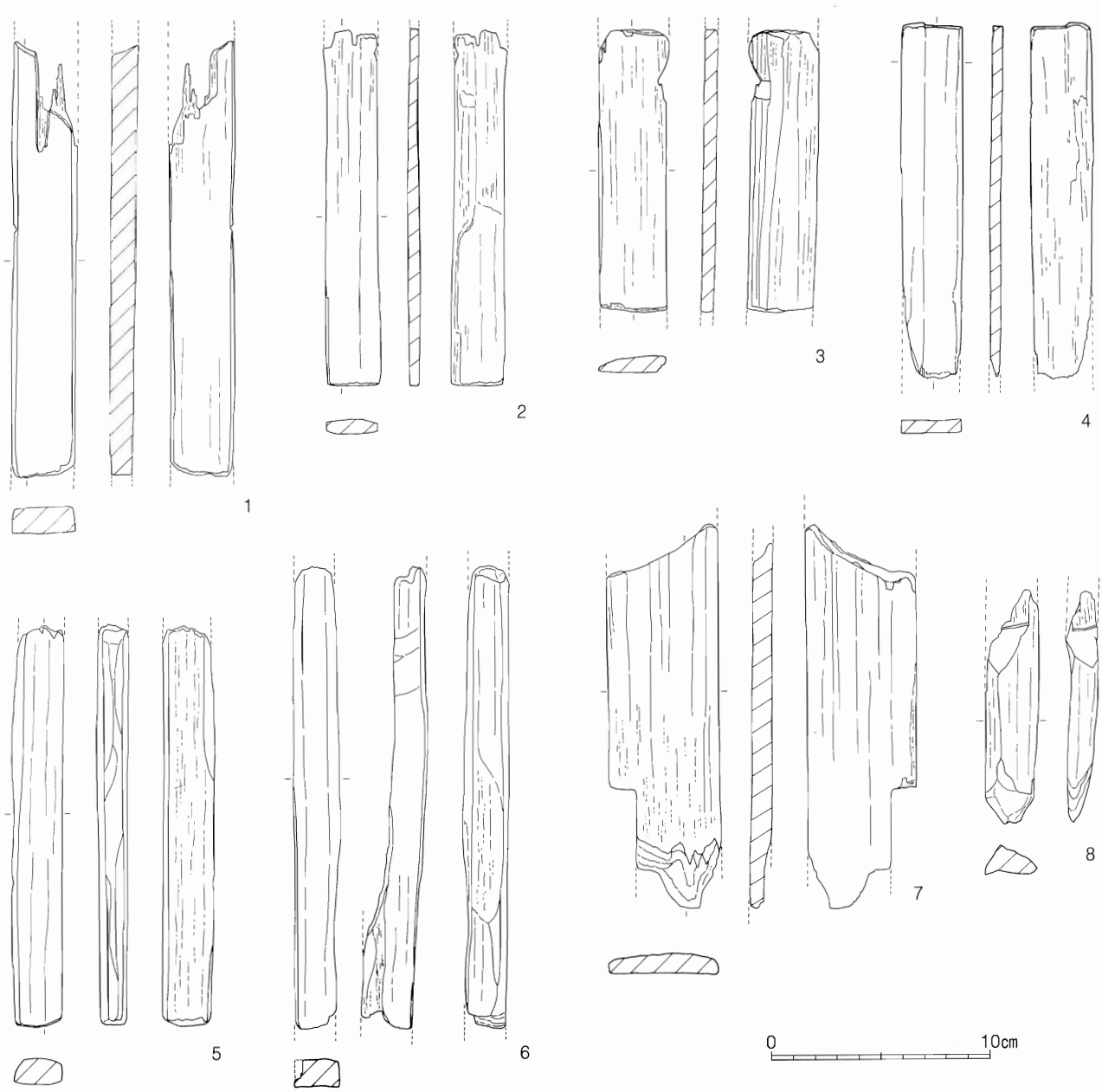
法量は、残存長6.7cm、残存幅1.5cm、厚さ0.4cmを測る。使用材はスギである。

註１　平川南氏は、「恐々謹解」と同様の意味で使用されていた「牒」という冒頭常套句の事例、平城宮跡から出土した木簡「牒上　男縄御所」、新潟県箕輪遺跡から出土した木簡「牒　三宅史御所　応□□□　□　□に着目され、「恐々謹解」の下にも人名が記されている可能性が高いことを指摘された。
　また、平川氏から「恐々謹解」の下の２文字について、断定できる段階ではないが、あくまでも一候補として「丈牛」と読めるかもしれないとの御教示をいただいた。

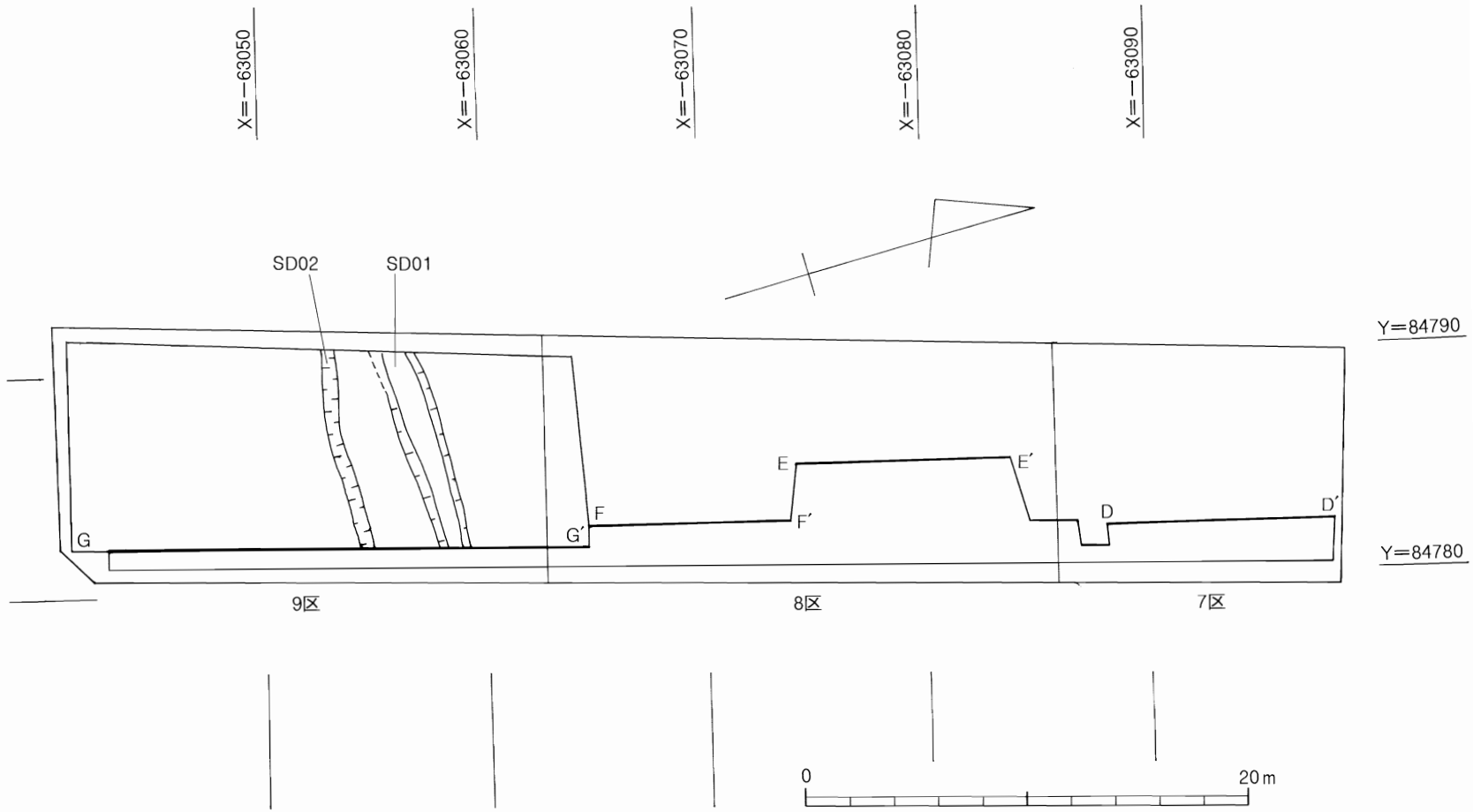
註２　平川氏の御教示による。

註３　平川氏の御教示による。

第11図１～４は木簡状木製品である。いずれも幅は３cm前後、厚さは１cm弱を測る。各面とも丁寧に削られているものが多いが、全て欠損品で完形のものは無い。すべて赤外線を照射したが、墨痕はみられなかった。５・６は木簡状木製品に近似しており、丁寧な削りが施されているが、形状が不整形なものである。７は板状木製品の一部で、幅５cm、厚さ１cm強を測り、切れ込みの一部が残っている。８は先端が杭状に加工された用途不明品である。先端部分には火を受けた痕跡がみられる。



第11図　6区出土木製品実測図



第12図　7・8・9区トレンチ配置図

7　区

・層序（第13図）

6区南側とほぼ同様の堆積状況で、表土下約1.1mで湧水砂層となる。湧水砂層直上は有機質を多く含む暗灰色粘質土で6区から続くものである。その上層は6区と若干違っており、灰色粘質土、白色小石を含む灰色粘質土と細分される。いずれも水平堆積である。

南端部については、現在も機能している暗渠が存在したため観察できなかった。

・遺構

検出されなかった。

・遺物

出土しなかった。

8　区

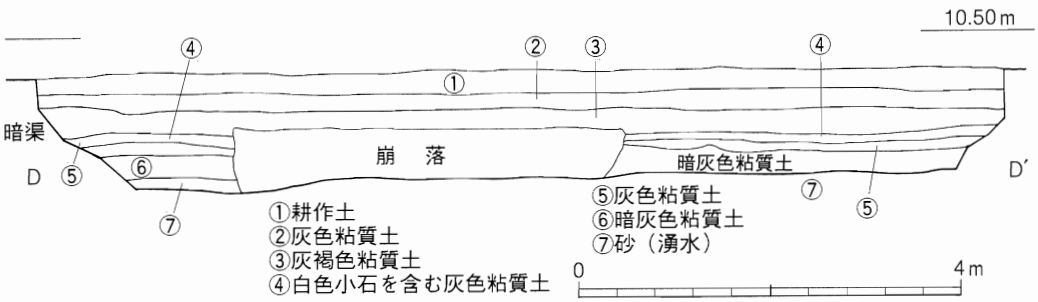
・層序（第14図）

北側約半分については、重機による掘削中に道路側からの砂を含む湧水が著しくて危険な状況に陥ったため、緊急埋め戻しを余儀なくされた。したがって、土層堆積状況図は作成することができなかった。下層部の状況については記述のみで報告する。

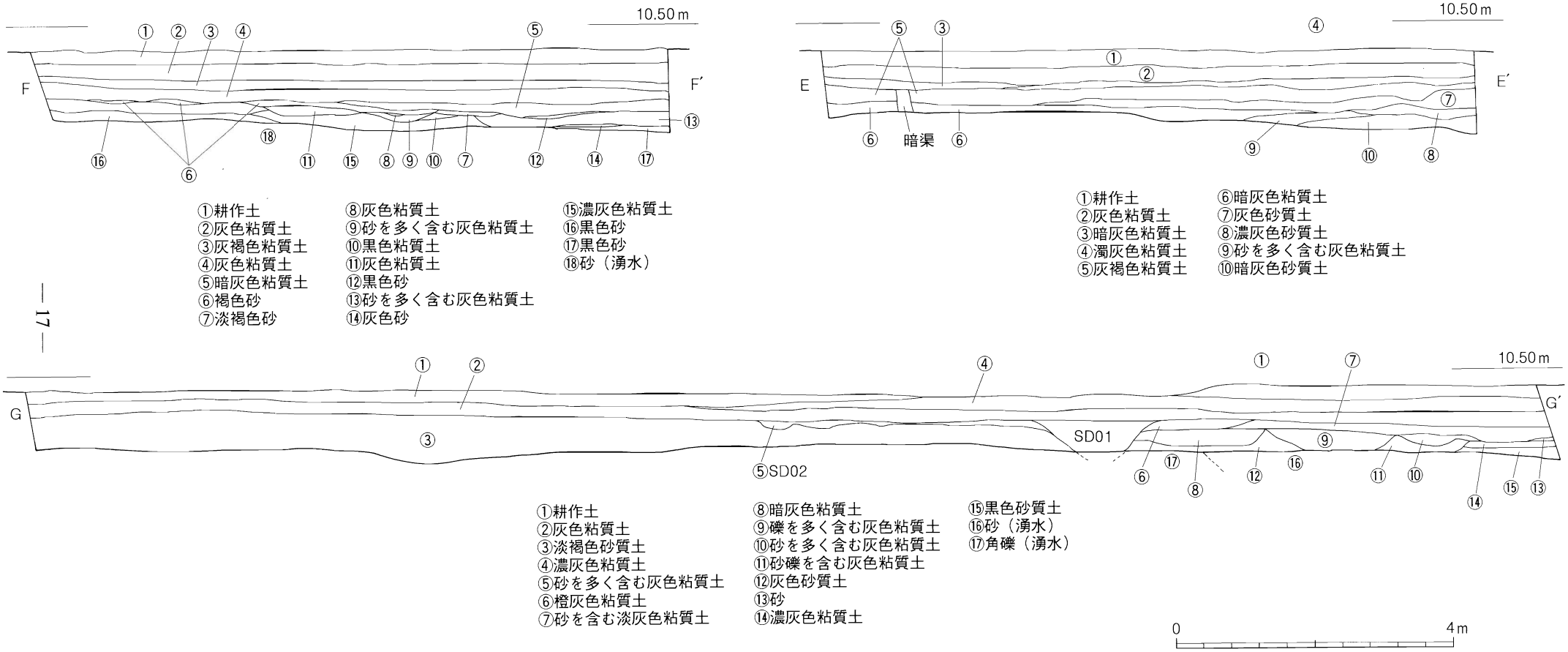
掘り下げをおこなった最下層、地表面下約2m強の深さでは小円礫の層があり旧河道が存在した。小円礫層の中から弥生時代中期の土器1片が出土したことにより、弥生時代中期には存在した河道と思われる。その河道の上には砂層を含む灰色粘質土系の厚い堆積が存在し、地表面下約1.5m位で径10cm強の橋脚と思われる柱根10本程度を検出した。この柱根の範囲を確認するため掘削範囲を西側に広げたところ、調査区東端より3m位までの間でおさまった。以上が図面化できなかった地面下の様子である。

湧水の噴出を止めるために大幅に埋め戻しをした結果、分層および図面化できた土層はいたって浅いレベルまでとなった。

8区北側の土層は暗渠部分を境に7区とは全く異なっており、ここでは湧水砂層を大きく切り込んで暗灰色系粘質土層が堆積していた。7区ではほぼ水平堆積となっていたのに対し、砂を多く含む灰色粘質土は黒灰色砂質土層を切って南に下がっている。その上に堆積した暗灰色粘質土も明瞭に図面化できていないが南に下がる堆積である。8区ほぼ中央付近で再び地表面下1.1mで湧水砂層がみら



第13図　7区土層断面図



第14図　8・9区土層断面図

れることから、湧水砂層を切って落ち込んだ暗灰色系粘質土は８区中央以北で立ち上がっているはずであるが、前記した事情により確実な地点を押さえることはできなかった。８区のほぼ中央の褐灰色粘質土層下で機能していない暗渠を確認したが、深さから考えて耕地整理以前の耕作に伴うものと思われる。

８区南側は地表面下1.1mで湧水砂層に達する。湧水砂層の上には薄い黒色砂層があり、一部それを切って湧水砂層まで落ち込む砂を多く含む灰色粘質土の層が堆積している。さらに、砂を多く含む灰色粘質土層を切って落ち込む溝状に堆積する灰色系粘質土層もあり、その上には薄い褐色砂層が堆積している。その上はほぼ水平堆積の層となっている。

・遺構

検出されなかった。

・遺物（第15図）

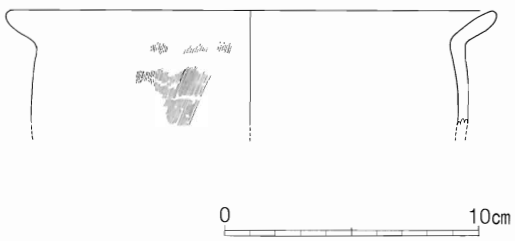
自然河道の小円礫層から弥生時代中期初頭の甕口縁部小片が出土した。口縁は「く」の字状に外反するもので、胎土は緻密、焼成は良好、色調は内外面とも明褐色を呈する。調整は、外面は細かいハケメ、内面は風化で、復原口径19.2cm、復原頸径16.8cmを測る。

９　区

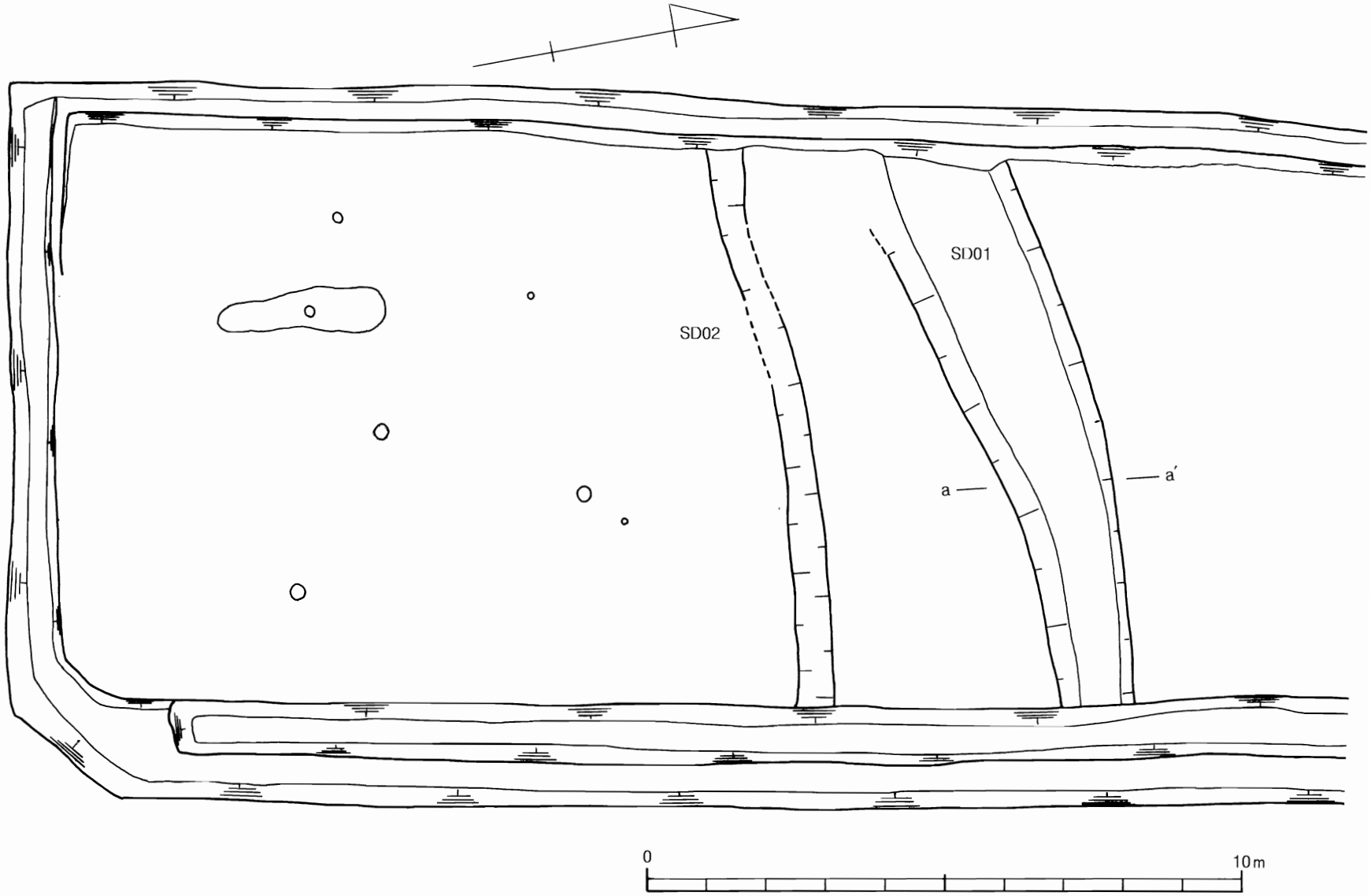
・層序（第14図）

南寄りの場所では表土下約80cmが湧水角礫層であった。湧水角礫層上と耕作基盤土層の間は褐色砂質土層１層のみであるが、褐色砂質土層は北に向かって徐々にレベルが下がっており、上方には橙灰色粘質土が堆積している。褐色砂質土は９区南端から約7.6mの地点で消滅しており、ちょうどその地点で橙灰色粘質土層を切って溝ＳＤ01の断面が観察できる。ＳＤ01の埋没層序は第17図のとおりで、最下層は暗灰色砂質土、その上に灰色粘質土系の数層が堆積し、一部淡橙灰色砂質土を挟んでさらに淡橙灰色粘質土が堆積して埋没している。ＳＤ01はいったん埋没した後に橙灰色粘質土層で覆われているが、その層を切って２回目の溝の掘り込みががおこなわれている。最後に掘られた溝は礫混じりの砂層で埋没しており、その層からは弥生時代前期～後期の幅広い時期の土器小片多数が出土した。

溝ＳＤ01以北の土層は南側とは大きく異なっており、最下の湧水層は礫層を切って砂層に変化している。湧水砂層上約30cmは一部灰色系粘質土を挟む灰色系砂質土で、その上に暗灰色粘質土が水平堆積し、その上が現在の耕作基盤土である。



第15図　8区出土土器実測図



第16図　9区完掘状況図

・遺構（16図）

溝２条と若干のピットを検出した。

溝ＳＤ01は褐色砂質土層がまさに消滅しようとする位置で、西－東方向に、橙灰色粘質土層上面から湧水礫層まで掘り込まれていた。流れの方向は不明である。溝の断面は緩やかなＵ字状を呈しており、幅は西側が広くて2.5m、東側1.5m、深さは約0.6mを測る。ただし、セクションを観察すると、最低２回は掘り返して利用された痕跡があるため、この深さは最深部の数値である。

ＳＤ01の埋土は、下層が粘質土を中心としていることから澱みがちであったと推察され、最後に掘られた溝は小石を密に含んだ砂で埋まっていたことから、水の流れが速かったものと推察される。溝底面がプラン検出面から非常に浅いことから、溝が機能していた時期の地表面はプラン検出面より高いレベルであったと思われる。埋土中からは、弥生時代前期を含み後期を中心とする幅広い時期の土器片が出土した（第18図）。割合的には弥生時代後期の土器が大半を占めていたようである。特に上層の小礫を多く含む砂層から多く出土したようであるが、土器片の時期と層位の間に整合性はみられなかった。土器片はいずれも小さくて接合できる個体はなかったが、ほとんど風化が見られなかったことから、周辺に生活遺跡が存在することを示しているものと考えられる。

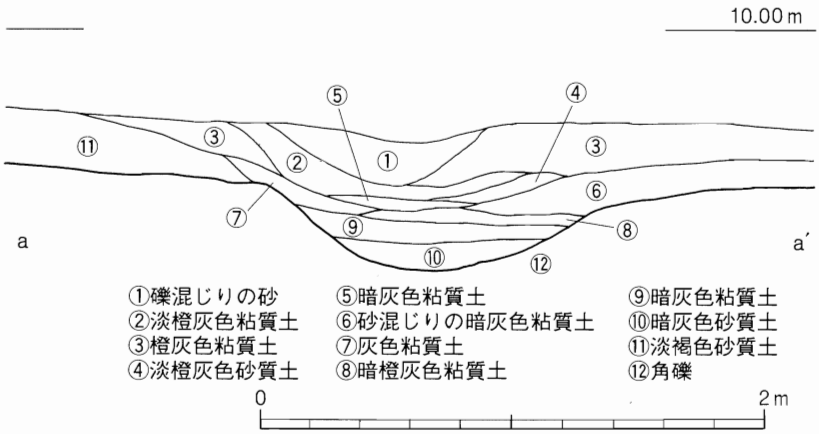
溝ＳＤ02は溝ＳＤ01から約５m南の位置で、西－東方向を指向しており、ＳＤ01とほぼ並行して掘られていた。溝の断面は緩やかなＵ字状を呈しており、検出時の最大幅60cm、深さ約12cmを測る。埋土は周囲の淡褐色砂質土よりやや濃い褐色砂質土一層で、遺物は出土しなかった。

ピットは、埋土が若干灰色がかっている程度で明瞭なものではなく、建物等を復原することはできなかった。

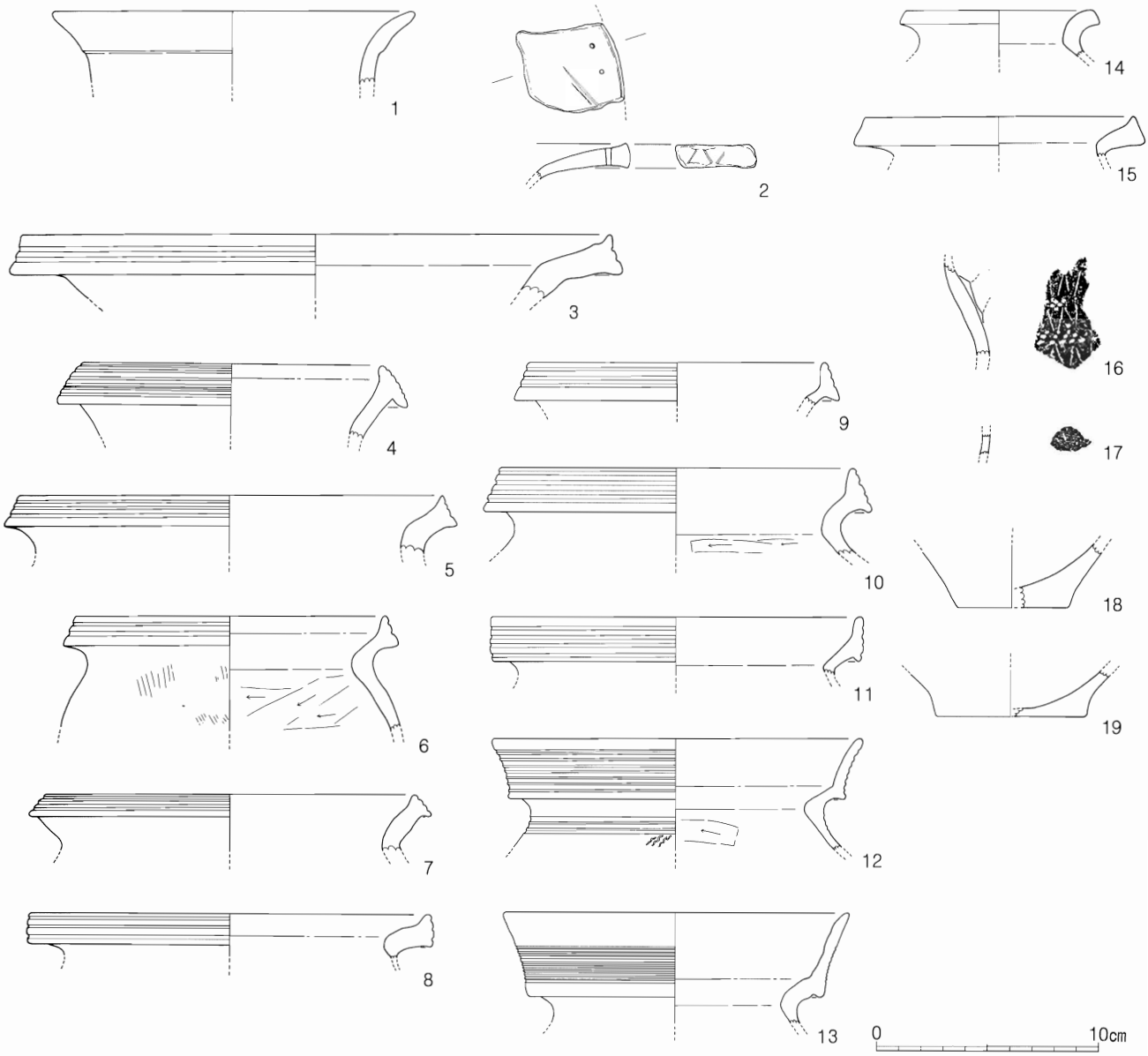
・遺物

溝ＳＤ01中から弥生時代の土器小片が多く出土した。前期の壺１点と中期の壺１点を確認したが、他は全て後期の土器であった。詳細は後頁の土器観察表に記す。

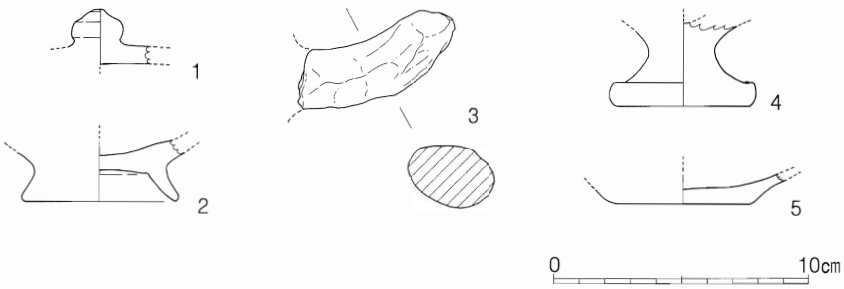
耕作基盤土の灰色粘質土層からは幅広い時期の遺物が出土した。土器はいずれも小片で、古墳時代後期の須恵器が最も古く、現代の土器片まで出土したが、11世紀前後の土器片の割合が多かった。詳細は後頁の土器観察表に記す。



第17図　溝SD01埋土土層断面図

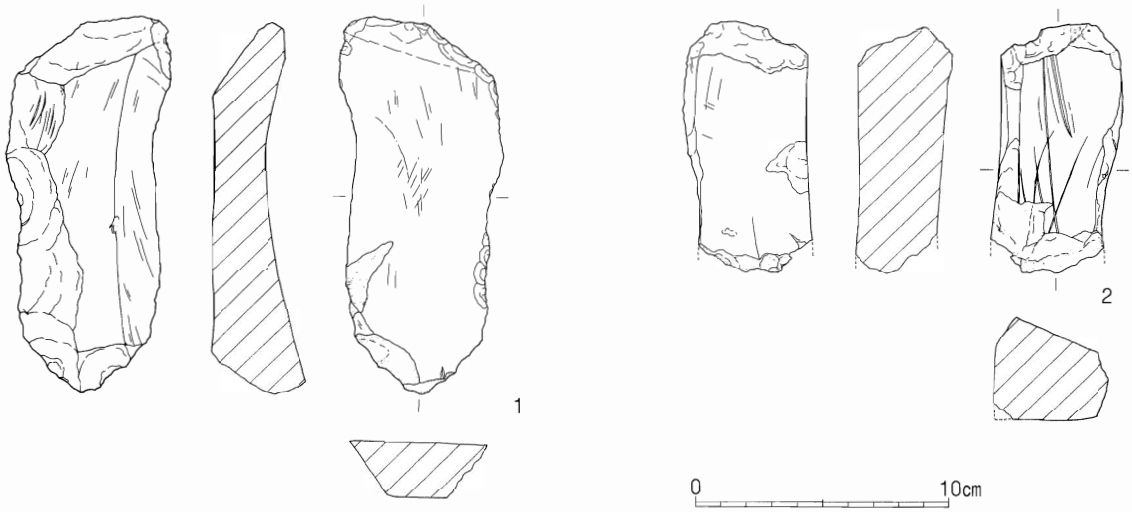


第18図　溝SD01出土土器実測図

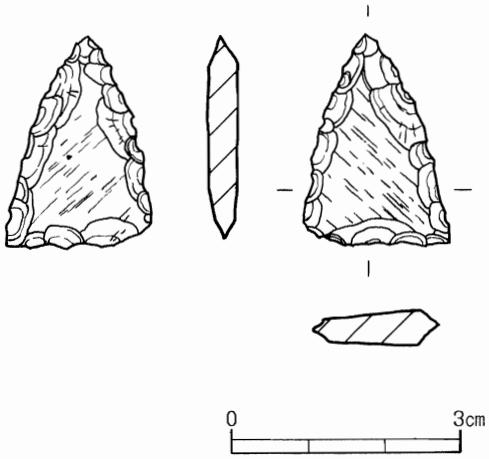


第19図　9区包含層出土土器実測図

石器は少なく、製品では砥石２点、鏃１点が出土した。製品以外では黒曜石の小さな剥片数点が出土した。砥石（第20図）の１は、石材不明、法量は長さ15.1cm、幅6.5cm、厚さ3.4cm、重さ262gを測る。２は、石材不明、法量は長さ9.9cm、幅5.1cm、厚さ4.1cm、重さ277gを測る。鏃（第21図）は、安山岩製の三角鏃で、法量は長さ2.8cm、幅1.9cm、厚さ0.4cm、重さ2.6gを測る。



第20図　9区包含層出土砥石実測図



第21図　9区包含層出土石鏃実測図

土　器　観　察　表

挿図番号	種類	器種	法量(cm)	胎　土	焼成	色　調	調整・手法の特徴等	備　考
18図－1	弥生	壺	口径(15.8)	1mm～2mmの砂粒を多く含む	良好	(外)淡橙色 (内)淡橙色	(外)風化 (内)風化	
18図－2	弥生	壺	口径(14.3)	0.5mm前後の砂粒を多く含む	良好	(外)淡橙褐色 (内)暗灰色	(外)風化 (内)口縁端部文様有	穿孔2ヵ所有
18図－3	弥生	壺	口径(26.4)	2mm前後の砂粒を多く含む	良好	(外)淡橙色 (内)淡橙色	(外)風化、口縁端部2条擬凹線 (内)風化	
18図－4	弥生	壺	口径(13.4)	0.5mm以下の砂粒を多く含む	良好	(外)淡橙色 (内)淡灰色	(外)ヨコナデ、口縁端部6条擬凹線 (内)ヨコナデ	
18図－5	弥生	甕	口径(18.8)	2mm前後の砂粒を多く含む	良好	(外)淡橙褐色、一部暗灰色(内)淡橙色	(外)ヨコナデ、口縁端部3条擬凹線 (内)ヨコナデ	
18図－6	弥生	甕	口径(13.8)	2mm前後の砂粒を多く含む	良好	(外)淡橙色 (内)淡橙褐色	(外)ヨコナデ後ハケメ、口縁端部2条擬凹線(内)ヨコナデ、ヘラケズリ	
18図－7	弥生	甕	口径(16.4)	0.5～2mmの砂粒を多く含む	良好	(外)淡褐色 (内)淡褐色	(外)ヨコナデ、口縁端部3条擬凹線 (内)ヨコナデ	
18図－8	弥生	甕	口径(17.4)	密	良好	(外)淡褐色 (内)淡褐色	(外)ヨコナデ、口縁端部3条擬凹線 (内)ヨコナデ	
18図－9	弥生	甕	口径(12.8)	1mm以下の砂粒を多く含む	良好	(外)淡橙褐色 (内)淡橙褐色	(外)ヨコナデ、口縁端部3条擬凹線 (内)ヨコナデ	
18図－10	弥生	甕	口径(15.4)	0.5mm前後の砂粒を多く含む	良好	(外)スス付着、暗橙色(内)暗橙褐色	(外)ヨコナデ、口縁端部4条擬凹線 (内)ヨコナデ、ヘラケズリ	
18図－11	弥生	甕	口径(16.4)	2mm前後の砂粒を多く含む	良好	(外)淡橙色 (内)淡橙色	(外)ヨコナデ、口縁端部4条擬凹線 (内)ヨコナデ	
18図－12	弥生	甕	口径(16.4)	0.5mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	(外)スス付着、暗褐色(内)黒灰色	(外)ヨコナデ、貝殻施文有、口縁端部6条擬凹線(内)ヨコナデ、ヘラケズリ	
18図－13	弥生	甕	口径(15.4)	1mm前後の砂粒を多く含む	良好	(外)暗灰褐色 (内)暗灰色、淡橙色	(外)ナデ、細かい擬凹線 (内)ナデ	口縁外面スス付着
18図－14	弥生	甕	口径(7.6)	0.5～1mmの砂粒を多く含む	良好	(外)淡橙褐色 (内)暗灰色	(外)ヨコナデ (内)ヨコナデ	
18図－15	弥生	甕	口径(12.0)	1mm前後の砂粒を多く含む	良好	(外)淡橙色 (内)淡橙色	(外)ヨコナデ (内)ヨコナデ	
18図－16	弥生	注口土器		1mm以下の砂粒を含む	良好	(外)白橙灰色(内)白橙灰色(断)白橙灰色	(外)文様有 (内)ナデ	
18図－17	弥生	(胴部)		密、0.5mm以下の砂粒を含む	良好	(外)明橙褐色(内)明橙褐色(断)明橙褐色	(外)風化 (内)布目有	製塩土器？
18図－18	弥生	(底部)	底径(4.8)	2mm以下の砂粒を多く含む	良好	(外)淡褐色 (内)暗灰色	(外)風化 (内)風化	
18図－19	弥生	(底部)	底径(6.8)	1mm前後の砂粒を多く含む	良好	(外)暗灰褐色 (内)暗灰褐色	(外)ナデ (内)ケズリ	
19図－1	須恵器	(把手)		密	良好	(外)灰色 (内)灰色	(外)ヨコナデ	
19図－2	土師器	高台付皿	底径(6.2)	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	(外)黄白茶色 (内)黄白茶色	(外)ナデ (内)ナデ	
19図－3	土師器	(把手)		1mm前後の砂粒を含む	良好	(外)淡茶色(内)淡茶色(断)灰色	(外)ナデ (断)楕円形	
19図－4	土師器	柱状高台付皿	底　径5.2 残存高3.7	密	良好	(外)淡褐色 (内)淡褐色	(外)体部ナデ、底部糸切後ナデ消し	皿部欠損
19図－5	土師器	皿	底径15.3	密、1mm程の砂粒をわずかに含む	良好	(外)橙色(内)橙色(断)橙色	(外)風化 (内)風化	

※法量の（　）内数値は復原値を表す。

Ⅲ．小　　結

今年度の調査で最も主眼をおいていた古代山陰道の遺構を検出することはできなかったが、以下のような重要な調査成果を得た。

⑴ 7区南端の暗渠を挟んで北と南では土層の堆積状況に大きな違いが見られた。

⑵ 7区暗渠北側は6区から続く沼地状土層が存在し、6区ではその層の最下層付近から奈良時代の木簡が出土した。

⑶ 8区北側で条里界線に比定できるかもしれない、橋脚らしい柱根を観察した。

上記した⑴と⑶の事実から、意宇平野条里の界線が8区北側に存在したことはほぼ確実であろう。水路自体が条里の界線であったかもしれないし、界線の道路端に水路があった、または機能しなくなった道路を利用して水路が作られたとも考えられる。では、そこに古代山陰道は存在し得たのかということになるが、⑵の事実より建物を伴う施設等が存在し得ず、人間の生活に密着した場所でもない葦類が生い茂った沼地の土層から木簡が出土したということは、この場所が役人の往来する道路の近くであった可能性は非常に高いと推察される。

単純に考えて、7区北側のような地盤が不安定な低湿地域に道路を建設する場合には、降水時のぬかるみや浸水を避けるために土を盛って小高くする工法がとられていた可能性が高い。もし、このような工法が用いられていたとしたら、維持管理が不十分になった時点での崩壊は早く、後世の耕作で削平され、すでに意宇川の氾濫によって押し流されて消滅してしまったことは想像に難くない。

次に、土層観察で得られた成果から古環境の復原を試みてみたい。

意宇平野の大坪遺跡付近は比較的高低差が少ない扇状地形である。伏流水が流れる湧水砂層はややしまりが見られるものの、氷河期にまで遡るものではなく、縄文時代以降に堆積したものである。[註1]

9区の南端付近では湧水砂層が湧水礫層に変化しており、その上には比較的安定した淡褐色砂質土が堆積していた。大草町ではこの層の上面から出雲国国庁の平面プランが検出されている。淡褐色砂質土層は北にいくにつれてレベルが下がっており、この層がまさに湧水礫層上で消滅しようとする地点で、弥生時代後期を中心とした土器小片を密に含んだ溝ＳＤ01が検出された。溝の下場は湧水礫層直上である。この溝の下場はプラン検出面から非常に浅いレベルであるにもかかわらず、埋土は水の流れが速かったことを示唆していた。溝が機能していた時期の地表面は、プラン検出レベルよりも高い標高であって、それが後世に削平された状況であると考えられよう。溝ＳＤ01から8区にかけては古代山陰道の有力推定地であるが、灰色系粘質土がほぼ水平に堆積しており、下方では砂を挟んでいることから、低湿地であったと思われる。

註1　中村唯史氏のご教示による。

5．平成12年度調査について

Ⅰ．調査の概要

平成12年度は、ビニールハウスで畑作がおこなわれている13区を除いて、残りの１～３区、10～12、14、15区について調査を実施した。

１～３区は、扇状地の扇端にあたり、標高が低くて現在でも降雨時には半ば池のような状態になる場所である。平成11年度に実施した４、５区の調査成果から遺跡が存在する可能性は非常に低いと考えられたため、当初は重機を利用して各区に湧水砂層までの深掘りのトレンチを１カ所ずつ掘り、土層の堆積状況を観察することにした（第22図）。

ところが、１区のトレンチからほぼ完形の土器２点が出土したため、１区の北側半分については全面調査（以下、拡張調査区と称する）を実施した（第22図）。その結果、拡張調査区の南東角からは多量の木製品が出土した。また、２区では意宇平野の扇状地形成以前から存在する基盤の層、灰白色粘土層を検出した。この粘土層は意宇平野北辺のところどころに分布しているもので、最近まで瓦の粘土として利用されてきたほか、間内遺跡では弥生時代や古墳時代の粘土採掘坑が検出されている。３区では１区と近似した旧河道状の堆積層を確認した。以上のような結果から、さらに木製品を掘りあげ、灰白色粘土層上面で粘土採掘坑等の遺構の有無を確認し、灰白色粘土層の広がりを明確にするために、灰白色粘土層北端と南端の浸食状況を調査する必要が生じた。以上の理由により、１～３区にかけては全面調査が必要となったが、調査日数等の不足により、全面調査は平成13年度に実施することにした。

10区以南は、地形的に若干高く、10～12区は、前年度に調査を実施した９区から続く淡褐色砂質土層上の遺構面が想定されたため、全面調査を実施した（第26図）。その結果、耕作基盤土層直下が淡褐色砂質土層上面となっており、10区では弥生時代後期～古墳時代前期の溝を検出し、12区では時期不明の掘立柱建物跡を検出した。また、幅の狭いトレンチを南北に湧水砂（礫）層まで掘り下げ、土層堆積状況の観察もおこなった。14、15区も同様の調査をおこなったが、14区では現在の耕作基盤土層の下に古い時期の耕作土が存在し、12区に続く明確な遺構面は検出できなかった。幅の狭いトレンチを南北方向に湧水砂層まで掘り下げたところ、これまで古墳時代後期の遺構面と考えていた淡褐色砂質土層の下に弥生土器の細片を含む薄い層を確認し全面的な掘り下げをおこなった。土器の小片と多少の炭が出土したが、遺構は検出できなかった。15区では、古墳時代後期の遺構面を検出した。幅の狭いトレンチを南北に湧水砂（礫）層まで掘り下げたところ、意宇川の氾濫原状の堆積状況を観察した。

以下で調査区ごとに詳細を記す。

Ⅱ．調査結果報告

1　区

まずトレンチ調査をおこなった結果、土器を包含する層を確認したことから、北側半分強について調査区を拡張した。ただし、湧水量が著しいため、拡張区の調査をおこなう深さは土器が出土した灰色粘質土層の下面までとした。トレンチ部分は深く掘り下げたので、以下でトレンチ調査区と拡張調査区に分けて報告する。

トレンチ調査区

・層序（第23図）

湧水が著しいため、掘り下げの深さは地表面下2.2mの植物遺体層までとした。北端の一部では植物遺体層の下に湧水砂層を確認した。

最下層は湧水砂層で、その上に厚い植物遺体層が南下がりに堆積していた。その上には薄い砂層と植物遺体層が交互に堆積しており、これらも南に傾斜していた。その上は暗灰色粘質土が南下がりに堆積し、南端では砂層によって切られていた。さらに上には40～50cm厚さの灰色粘質土が堆積しており、その層中からは古墳時代前期の土器が出土した。この層も、南端では砂層、植物遺体層によって切られていた。南端で灰色粘質土を切った砂層の上には灰色粘質土系の層が堆積し、標高8.5mのレベルで上層の暗灰褐色粘質土のほぼ水平な下場となっている。暗灰褐色粘質土上の灰褐色粘質土は松ぼっくりを多く含む層である。

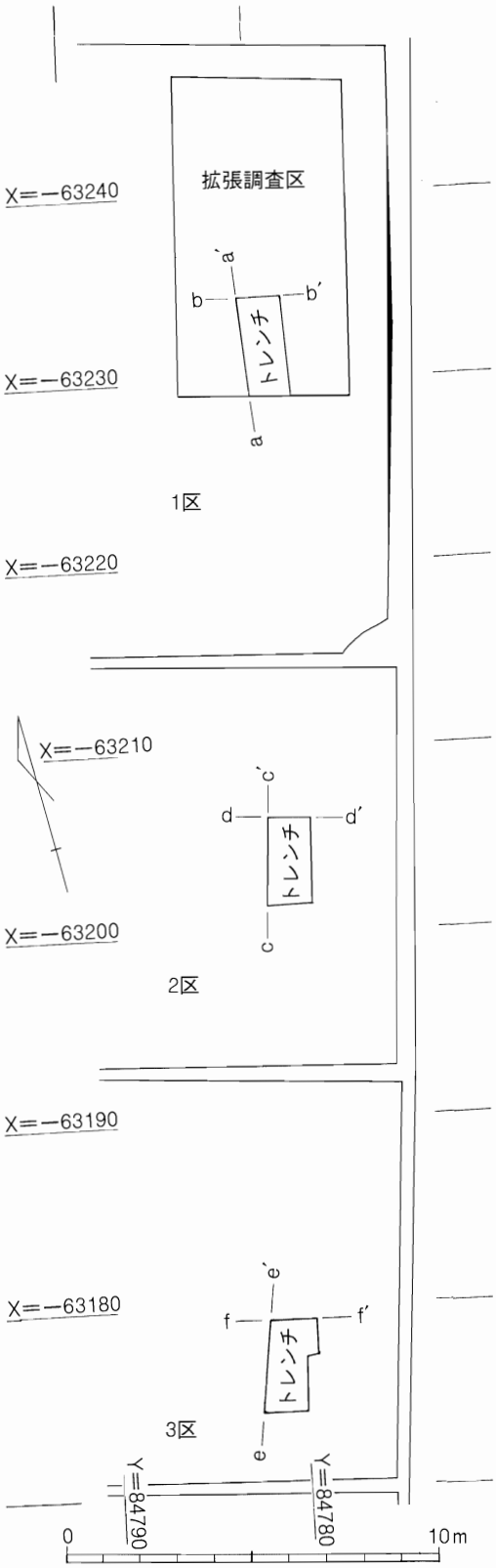
このトレンチは湧水が著しいため、特に下方での細かい分層はできなかった。

・遺構

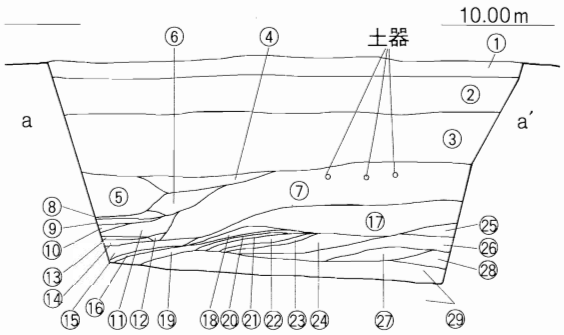
検出されなかった。

・遺物

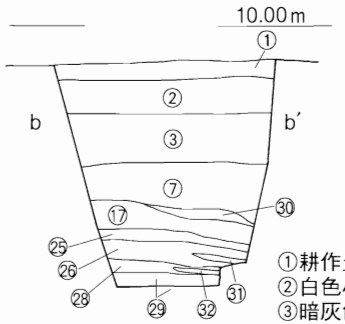
ほぼ完形と思われる土器３点を確認したが、壁面が大きく崩落して水没したため、１点の上部のみを取り上げることができた（第24図）。この土器は口縁端部がやや厚い複合口縁の土師器の甕で、胎土は緻密、焼

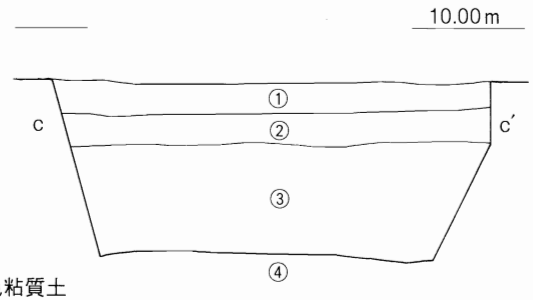


第22図　1～3区トレンチ配置図

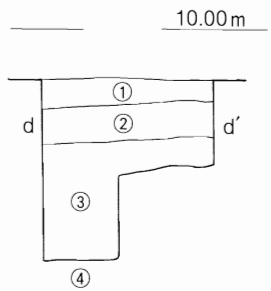


1区トレンチ



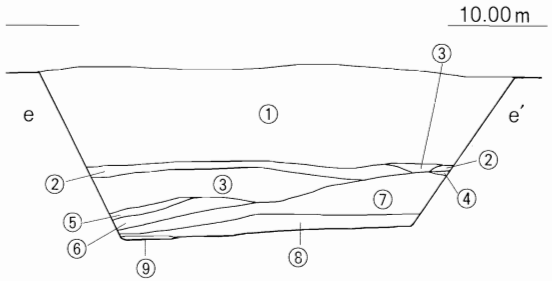


2区トレンチ

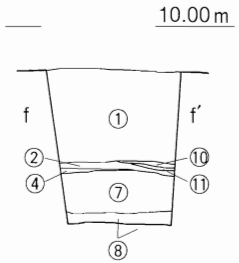


①黒褐色粘質土
②白色小石を含む黒褐色粘質土
③白色粘土
④淡褐色粘土

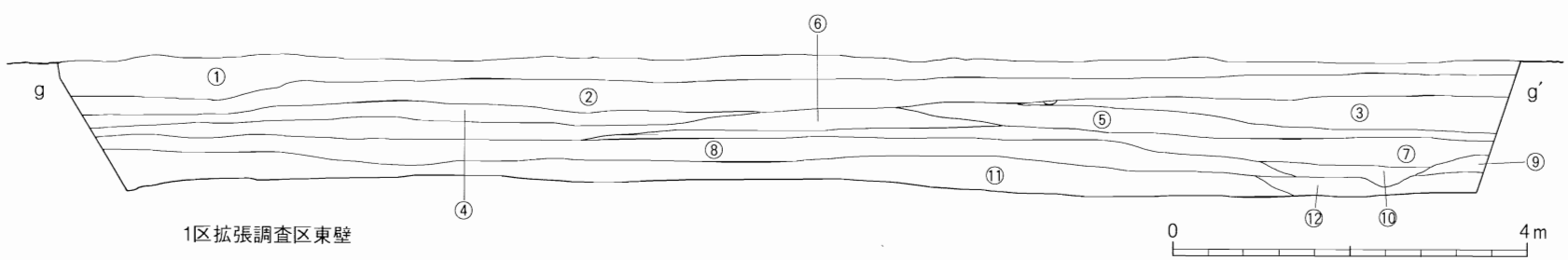
①耕作土
②白色小石を含む灰色粘質土
③暗灰色粘質土
④細砂を含む灰色粘質土
⑤灰色粘土
⑥砂を含む濃灰色粘質土
⑦灰色粘質土
⑧植物遺体層
⑨砂
⑩植物遺体層
⑪細砂
⑫植物遺体層
⑬植物遺体層
⑭砂
⑮細砂
⑯植物遺体層
⑰暗灰色粘質土
⑱粗砂
⑲砂
⑳植物遺体層
㉑砂
㉒植物遺体層
㉓砂
㉔炭混じりの灰色粘質土
㉕白色砂
㉖白色粘質土
㉗砂混じりの植物遺体層
㉘砂
㉙植物遺体層
㉚粗砂
㉛砂
㉜植物遺体層



3区トレンチ



①灰褐色粘質土
②淡褐色細砂
③濁褐色細砂
④細砂
⑤粗砂
⑥褐色粘質土
⑦粗砂
⑧植物遺体層
⑨植物遺体
⑩黒色粘質土
⑪白色



1区拡張調査区東壁

①耕作土
②灰色粘質土
③褐灰色粘質土
（松ぼっくり含）
④黒色土
（松ぼっくり含）
⑤黒色土
⑥黒灰色土
⑦濁灰色粘質土
⑧暗灰色粘質土
⑨灰色粘質土
⑩淡灰色粘質土
⑪灰色粘質土
⑫濃灰色粘質土
（木製品多く含む）

第23図　1・2・3区トレンチ、1区拡張調査区土層断面図

成は良好、色調は内外面ともに淡褐色である。調整は口縁部分が内外面とも横ナデ、胴部は外面が縦ハケ後肩部に横ハケ、内面がケズリである。法量は、口径16.2cm、頸径13.2cmを測る。

拡張調査区

・層序（第23図）

湧水が著しいため、掘り下げはトレンチ調査で土器が出土した灰色粘質土層下面迄とした。基本層序はトレンチ調査と微妙に異なっており、灰色粘質土の上に暗灰色粘質土、濁灰色粘質土、黒色土、耕作基盤土（灰色粘質土）とほぼ水平に堆積している。黒色土以上が松ぼっくりを多く含む層である。

ただし、拡張調査区の南東角付近は有機質を多量に含む湧水が多い濃灰色粘質土に切られており、その層からは葦類や自然木に混じって木製品多数が出土した。古墳時代後期の土器器の甕小片１点が出土したことから、その時期もしくはそれ以降の時期の堆積層と思われる。濃灰色粘質土はやや深めに掘り下げて木製品の収拾に努めた。

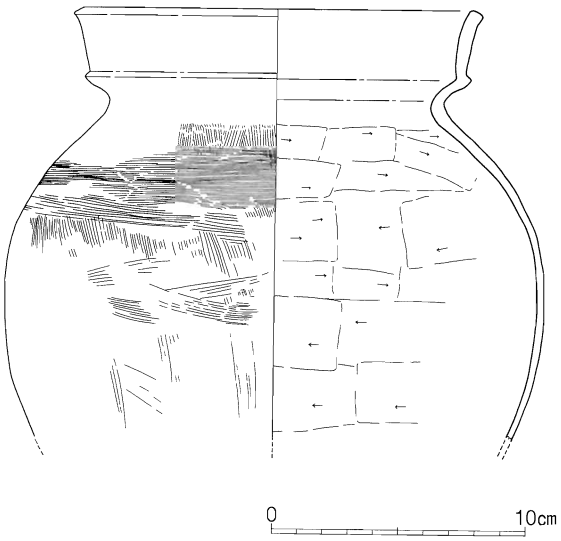
・遺構

検出されなかった。

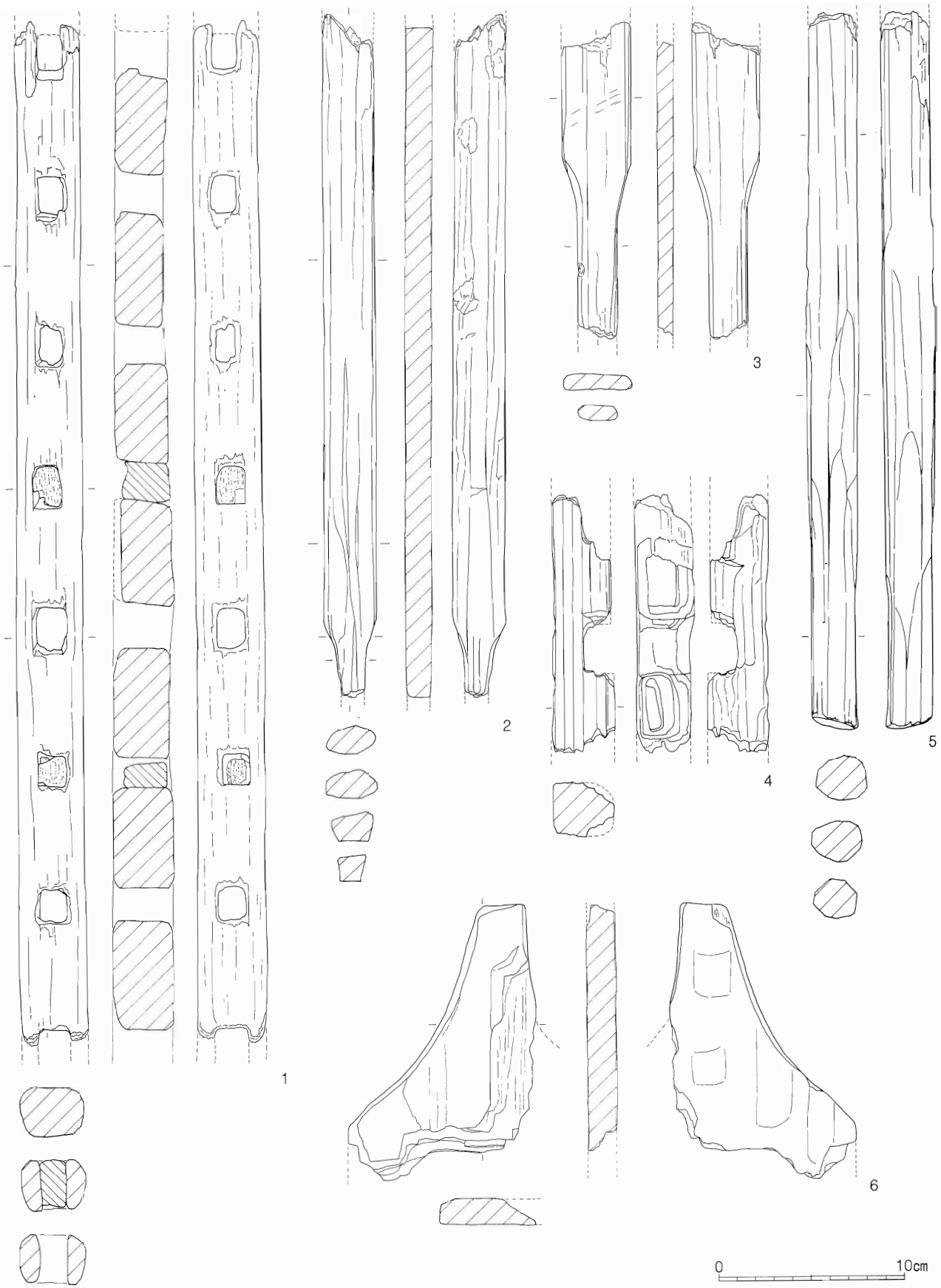
・遺物

土器は、古墳時代後期の甕の口縁部１片が出土した。破片が小さいため図面化はしていない。

木製品は、枠付田下駄の一部や農耕具の柄、そのほか多数の加工が施された用途不明品が出土した（第25図）。１は枠付田下駄の縦枠で、断面が4.4×3.4cmの角丸方形を呈するもので、全長は両端部を欠損しているため不明である。残存部には横桟をはめるための孔８カ所を確認した。孔の形状は前後に長い長方形で、いずれも2.8×1.8cm程度である。孔の内２カ所には、ちょうど孔の大きさに合致する横桟の末端部が残存していた。使用材はヒノキである。枠付田下駄の横桟と思われる木製品は、形状や大きさが若干異なる２点を確認した。２は桟部分の断面が楕円に近い3.6×2.0cmで、縦枠に差し込む先端部の断面が方形で一片1.8cmを測る。３は全体に偏平で、横幅が広い。いずれも欠損品で全長は不明である。４はくり込みが１カ所見られるが、残存部分が少なく全体の形状は不明である。５は農具の柄と思われる。断面はほぼ円形を呈して基部での径は3.2cmを測る。欠損のため全長は不明である。表面は丁寧に削られており、使用痕は確認できない。６は農耕具の一部と思われるが、残存部分が少なく、全体の形状は不明である。



第24図　1区トレンチ出土土器実測図



第25図　1区拡張調査区出土木製品実測図

2　区

・層序（第23図）

現在の耕作土、耕作基盤土（黒褐色粘質土）の下は、1.2m厚さの白灰色粘土層、その下が固くしまった淡褐色粘土である。白灰色粘土層以下は有機質等が全く混じっていない層で、地表面下２ｍ掘り下げたにもかかわらずほとんど湧水がみられなかった。このことから、白灰色粘土層以下は扇状地が形成される以前から存在した古い基盤の層と思われる。

・遺構

検出されなかった。

・遺物

出土しなかった。

3　区（第23図）

・層序

現在の耕作基盤土の下約1.6mで厚い植物遺体層に達する。その上に南下がりの粗砂層、褐色粘質土、粗砂層が堆積し、その上には濁褐色細砂層、淡褐色砂質土層がほぼ水平に堆積している。その上には現在の耕作基盤土まで厚さ約１ｍの灰褐色粘質土が堆積していた。

このトレンチは湧水が著しく、特に下方での細かい分層はできなかった。

・遺構

検出されなかった。

・遺物

出土しなかった。

10　区

・層序（第27図）

調査区西側のトレンチを観察すると、最下層の北側約10mは９区から続く湧水角礫層である。角礫層の直上に堆積した褐色砂質土中には若干丸みを帯びた角礫が多く含まれていた。溝ＳＤ03は崩落のために壁面でのセクションは記録できなかったが、第31図の状況とほぼ同様である。溝ＳＤ03より南側では、湧水層は粗砂層に変化している。粗砂層の上は、基本的にはやや粘質の灰褐色砂質土、しまった薄灰褐色砂質土、薄灰褐色砂質土、褐色砂質土と堆積し、その上が現在の耕作基盤土、耕作土になっている。ただし、溝ＳＤ03の南側約８ｍ弱の範囲では褐色砂質土上に弥生土器片を包含する濁灰褐色砂質土が堆積していた。ここで出土した弥生土器片は、数が少なく風化が著しい小片ばかりであったため、時期確定には至らなかった。この濁灰褐色砂質土層は東方では徐々に薄くなり、調査区中央付近では消滅している。

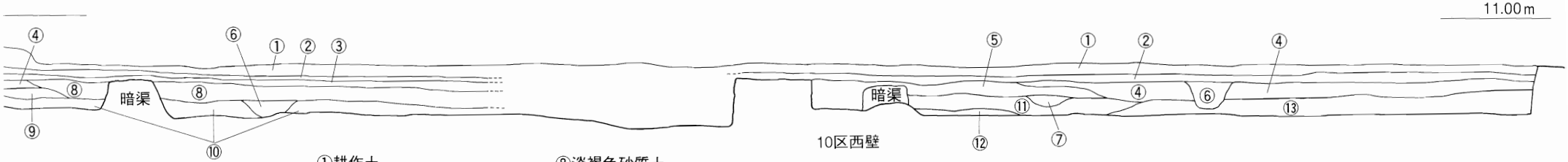
・遺構

耕作基盤土直下の褐色砂質土層上面で、東南－北西方向の土器を多量に含んだ幅約２ｍ弱の黒色土

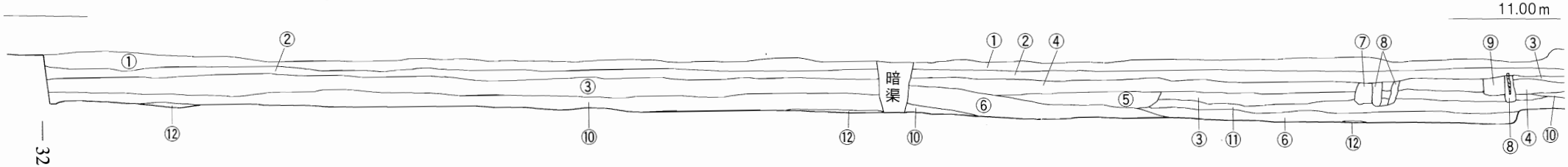
の帯、溝ＳＤ03を検出した（第29・30図）。

溝の流れの方向は不明である。セクションで溝の断面を観察したところ（第31図）、底がやや平坦なＶ字形をしており、人工的に掘削された溝であることがわかった。下方では砂層と粘質土層の重なり合いが見られ、かなり流速があったものと推察される。下方の主として砂層中からは弥生時代後期を中心とする土器片（第33～35図）が出土した。上方に堆積した濁黒灰色粘質土は明らかに滞水の痕跡であり、溝に水がよどんでいた時期があったことを示唆している。濁黒灰色粘質土層から出土した土器は風化が著しくて取り上げ不可能な個体が多かったが、そのほとんどが完形をとどめる古墳時代前期の土師器（第32図）であった。

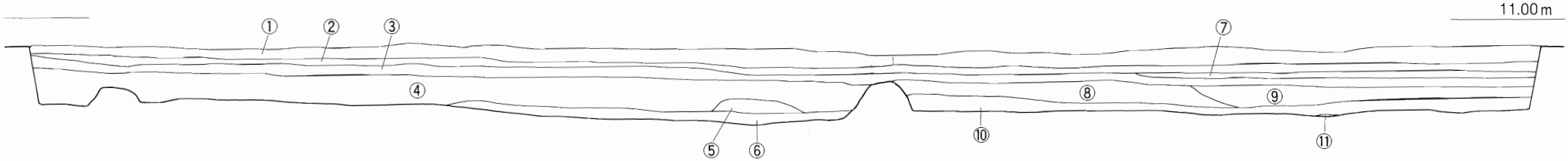
第26図　10～12・14・15区遺構配置図



①耕作土
②灰色粘質土
③濁灰褐色砂質土（弥生包含）
④褐色砂質土
⑤礫混褐色砂質土
⑥灰褐色砂質土
⑦細砂
⑧淡褐色砂質土
⑨しまった褐色砂質土
⑩しまった濁灰褐色砂質土
⑪礫
⑫粗砂
⑬砂混じりの礫



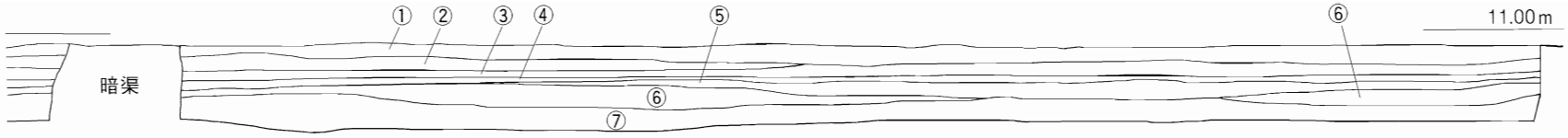
①耕作土
②灰色粘質土
③濁灰褐色砂質土（弥生包含）
④褐色砂質土
⑤濁褐色砂質土
⑥しまった濁褐色砂質土
⑦薄灰色粘土
⑧灰色粘土
⑨濃灰色粘質土
⑩しまった褐色砂質土
⑪しまった濁灰褐色砂質土
⑫砂（湧水）



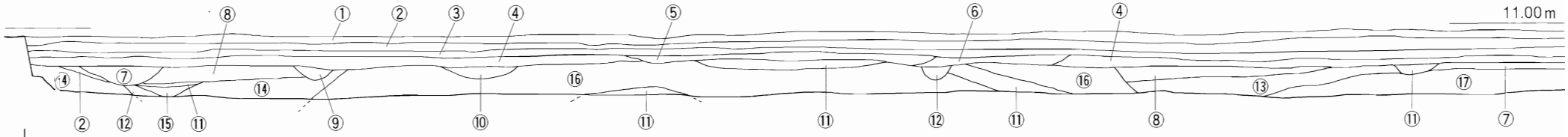
①耕作土
②灰色粘質土
③褐色砂質土
④しまった灰褐色砂質土
⑤灰褐色粘質土
⑥褐色粘質土
⑦淡褐色砂質土
⑧しまった褐色砂質土
⑨しまった灰褐色砂質土
⑩しまった褐色粘質土
⑪砂

0　4m

第27図　10～12区土層断面図



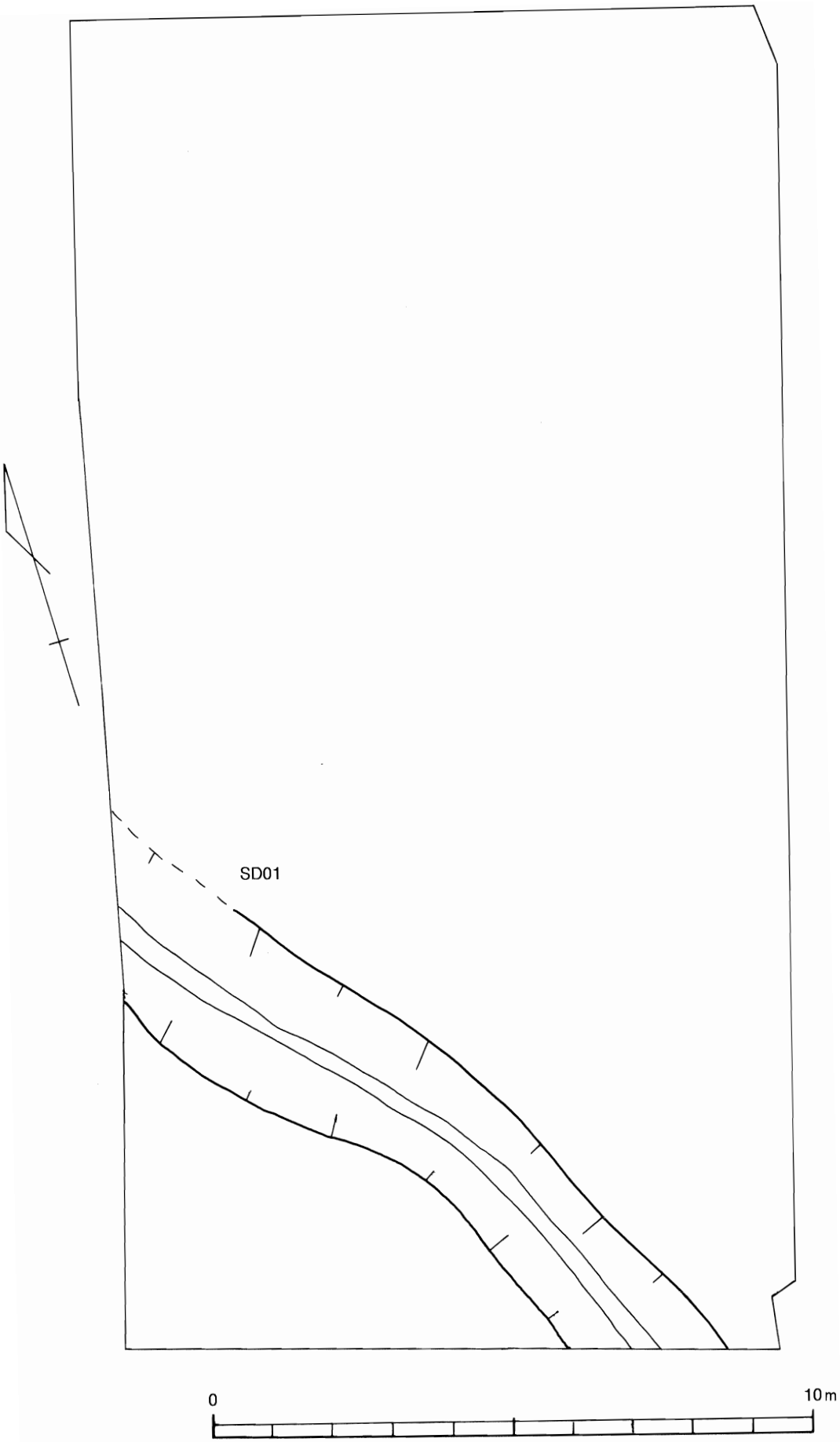
①耕作土
②淡灰色砂質土
③灰色粘質土
④褐色砂質土
⑤濁灰褐色土
⑥灰色砂質土
⑦しまった灰褐色砂質土



①耕作土
②灰色粘質土
③淡灰色粘質土
④褐色砂質土
⑤多礫混褐色砂質土
⑥礫混褐色砂質土
⑦灰色砂質土
⑧灰褐色砂質土
⑨灰色砂
⑩礫混砂
⑪砂
⑫粗砂
⑬砂混じりの灰褐色砂質土
⑭しまった褐色砂質土
⑮褐色砂
⑯礫
⑰しまった灰褐色砂質土

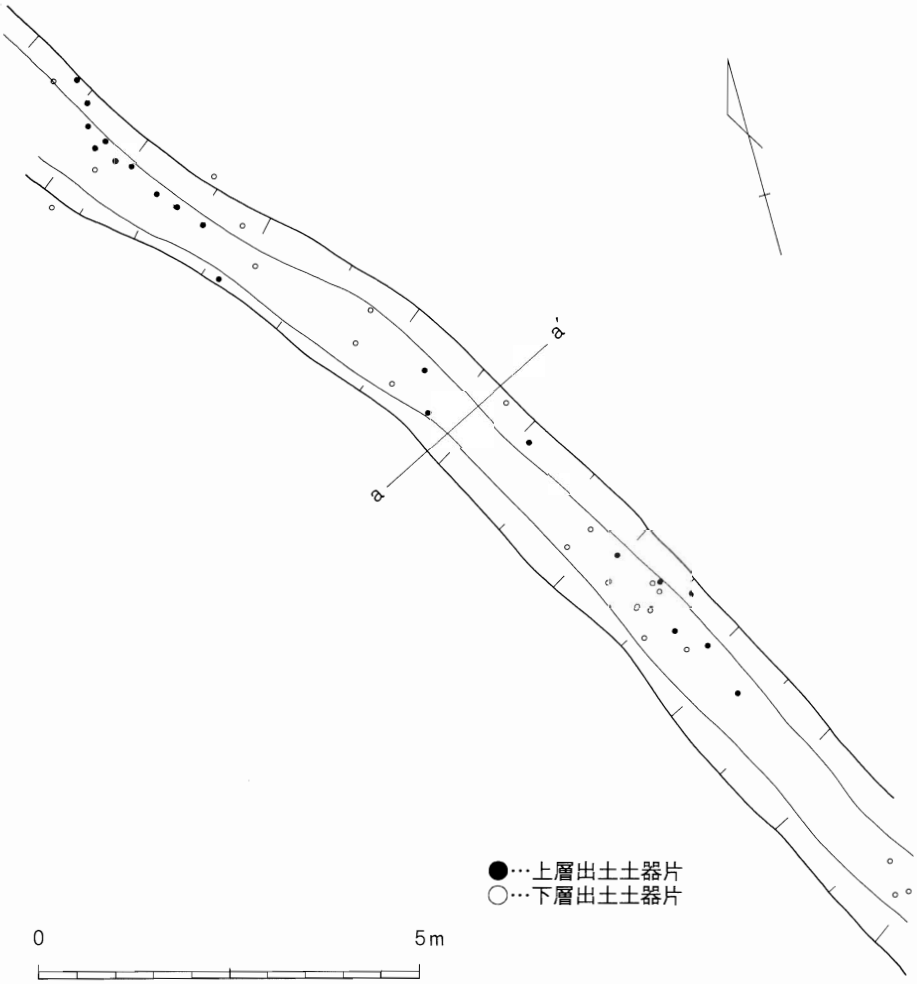
0　4m

第28図　14・15区土層断面図

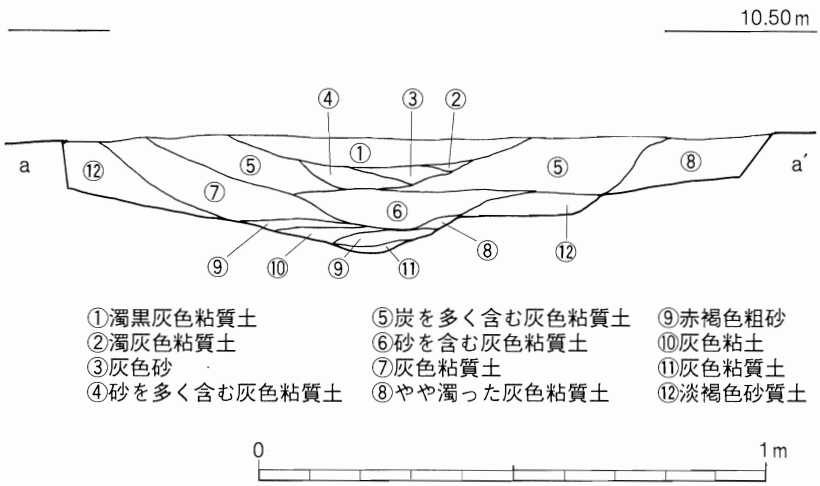


第29図　10区遺構検出状況

以上のことから、溝ＳＤ03は弥生時代後期に集落の近くに掘られ、砂や粘質土の堆積によって浅くなりながらも古墳時代前期まで利用され続けてきたものといえよう。ただし、その中間であまり土器を包含しない堆積層が存在することから、一時的に集落が10区付近から遠ざかった時期があったのかもしれない。

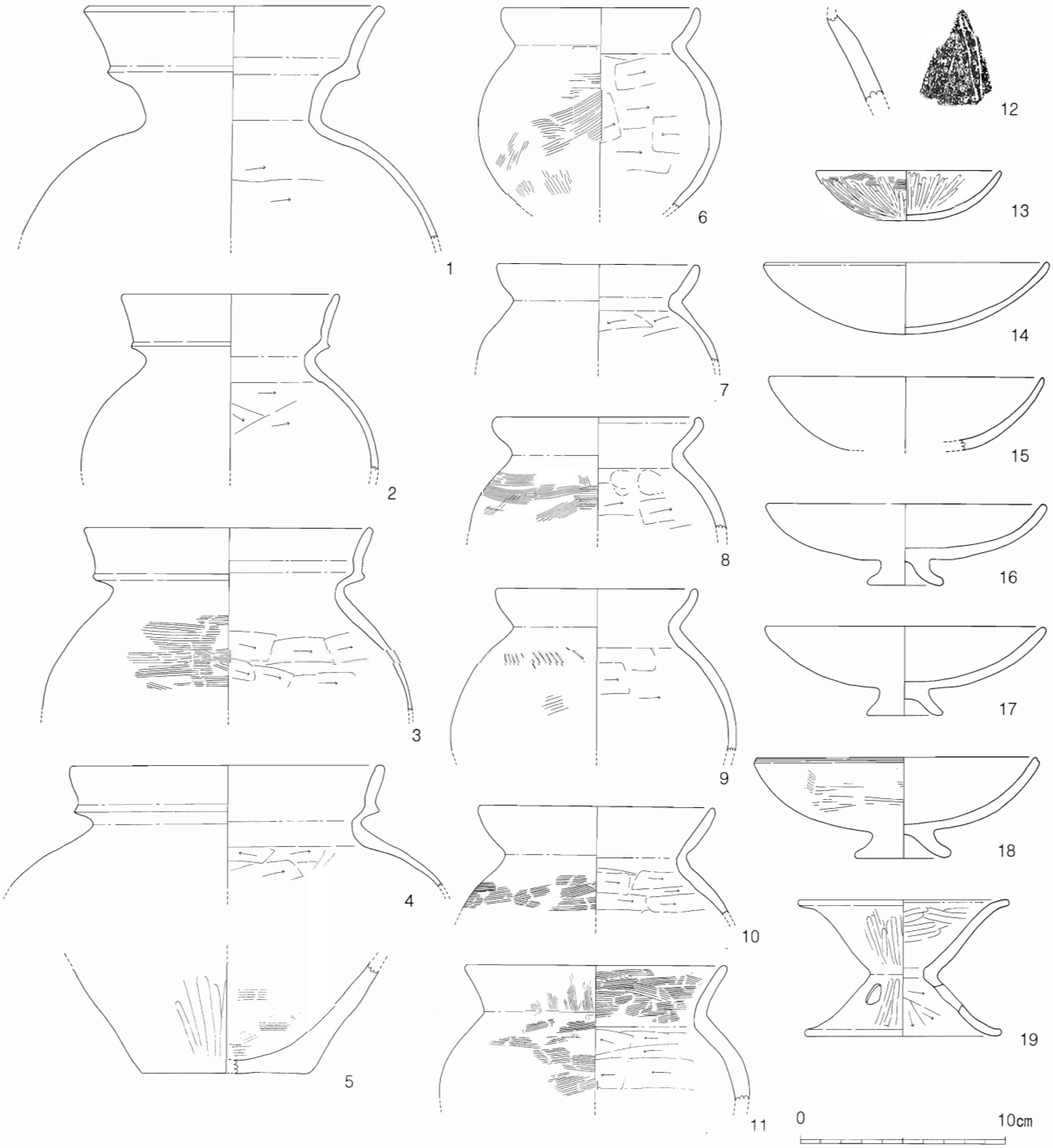


第30図　溝SD03遺物分布図

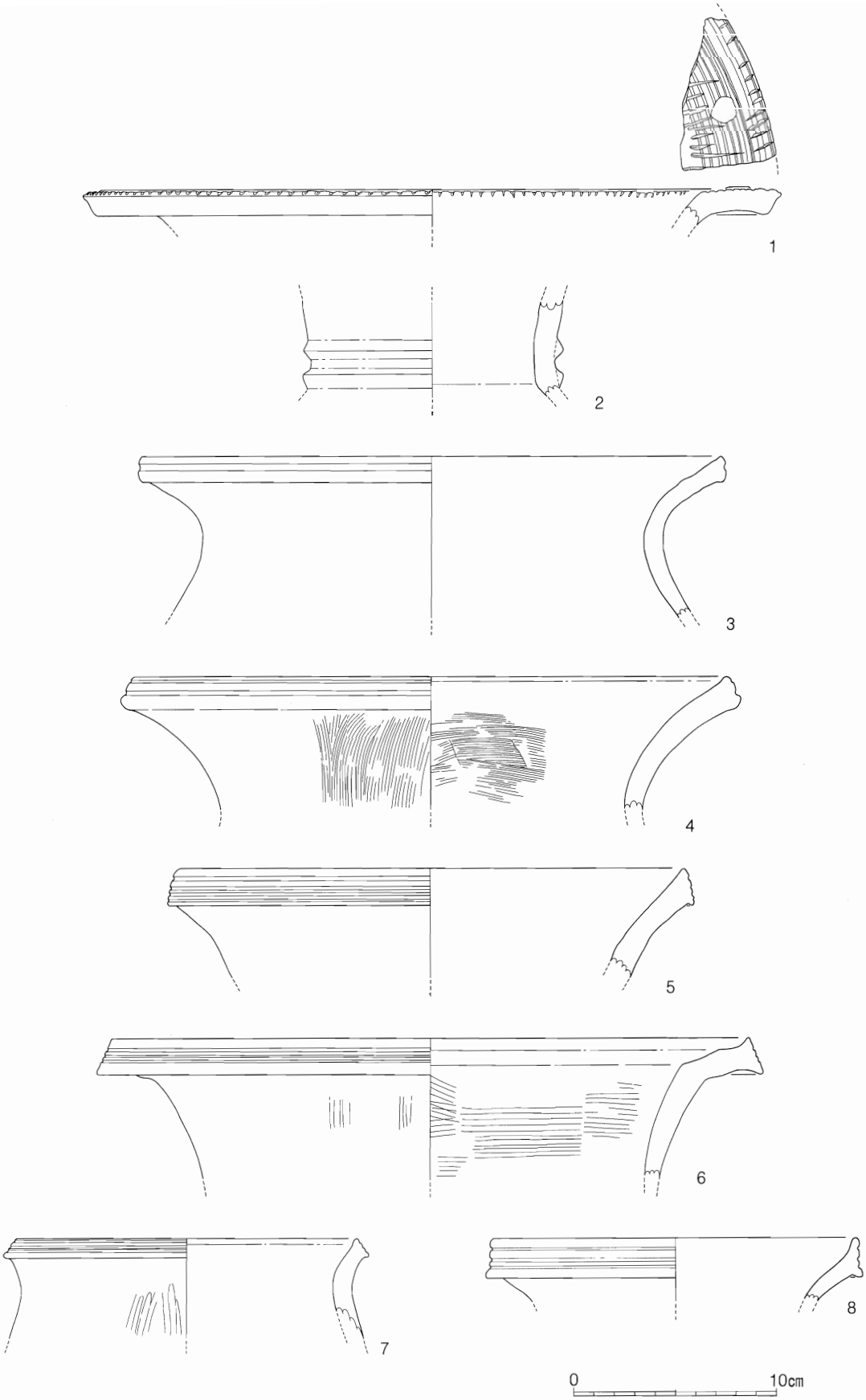


第31図　溝SD03埋土土層断面図

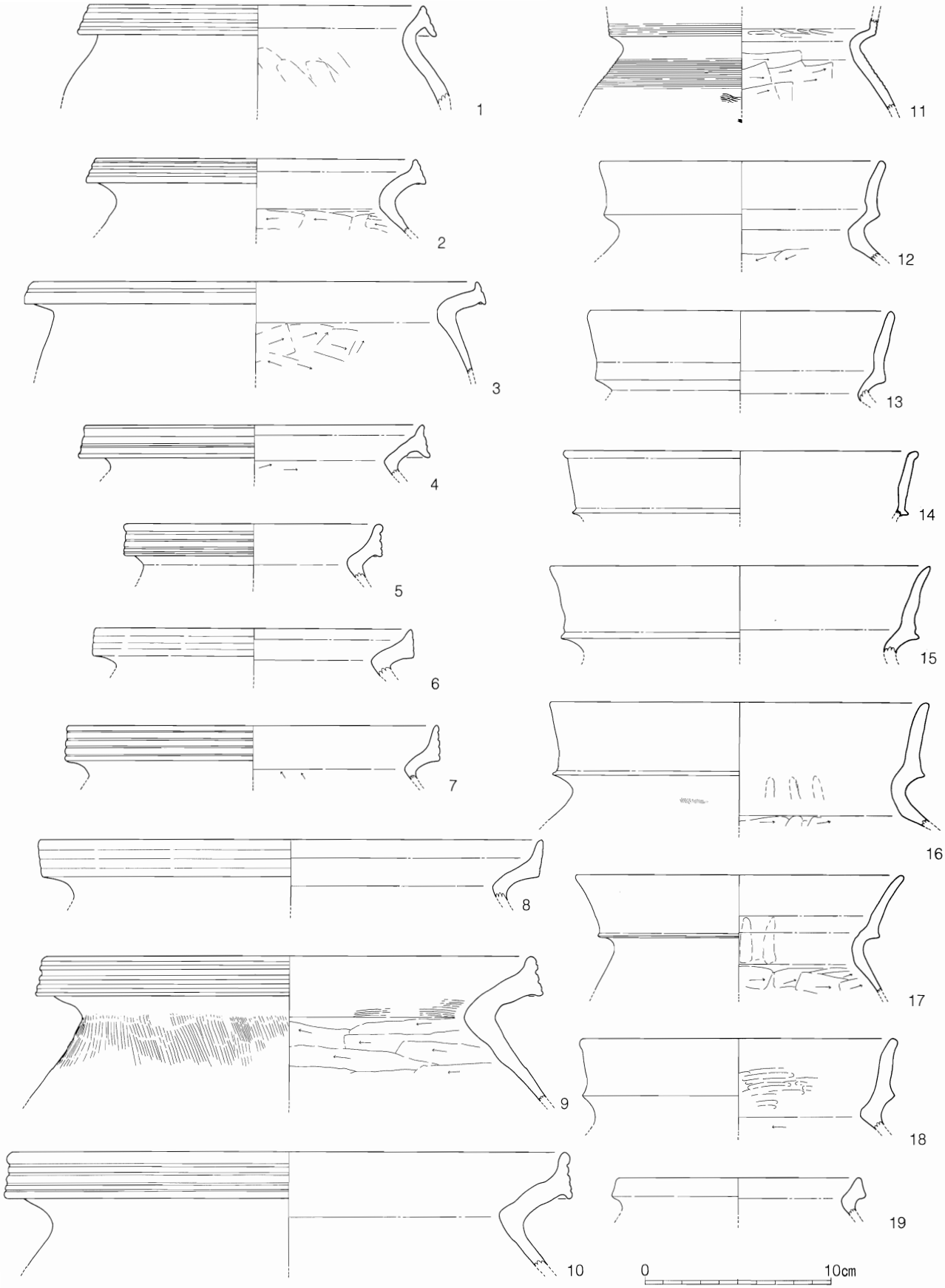
さて、ここで注目したいのは、水田基盤土を除去したレベル、つまり非常に浅いレベルから古墳時代前期の溝の底が検出されたことである。このレベルに溝の底面があるということは、当時の生活基盤面はさらに高いレベルに存在していたはずであり、そのレベルは現在では削平されて残存していない。このことを考慮すると、当初、弥生時代後期に溝ＳＤ03が掘削された時期には今回の調査で確認したよりもさらに深い溝であったと考えられる。また、古墳時代前期の遺物の出土状況から、生活遺



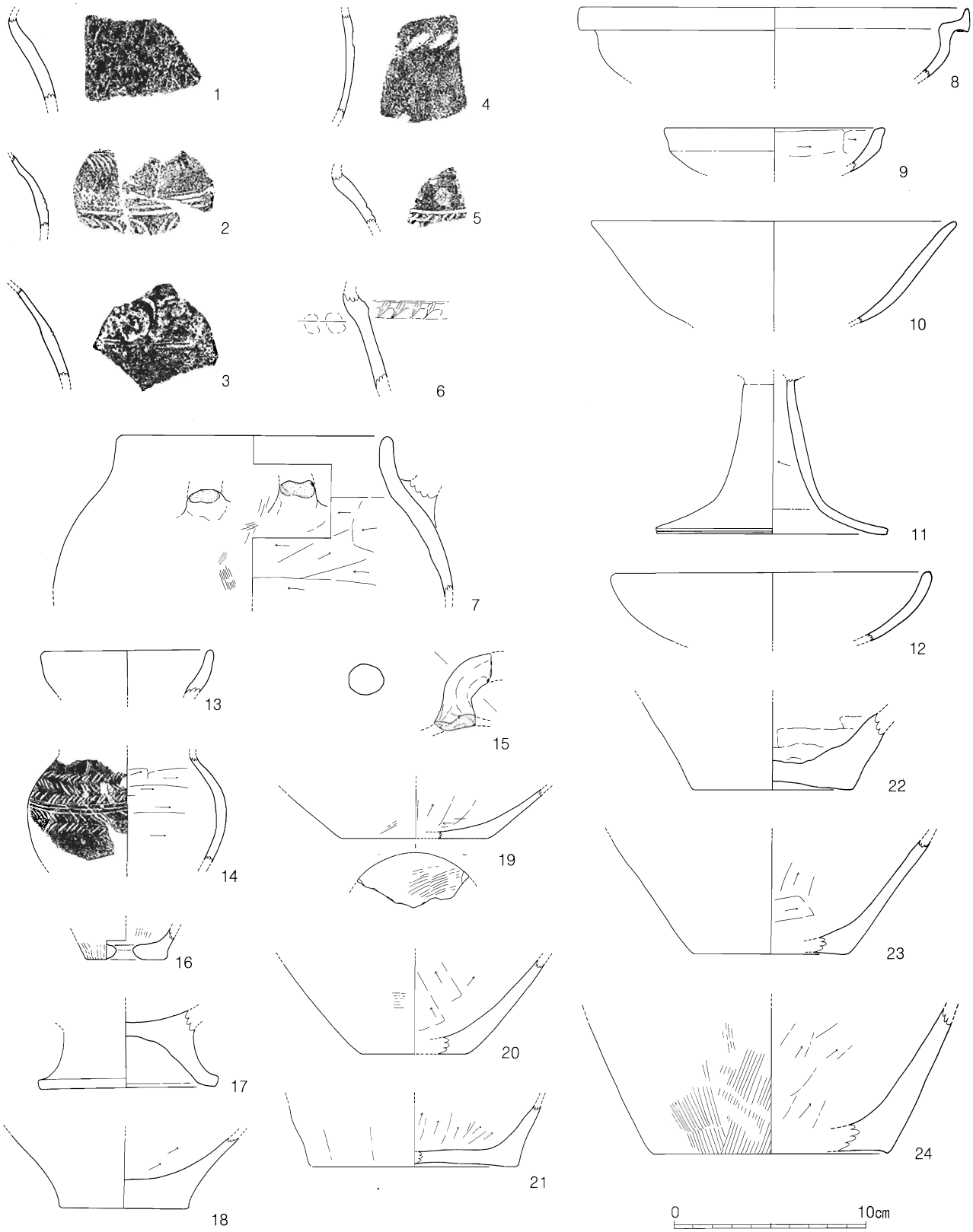
第32図　溝SD03上層出土土器実測図



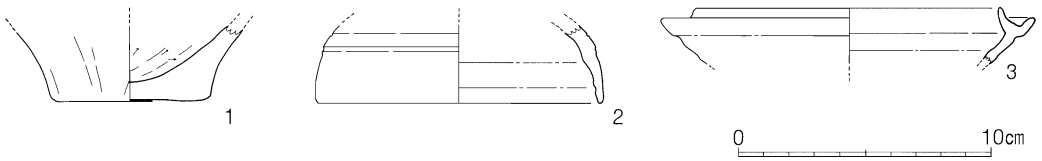
第33図　溝SD03下層出土土器実測図（1）



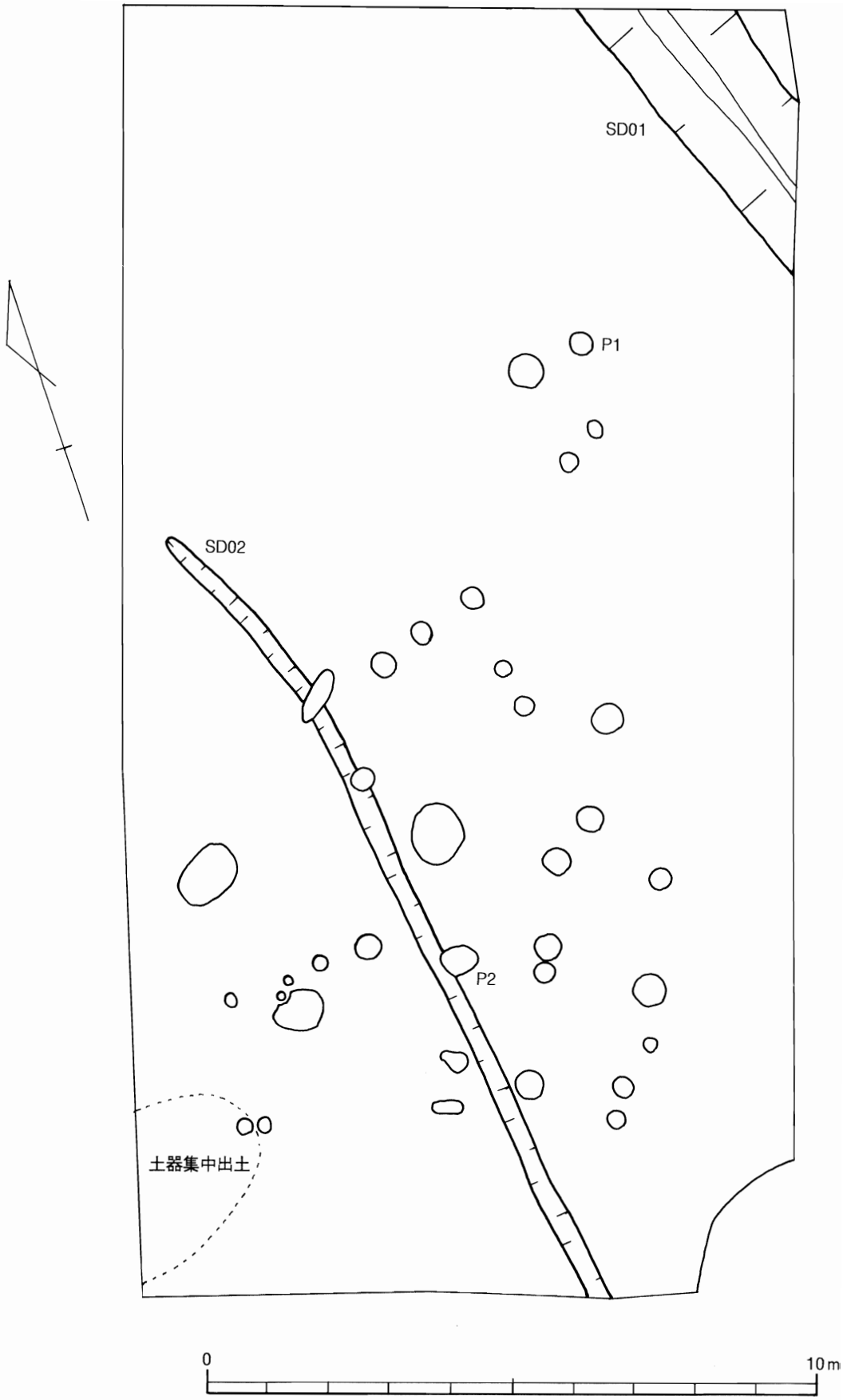
第34図　溝SD03下層出土土器実測図（2）



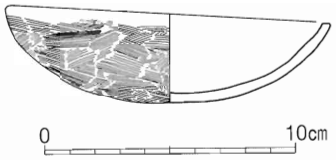
第35図　溝SD03下層出土土器実測図（3）



第36図　10区包含層出土土器実測図



第37図　11区遺構検出状況



第38図　P1出土土器実測図

跡が周辺にあったことはほぼ間違いないと思われるが、その遺構面は後世の削平によってすでに失われてしまっており、現在では検出不可能な状況であると断定してよいであろう。古墳時代前期における10区付近の標高は現在の標高よりも高かったようである。

・遺物

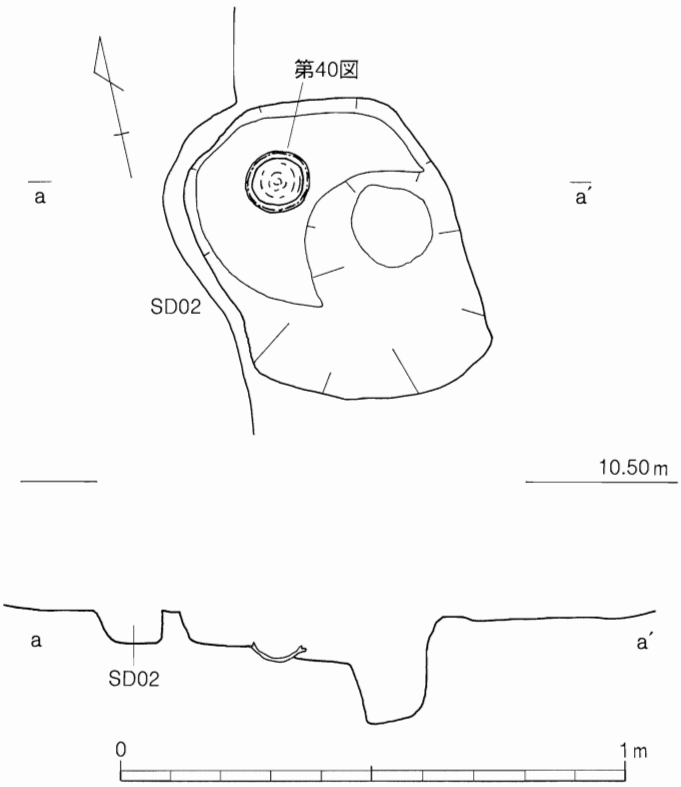
溝ＳＤ03上層からは弥生時代末～古墳時代前期の土師器が出土し、器種には壺、甕、小型丸底壺、坏、低脚坏、器台があった（第32図）。下層では弥生時代中期末～後期の土器が出土し、器種には壺、甕、注口土器、高坏があった（第33～35図）。ここで興味深いことは、前年度に調査を実施した溝ＳＤ01から出土した注口土器片がここの下層から出土した注口土器（第35図７）と接合したことである。このことによって、溝ＳＤ01と03の下層は同時期に存在したことが判明した。包含層からは、弥生土器の底部、古墳時代後期の須恵器蓋坏が出土した（第36図）。

個々の土器の詳細については、後頁の土器観察表に記載する。

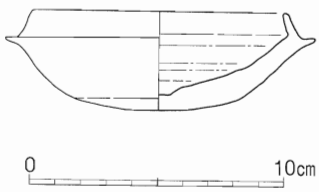
11　区

・層序（第28図）

調査区西側トレンチの観察では、北側半分は北接する10区と基本層序はほぼ同様である。10区との境界線から約１～３ｍ南で耕地整理以前の用水路やあぜ道の痕跡を検出した。褐色砂質土上面から掘り込まれているが、杭が残存しているほか埋土がしまっていないことから、時期は不明ながら、耕地整理直前かそれより若干古い時期のものと思われる。南側半分の層序はより単純になり、湧水粗砂層の上にしまった褐色砂質土、褐色砂質土と堆積し、その上が現在の耕作基盤土、耕作土となっている。



第39図　P2土器出土状況



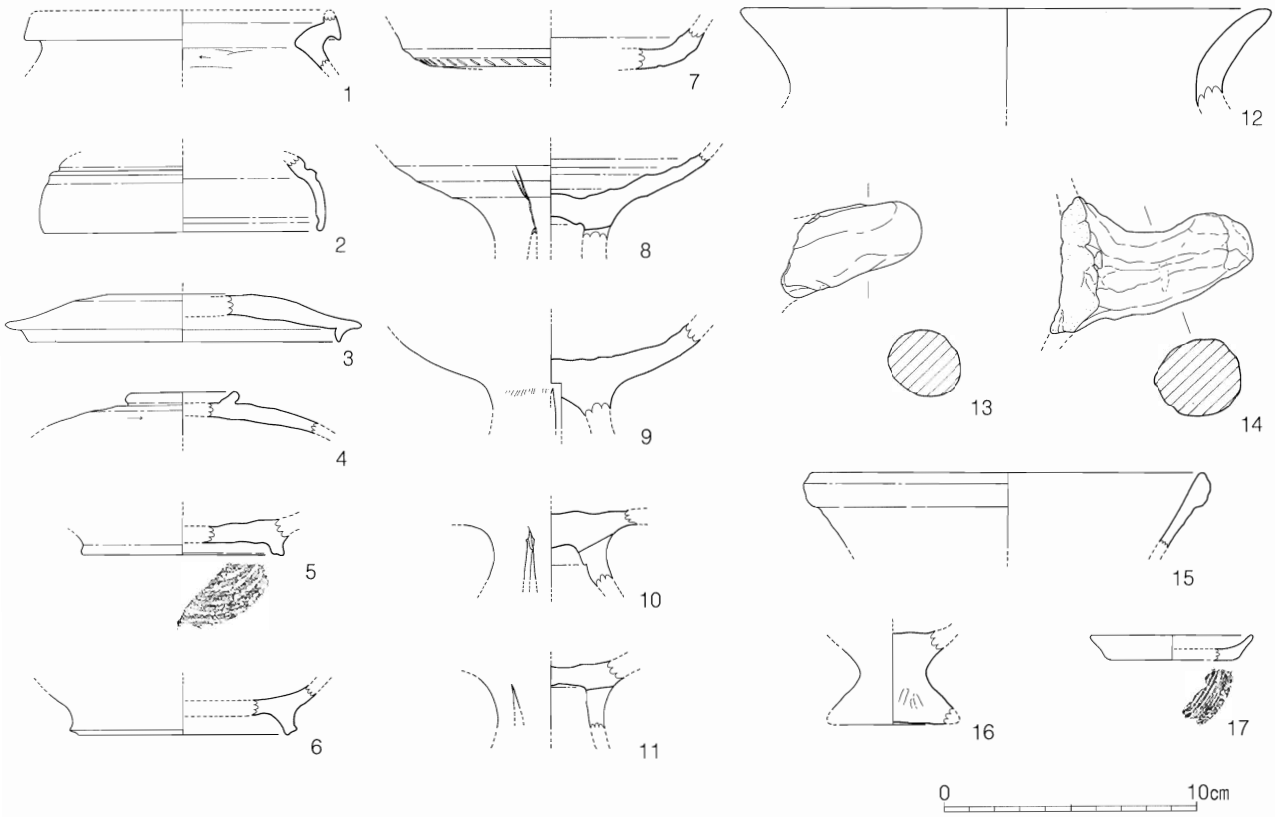
第40図　P2出土土器実測図

・遺構

10区と同様、耕作基盤土直下の褐色砂質土上面で、溝ＳＤ04のほか、多くのピット、土坑を検出した（第37図）。

溝ＳＤ04は南東－北東方向を向いており、10区の溝ＳＤ03とほぼ並行していた。断面はほぼU字状で、非常に浅く、北東ではさらに浅くなって調査区内で消滅していた。埋土は灰色砂質土層１層で、弥生土器または土師器と思われる微小片を若干含んでいた。10区で検出した溝ＳＤ03の例から考えると、溝ＳＤ04が掘られた時点では地表面が現在の遺構面より高く、現在では旧地表面が掘削されて消滅し、溝の底部分のみが遺構として残存していると考えた方が自然であろう。これらのことから、溝ＳＤ04はＳＤ03の後半期と同時期に存在しており、その時期は古墳時代前期と考えてよいかもしれない。

ピットは多数検出した。褐色砂質土上面で平面プランを確認したもので、埋土はいずれも褐色砂質土がやや濁った程度のものである。平面プランはわかりやすかったが、底の見極めが非常に困難であった。ピットは堀立柱建物を構成していたと思われるが、部分的には方向性が観察できるものの、建物を復原することはできなかった。これらのピット群の中で、Ｐ１中からは土師器の坏１点の大きめな破片が、溝ＳＤ04を切って掘られているＰ２の底からは、完形の須恵器の坏１点が上を向いた正位置で出土した（第38図）。Ｐ２の土器の出土状況は、何らか意図をもって故意に埋納された状況と思われる。したがって、これらのピット群が掘られた時期は、全てがそうでは無いにせよ、４世紀と６世紀後半のものが混在していると考えてよいであろう。



第41図　南西角土器集中部分出土土器実測図

調査区の南西角には土器が集中して出土する場所があり、そのレベルは大半が褐色砂質土の上面で、一部が褐色砂質土に若干埋まり込んでいた。土器は須恵器と土師器が中心で、6世紀後半から7世紀前半が大半を占めていた。ただ、そこで出土した土器はいずれも小破片で、二次的な破砕、たとえば耕作時の鍬先による損傷のような痕跡を顕著にとどめており、原位置を大きく動かされていることは明らかであった。遺構平面プラン検出面に焼土や炭等が存在しなかったことから、6世紀後半の遺構面は、現在の耕作基盤土よりも高いレベルに存在し、すでに削平されたものと考えられる。

土坑は2カ所検出した。直径はどちらも約1mで、深さは約80cmを測る。ＳＫ02からは弥生土器とも土師器とも判別がつかない土器の極小片1点が出土した。

・遺物

Ｐ1から出土した土師器の坏（第38図）は、低脚坏の脚部を外したような皿状の変わった形状を呈している。Ｐ2から出土した須恵器の坏（第40図）は完形品である。

南西角から集中して出土した土器（第41図）は、前記したとおりすべて二次破砕を受けており、いずれも小片で残存状況は非常に悪かった。種類、器種をあげると、弥生時代の甕と古墳時代後期の須恵器の蓋坏、高坏、土師器の甕、把手のほか、白磁、柱状高台付坏、土師皿がある。土器の時期幅は広く、最も古いものは弥生時代後期、最も新しいものは12世紀前後であるが、古墳時代後期の土器が大半を占めていた。

個々の土器の詳細については、後頁の土器観察表に記載する。

12　区

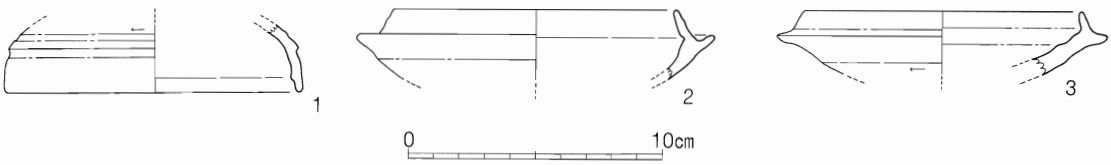
・層序（第28図）

調査区西側のトレンチでは、下から湧水粗砂層、褐色粘質土、灰褐色砂質土、一部濁褐色砂質土、淡褐色砂質土と堆積しており、淡褐色砂質土層上面で遺構が検出された。淡褐色砂質土層の上は現在の耕作基盤土である。北接する11区と比較すると、湧水粗砂層までの深さが若干深くなっている。

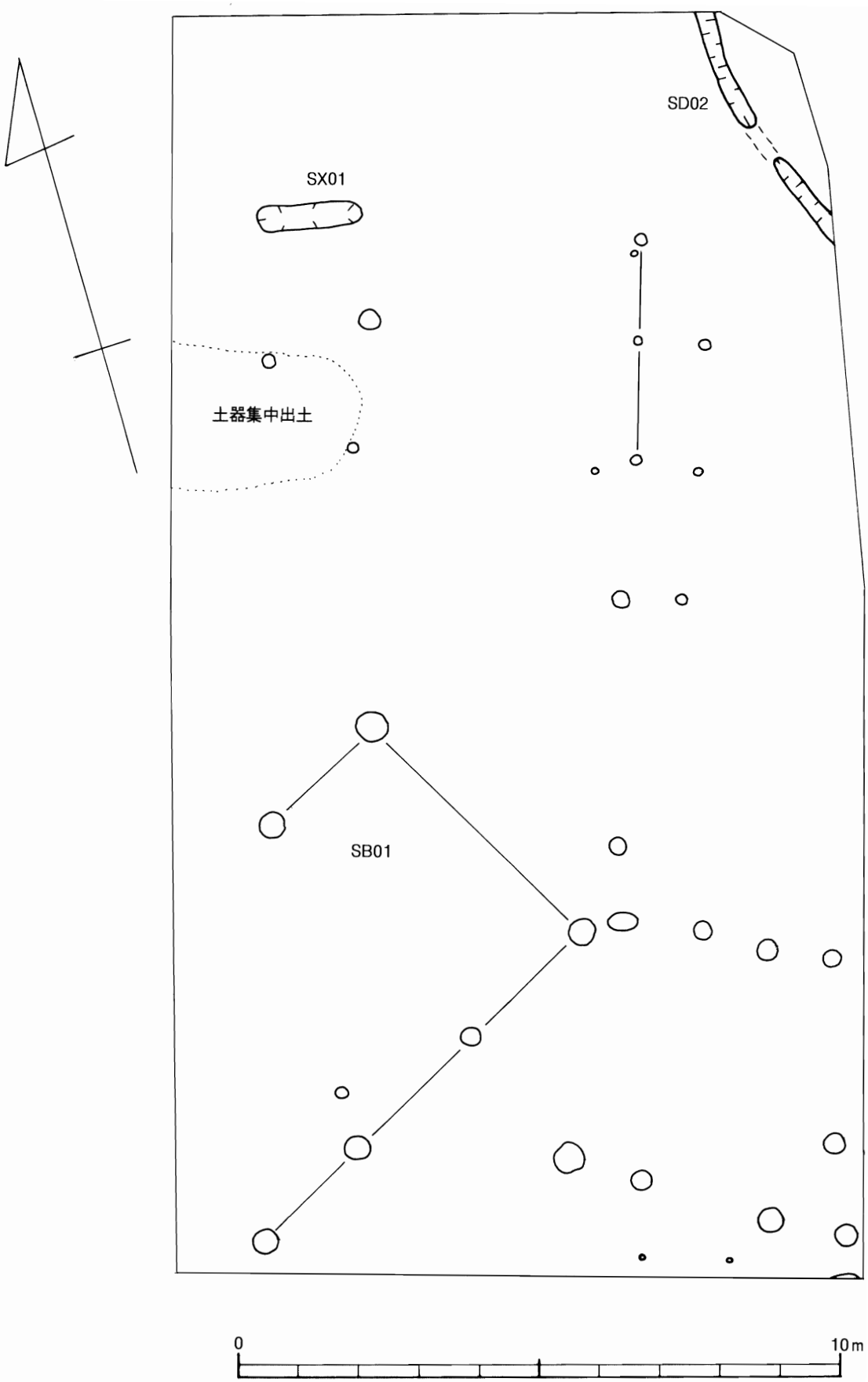
・遺構

11区と同様、耕作基盤土直下の褐色砂質土上面で多くのピット、土坑1カ所、第11区で検出した溝ＳＤ04の南東端部を検出した（第43図）。

ピットの埋土には、やや濁った褐色砂質土と焼土片や炭を含む濁褐色砂質土の2種類があり、後者は大型の掘立柱建物ＳＢ01（第44図）を構成している。ＳＢ01は調査区内におさまっていないため明確な規模は不明であるが、小さくても梁間2間×桁行3間の掘立柱建物である。柱間は心心距離で約2.4mを測り、柱穴は直径40cm強、深さは45cm前後を測り、柱穴埋土は炭や焼土片を多く含んだ濁



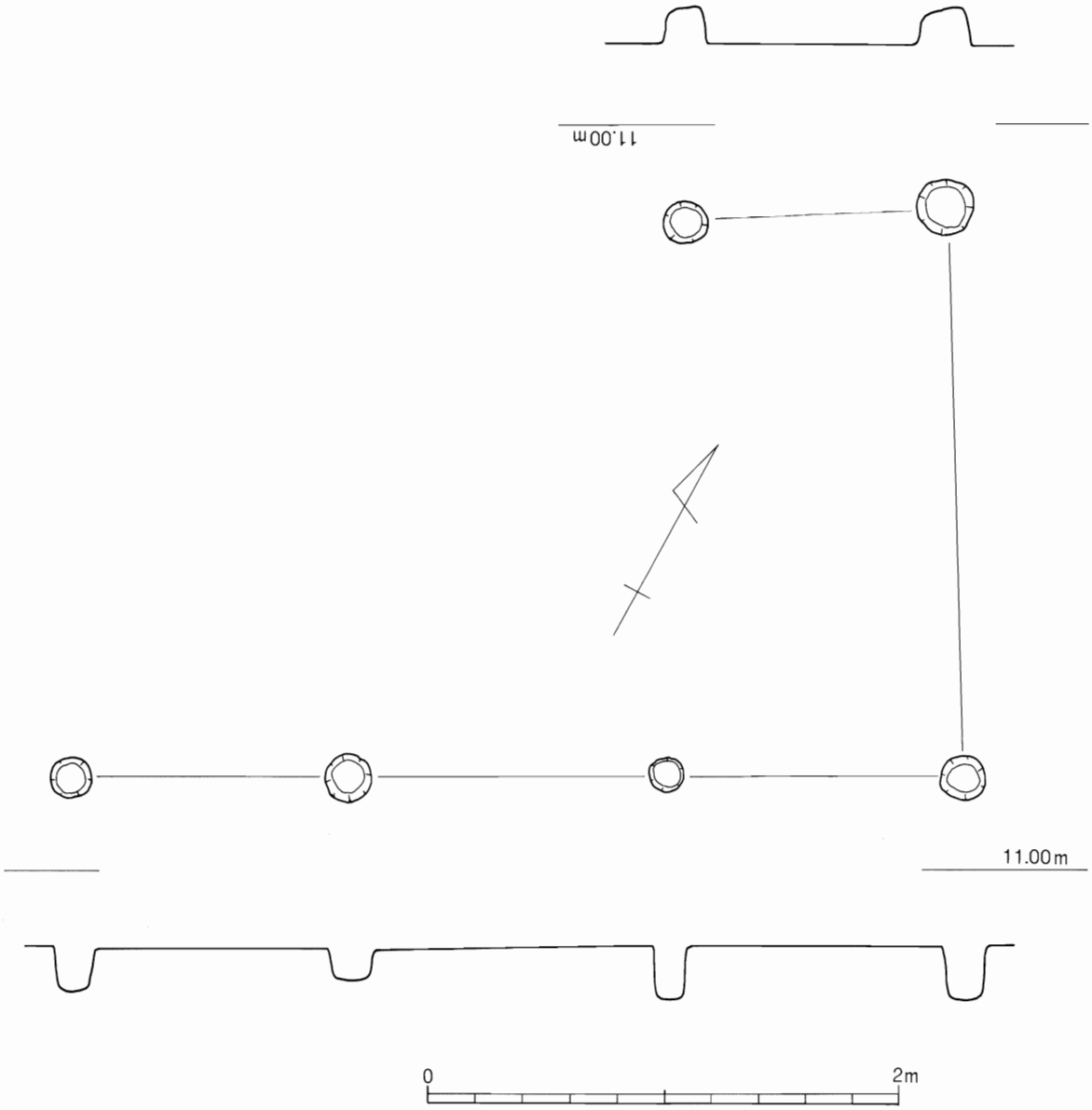
第42図　11区包含層出土土器実測図



第43図　12区遺構検出状況図

褐色砂質土である。ただし、深さについては後世の遺構面削平を含めて考えなければならないであろう。というのは、柱穴埋土は前記したとおり焼土片や炭を多く含む濁褐色砂質土であったのに対し、プラン検出面では炭や焼土片等が一切見られなかったためである。建物の主軸はN－62°－Eを指向している。共伴する遺物は特定できず、時期は不明である。

ＳＢ01以外にも部分的に方向性のあるピットがみられたが、明確な建物を復原することはできなかった。ただ、12区南寄りのピットでは埋土中に焼土片や炭を多く含んだしっかりしたものが散在しており、ＳＢ01と同時期の掘立柱建物を構成するものであるかもしれない。12区東西の調査区外には、掘立柱建物ＳＢ01に類する建物が複数建てられていた可能性が高い。



第44図　掘立柱建物SB01検出状況図

12区北西部には、11区南西から続くような状況で土器や自然石が集中して出土する場所が存在した（第47図）。土器のレベルは褐色砂質土上面が大部分を占めており、一部が褐色砂質土にやや埋まり込む位置であった。土器の種類は須恵器と土師器で、6世紀後半から7世紀前半の間におさまるものと思われる（第48図）。破片を観察したことろ、若干高坏の割合が高いような印象を受けた。これらの土器片は11区南西から出土した土器と同様、いずれも小片で二次的な破砕を受けており、原位置を保つものとは考えられない。

土器が集中して出土した場所の東側では、直線状に列んだ小さなピットを検出した。性格は不明であるが、埋土は耕作土に近い灰色粘質土1層のみであったことから、稲を現地で天日干しするための杭（ハデ）跡の可能性が高い。

性格不明の遺構ＳＸ01（第45図）は、不整形な角丸方形で、長さ2.3m、最大幅0.4m、深さ6cm前後を測る。埋土は灰色砂質土1層で非常に浅い。出土遺物はすぐ南に広がる土器集中部分の土器と区別がつかないような状態であることから、単なるくぼ地であったのかもしれない。

・遺物

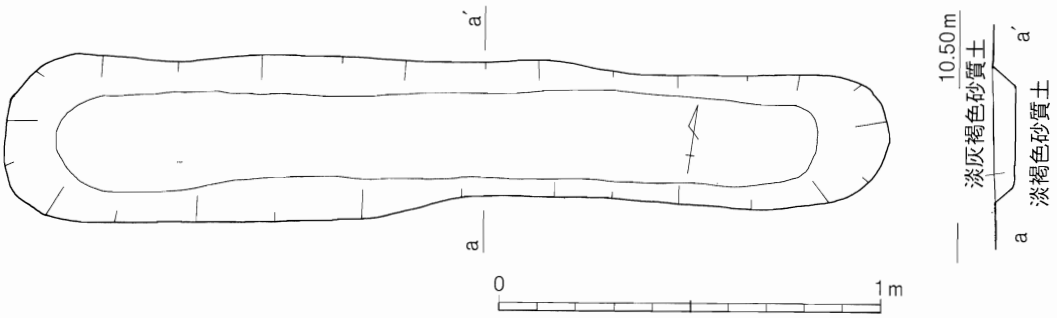
性格不明の遺構ＳＸ01から古墳時代後期の須恵器および土師器の把手部分が出土した（第46図）。

土器が集中して出土した場所からは、古墳時代後期の須恵器多数が出土し（第48図）、5のような若干新しい時代の須恵器も含まれていた。土師器の破片も多く出土したが、図面化できる破片はなかった。土器片は、11区と同様いずれも二次的な破砕の痕跡がみられた。

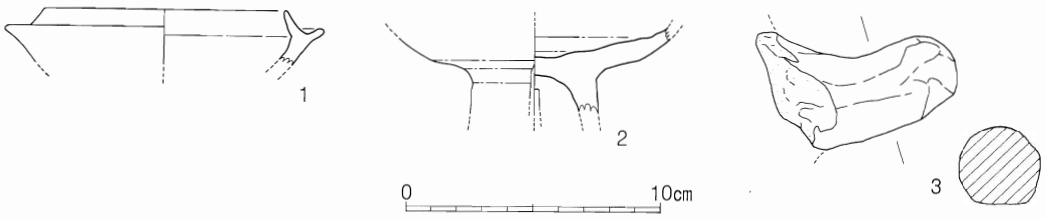
包含層からは、古墳時代後期の須恵器片多数が出土したほか、土師皿、土垂が出土した（第49図）。

個々の土器の詳細については、後頁の土器観察表に記載する。

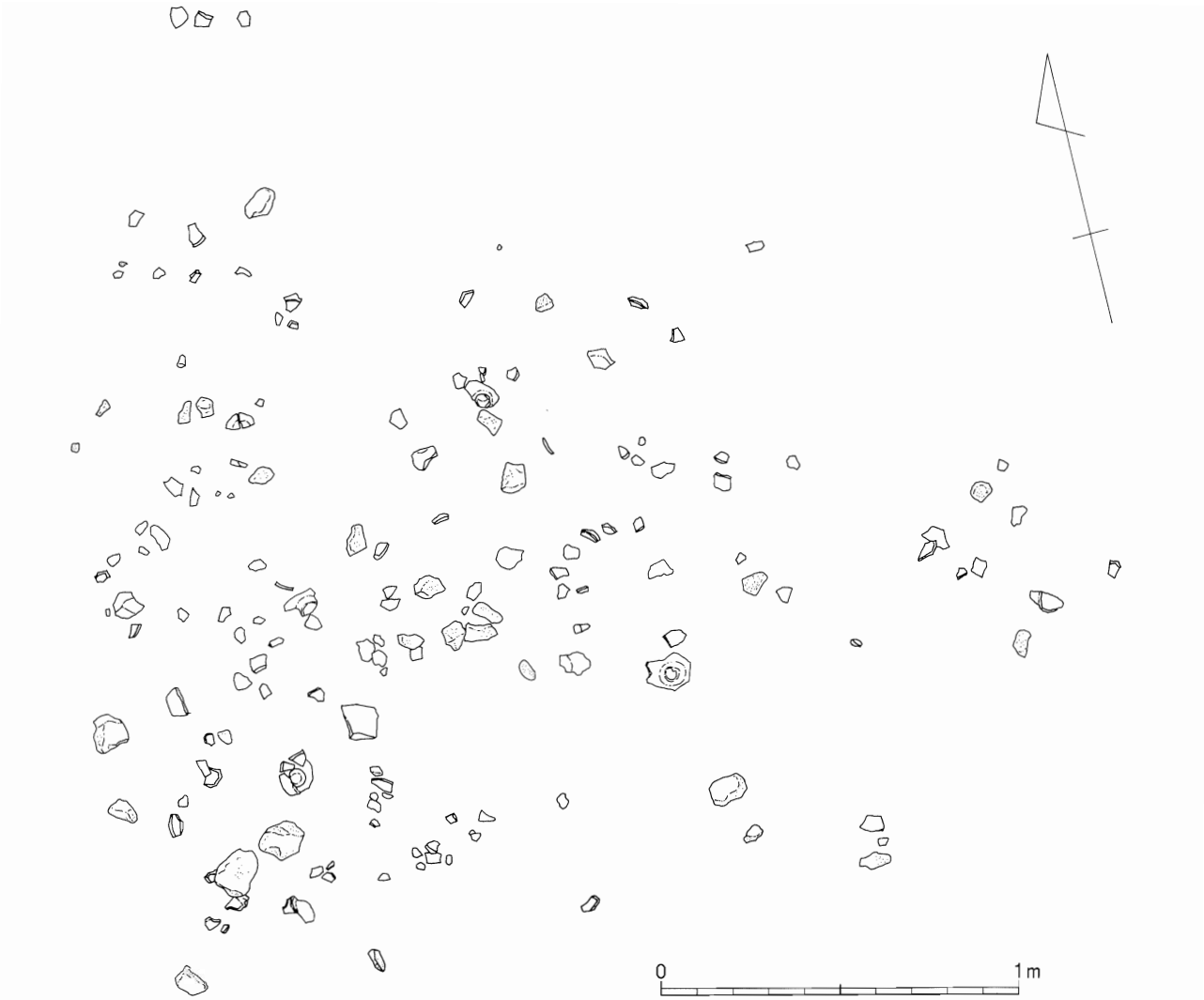
石器も比較的多く出土しており、第50図1～3は黒曜石の剥片、4は敲石の一部である。



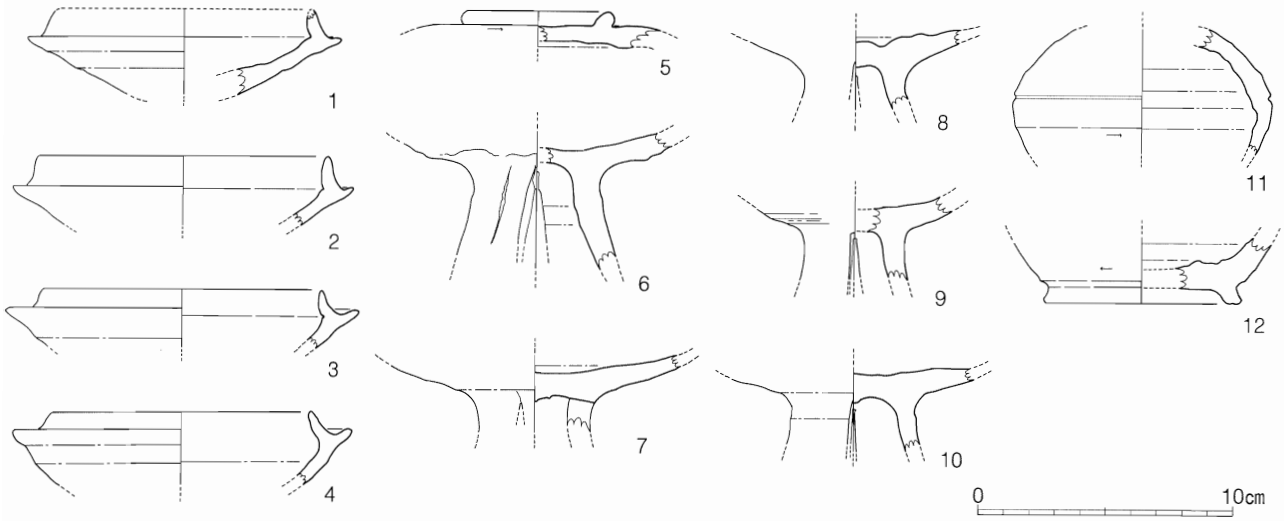
第45図　不明遺構SX01実測図



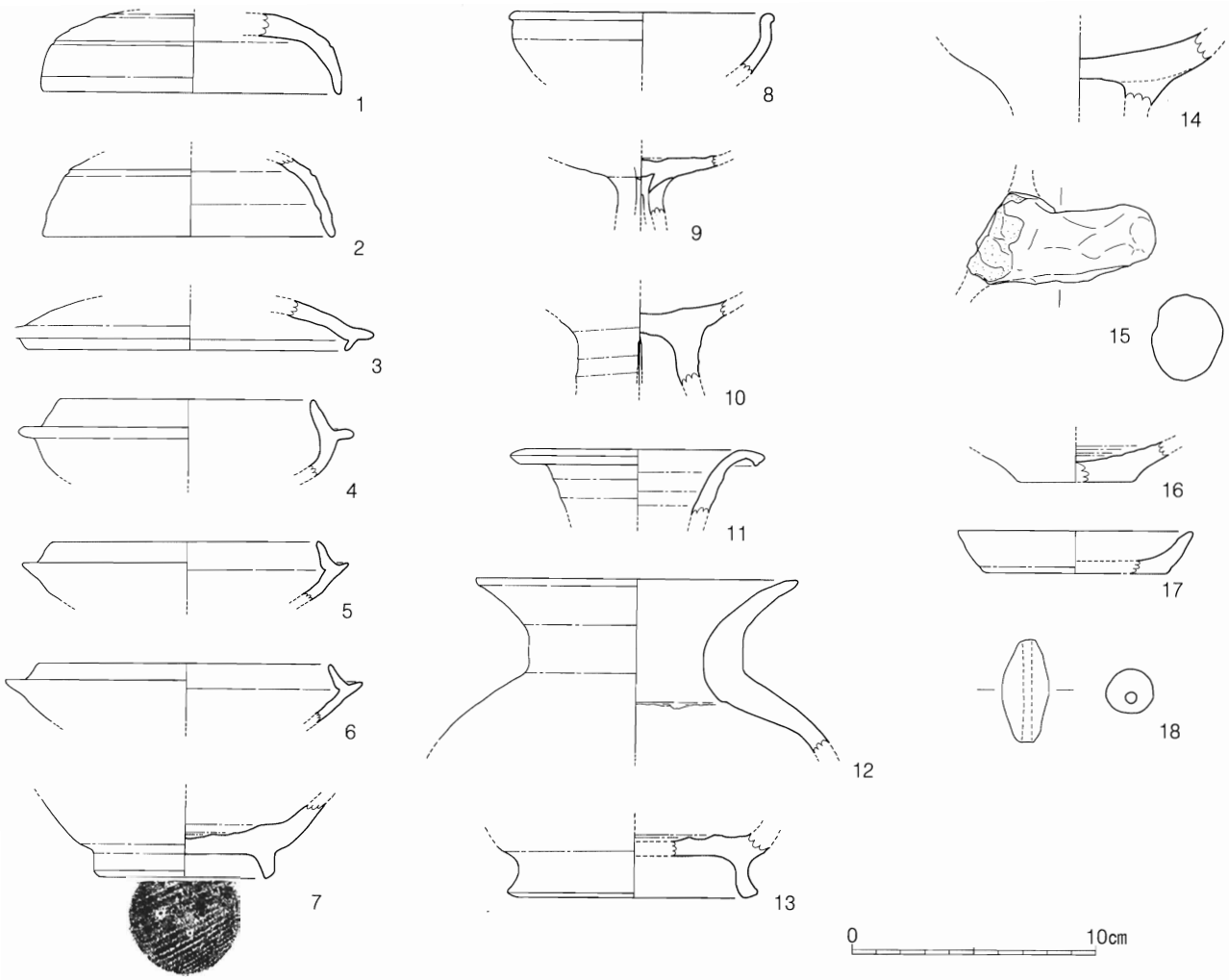
第46図　不明遺構SX01出土遺物実測図



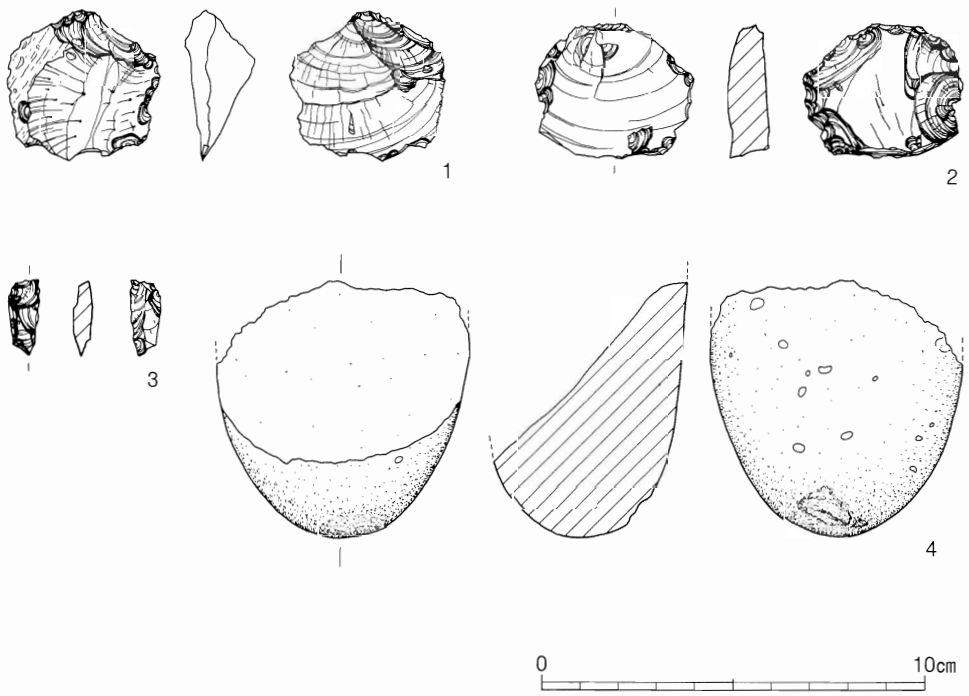
第47図　北西角土器集中出土状況図



第48図　北西角土器集中部分出土土器実測図



第49図　12区包含層出土土器実測図



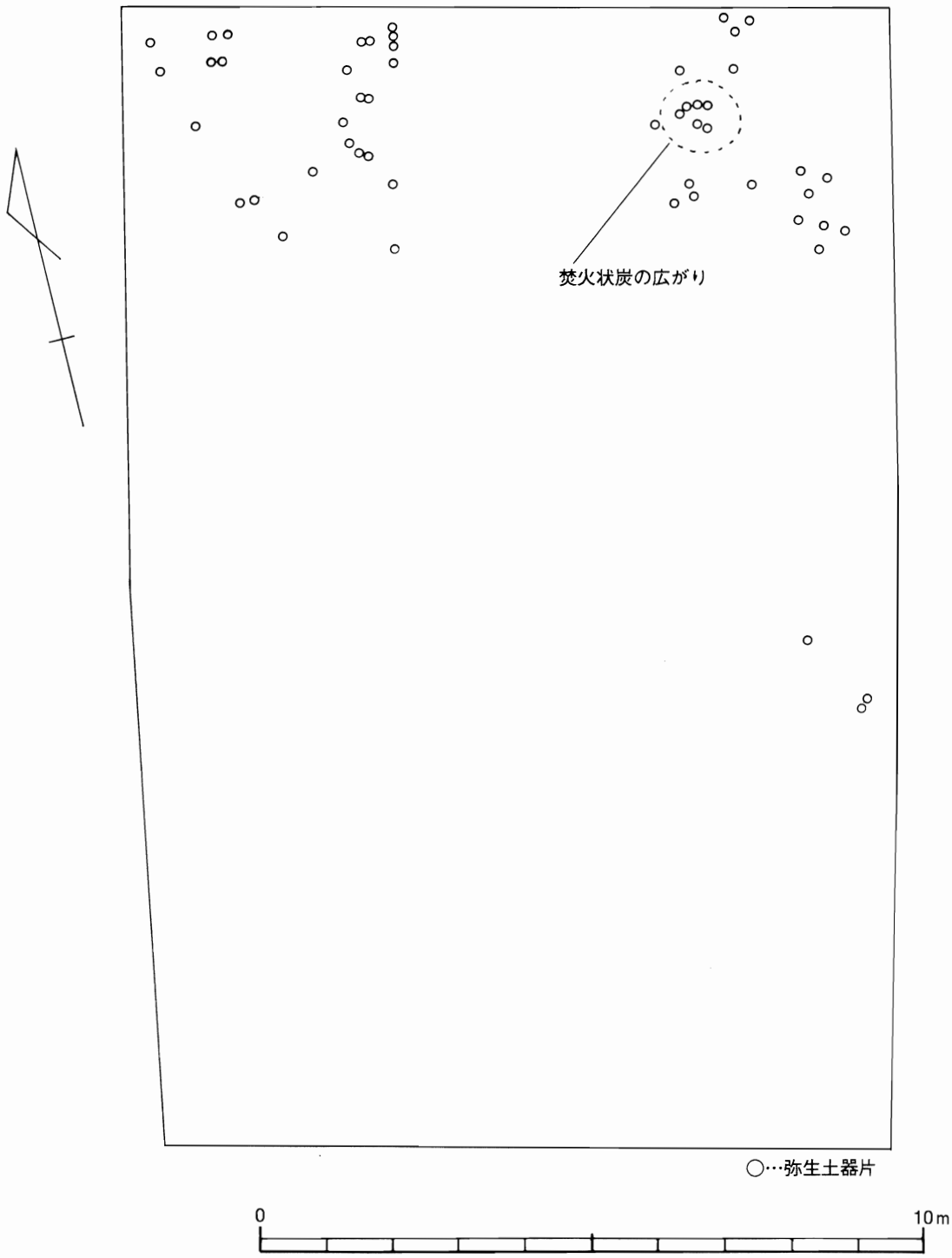
第50図　12区包含層出土石器実測図

14　区

・層序（第28図）

西側トレンチを観察したところ、最下層の湧水粗砂層の上にしまった灰褐色砂質土、灰色砂質土、濁灰褐色砂質土、淡褐色砂質土、淡灰色粘質土と堆積しており、その上が現在の耕作基盤土、耕作土となっている。

現在の耕作基盤土直下の淡灰色粘質土は12区以北の調査区ではみられなかった層で、現在の水田よ



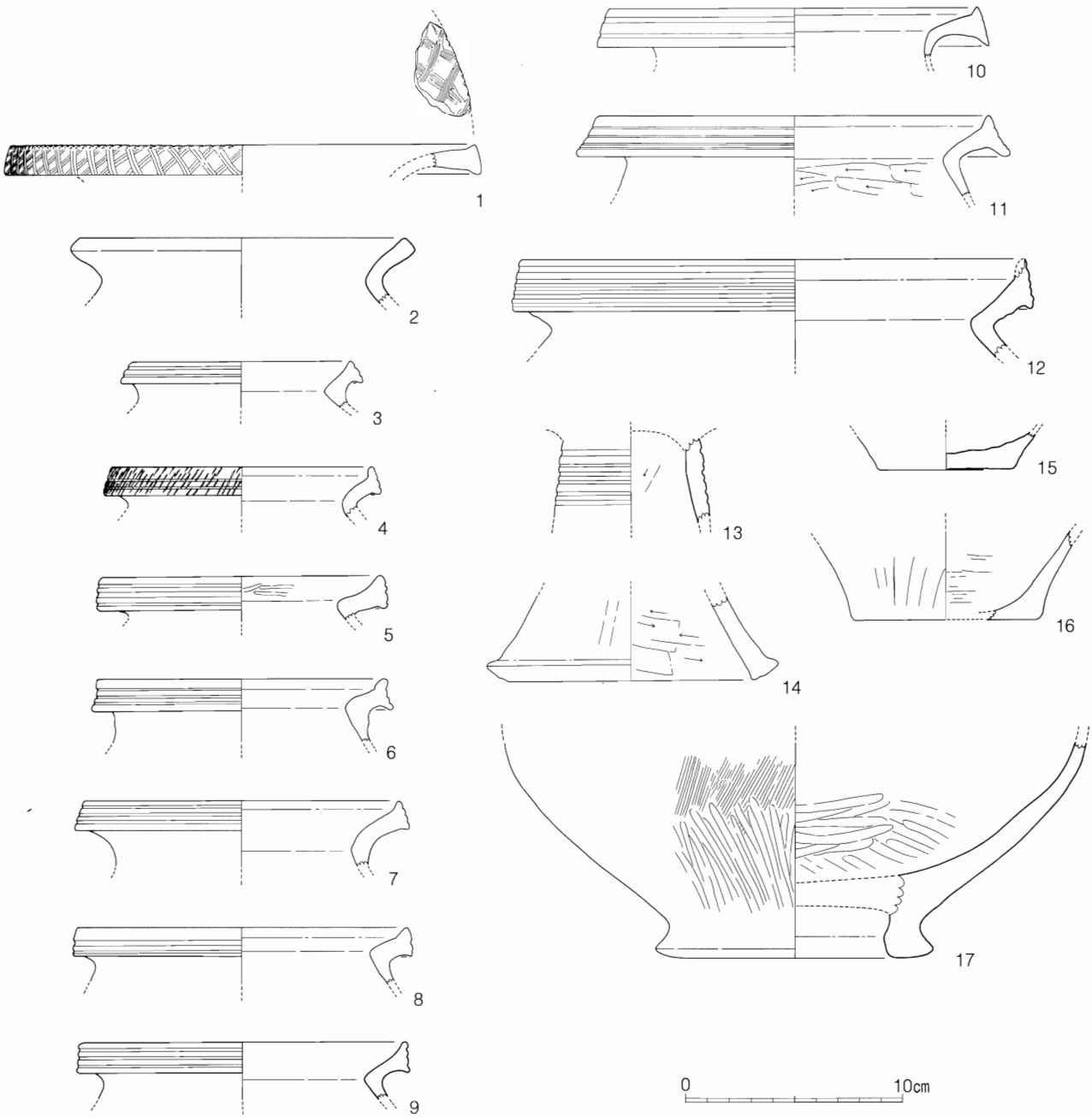
第51図　14区弥生土器分布状況図

りも古い時期の水田耕作土と考えられる。時期は不明である。その下の褐色砂質土上面は12区では振立柱建物が存在した層であるが、ここではその続きは検出できなかった。さらに下の濁灰褐色砂質土は弥生時代後期の土器片を含む層である。

・遺構

12区で検出した褐色砂質土上面から掘り込まれた遺構は検出できなかった。

褐色砂質土層下の濁灰褐色砂質土中からは風化が著しい弥生土器片が多く出土し（第51図）、この遺物包含層の半ばからは焚き火の痕跡状に炭の広がりを検出した。焚き火跡のレベルが生活面になっていた時期があることがわかったが、焚き火痕跡に伴う炭の上下レベルには10cm近い幅があり、降



第52図　14区濁灰褐色砂質土出土弥生土器実測図

雨等で粒子の細かい遺構面が少しずつ動いたものと考えられ、明確な遺構面をとらえることはできなかった。濁灰褐色砂質土を除去して、灰色砂質土上面でも再度精査をおこなったが、遺構を検出することはできなかった。

・遺物

濁灰褐色砂質土中から弥生土器の微小片が多数出土した（第52図）。風化が著しいものがほとんどであるが、17のみは土器片が多量に出土した場所からは若干離れた場所から出土した、残存状況良好な大きめの破片である。高台のついた壺と思われる。外面底部付近は縦方向のヘラミガキで上方は縦方向のハケメ、内面は丁寧なヘラミガキが施されている。調整の観察が困難なのもがほとんどであるため、時期判別は難しいが、形態から中期末～後期初頭におさまるものと思われる。

遺物包含層中からは古墳時代後期から中世の土師椀までの幅広い時期の土器が出土した（第53図）。割合的には古墳時代後期の須恵器が多かったようである。

個々の土器の詳細については、後頁の土器観察表に記載する。

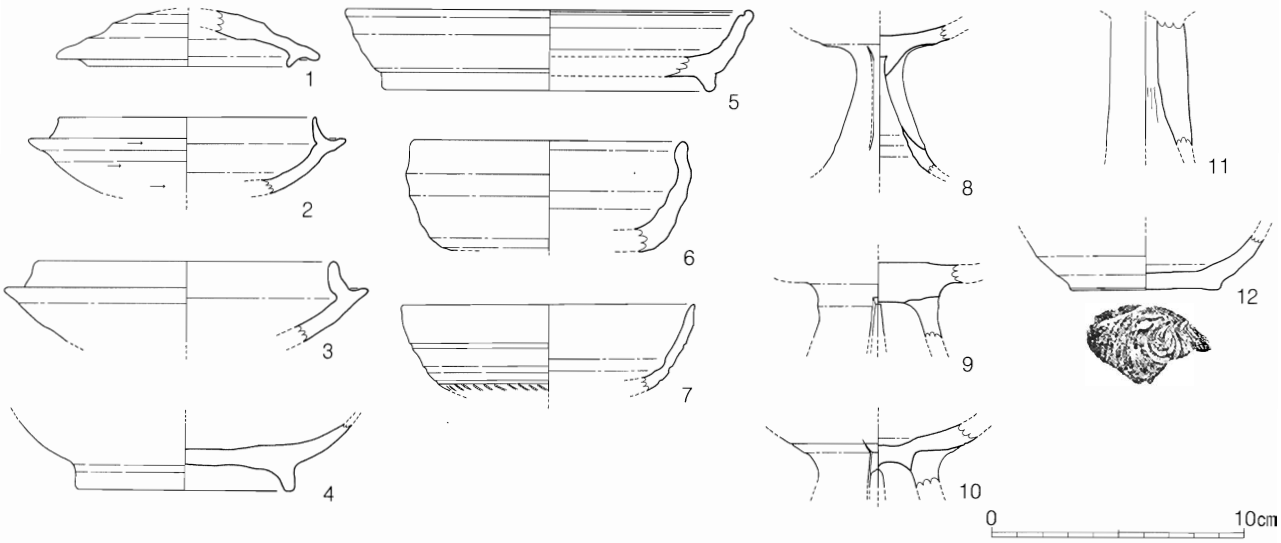
15　区

・層序（第28図）

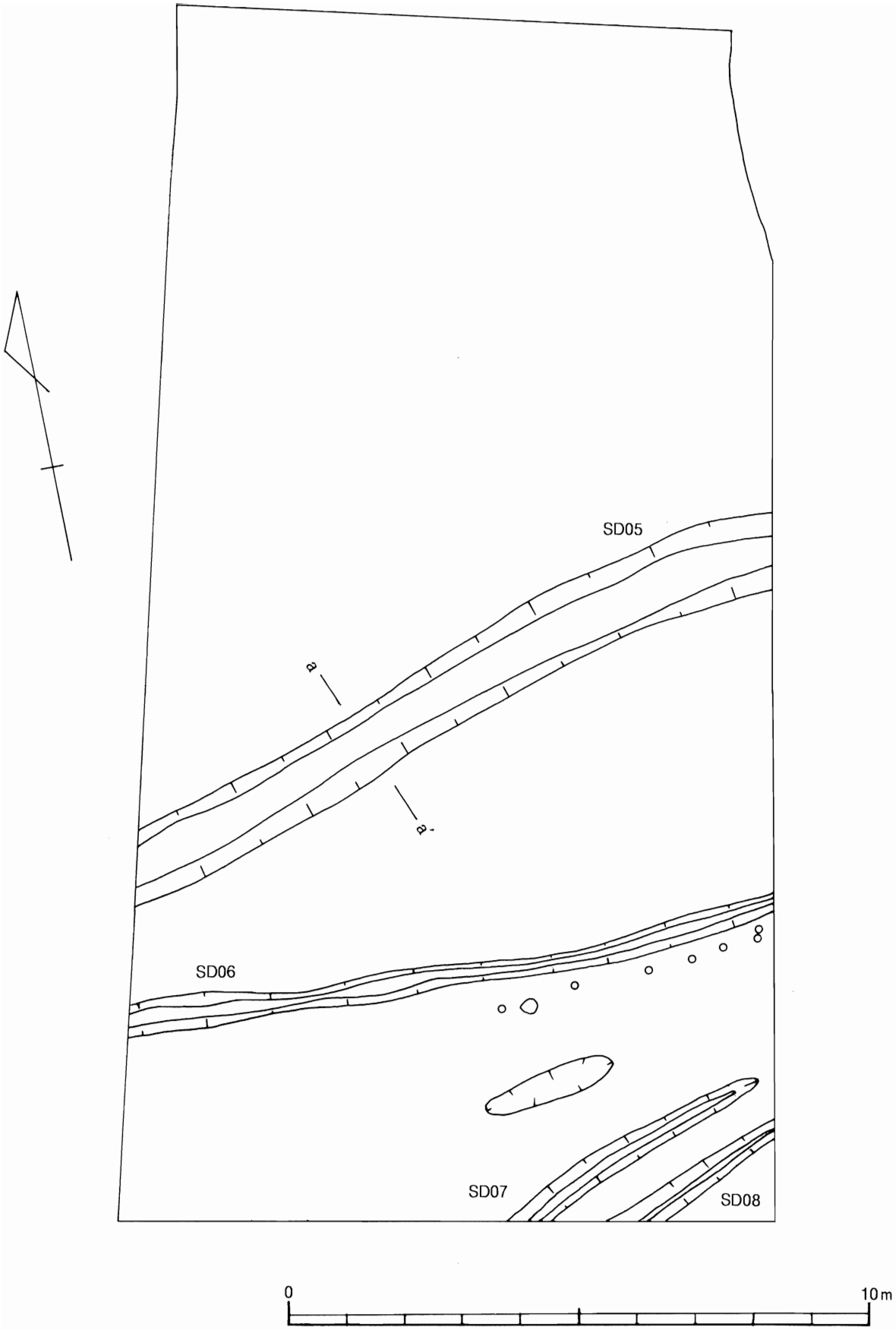
意宇川の氾濫原であった状況が顕著に観察できる土層である。

ほぼ中央の12m幅については、ところどころに砂層を挟む角礫層が標高10.5mというかなり高いレベルまで南北方向に山なりに堆積していた。この角礫層が最も古い堆積で、その後に北側、南側で角礫層が浸食されて堆積作用がおこなわれたと思われる。角礫層北側の層が南下がりであることから、浸食および堆積作用がおこなわれた時期の意宇川の一支流は15区では西から東側に向かって流れていたと考えられる。

全面に見られる層は褐色砂質土層から上の層である。褐色砂質土層は角礫層と南北の堆積土層がほぼ同じレベルで水平になった時点で堆積したことになり、この土層堆積状況は非常に不自然である。



第53図　14区包含層出土土器実測図



第54図　15区遺構検出状況図

褐色砂質土層上面は人為的な削平を受け、その上に褐色砂質土層以上の層が全面に堆積したものと思われる。

・遺構

褐色砂質土層下面の角礫層および灰褐色砂質土層上面に掘り込まれた溝４条とピット８カ所、土坑１カ所を検出した（第54図）。

溝ＳＤ05は、西－南東方向に若干カーブする溝で、幅約1.4m、深さ0.2mを測る。溝の流れの方向は不明である。セクションを観察すると（第55図）、角礫層上面および一部灰褐色砂質土層上面から掘られており、断面は緩やかなＵ字状を呈している。最下層には灰色粘質土が堆積しているが、その上には礫を含む砂層が堆積しており、ある程度の流速があったものと判断された。遺物は主に礫を含む砂層中から出土した。遺物は土師器片が中心であったが、須恵器片と黒曜石の剥片も含まれていた。時期判別可能な出土遺物の中で最も新しいものは６世紀初頭の須恵器であったことから、ＳＤ05の時期は６世紀初頭もしくはそれ以降と考えたい。

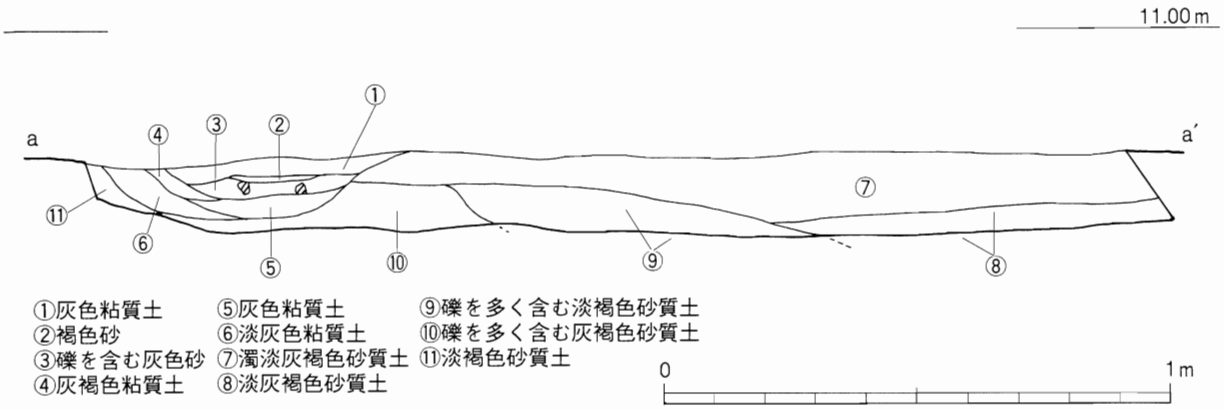
溝ＳＤ06は、西－東方向を指向する細い溝で、灰褐色砂質土層上面から掘り込まれており、幅0.6m、深さ0.1mを測る。埋土は砂層１層で、遺物は出土しなかった。調査区東側では、この溝の南側に沿って列をなした、直径10cm強の杭跡とも思える小さなピット８カ所を検出した。溝ＳＤ06に関連するものと思われるが、性格は不明である。

・遺物

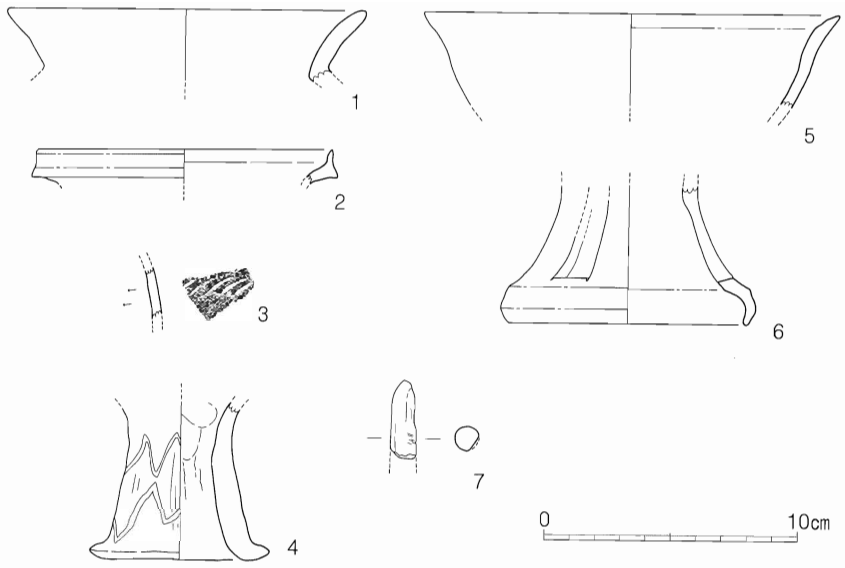
溝ＳＤ05から、土師器片多数と須恵器片２点、土製品１点が出土した（第56図）。土師器は小片が多く、図面化できるものは少なかった。４は手づくねで作られたような不整形な高坏の脚で、外面にはヘラで２段に鋸歯文が描かれているが、見方によっては菱形を意識して描かれたとも思われる。５、６は高坏の坏と脚である。７は棒状土製品で、欠損しているため原形は不明である。時期がわかる遺物は少量であるが、概ね古墳時代中期末と考えてよいであろう。

遺物包含層中からは、縄文時代末の突帯文土器から中世の土師皿まで幅広い時期の土器が出土した。割合的には奈良～平安時代初頭の須恵器が多かったようである（第57図）。

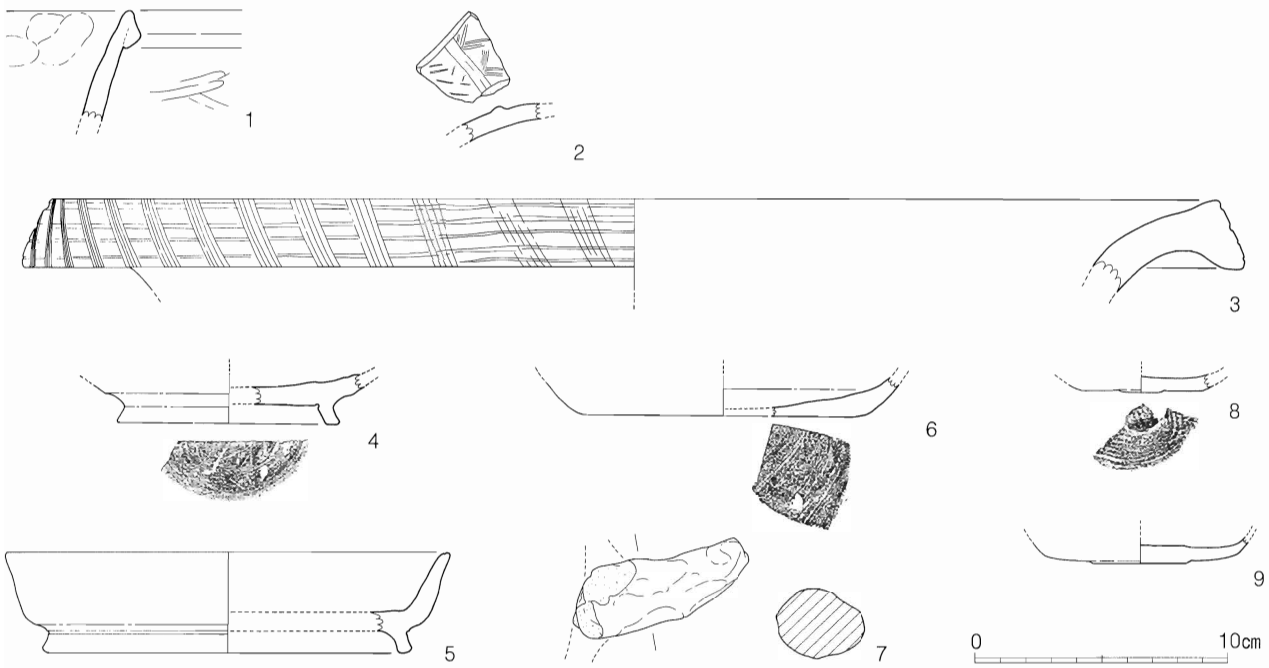
個々の土器の詳細については後頁の土器観察表に記載する。



第55図　溝SD05埋土土層断面図



第56図　溝SD05埋土土器実測図



第57図　15区包含層出土土器実測図

土 器 観 察 表

挿図番号	種類	器種	法量(cm)	胎　土	焼成	色　調	調整・手法の特徴等	備　考
32図－1	土師器	甕	口径(14.0)	0.5mm前後の砂粒を多く含む	良好	(外)淡黄褐色 (内)淡黄褐色	(外)ナデ(風化) (内)ナデ、ケズリ(風化)	
32図－2	土師器	甕	口径(10.5) 残存高 8.7	1mm前後の砂粒を含む	良好	(外)淡橙色 (内)淡橙色	(外)ナデ(風化)、口縁部ナデ (内)ケズリ	
32図－3	土師器	甕	口径(13.6)	0.5mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	(外)淡橙褐色 (内)淡橙褐色	(外)ナデ、ハケメ (内)ヘラケズリ	
32図－4	土師器	甕	口径(16.4)	1mm以下の砂粒を含む	良好	(外)白褐色～灰色(内)白褐色(断)淡茶灰色	(外)ナデ (内)ナデ、ケズリ	
32図－5	弥生	(底部)	底径(8.0)	砂粒を多く含む	良好	(外)淡灰色～灰色(内)白褐色(断)白褐色～淡灰色	(外)ミガキ (内)ハケメ	
32図－6	土師器	甕	口径(9.7)頸径(8.8)胴最大径(11.8)	1mm程度の砂粒を含む	良好	(外)白橙淡褐色(内)白橙淡褐色(断)白橙淡褐色	(外)ナデ、ハケメ (内)ナデ、ケズリ	
32図－7	土師器	甕	口径(9.5)	1mm程度の砂粒を含む	良好	(外)白橙灰色(内)白橙灰色(断)白橙灰色	(外)ナデ (内)ナデ、ケズリ	
32図－8	土師器	甕	口径(9.8) 頸径(8.3)	0.5mm以下の砂粒を多く含む	良好	(外)灰褐色～白褐色(内)灰褐色～白褐色(断)淡灰褐色	(外)ナデ、ハケメ (内)ナデ、ケズリ、指頭圧痕	
32図－9	土師器	甕	口径 9.8 頸径 8.1	1～1.5mm程度の長石、石英、他砂粒をまばらに含む	良好	(外)明橙褐色(内)明橙褐色(断)明橙褐色	(外)ナデ、肩部刺突文、胴部ナデ後ハケメ(内)ナデ、ケズリ	
32図－10	土師器	甕	口径(11.2)	0.5mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	(外)淡橙色 (内)淡橙褐色	(外)ナデ(風化)、ハケメ (内)ナデ、ケズリ	
32図－11	土師器	甕	口径(12.4)	0.5mm以下の砂粒を多く含む	良好	(外)淡黄白褐色 (内)淡橙灰色	(外)ハケメ (内)ハケメ、ヘラケズリ	
32図－12	土師器	(胴部)		1mm以下の砂粒を含む	良	(外)黄茶色 (内)黄茶色	タテ方向にヘラ描き文有 (内)ナデ	
32図－13	土師器	皿	口径 8.9 器高2.45	0.5mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	(外)淡橙色 (内)淡橙灰色	(外)ハケ後ミガキ (内)ミガキ	
32図－14	土師器	坏	坏部径(13.7)	1mm前後の砂粒を多く含む	良	(外)淡橙色 (内)淡橙色	(外)風化 (内)風化	全体の⅓程度残存
32図－15	土師器	坏	坏部径(13.2)	1mm前後の砂粒を多く含む	良	(外)淡橙色 (内)淡橙色	(外)風化 (内)風化	¼程度残存
32図－16	土師器	低脚坏	口径(13.4) 底径3.6 器高4.0	0.5～2mmの砂粒を多く含む	良好	(外)淡橙褐色 (内)淡橙白色	(外)ナデ (内)ナデ	
32図－17	土師器	低脚坏	口径(13.4) 底径3.6 器高4.4	1mm前後の砂粒を多く含む	良好	(外)橙褐色(内)橙褐色(断)淡橙色	(外)風化 (内)風化	
32図－18	土師器	低脚坏	口径(13.7) 脚接合部径2.9 底径4.2	密、1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	(外)白褐色(内)白褐色(断)白褐色	(外)ハケ後ナデ、口縁端部1条沈線 (内)ナデ	
32図－19	土師器	器台	坏部径10.2 底径(9.4) 器台6.7	1mm前後の砂粒を含む	良好	(外)淡橙色 (内)淡橙色	(外)ヘラミガキ(内)脚部ヘラケズリ、坏部内ヘラミガキ	円形透かし3ヵ所有
33図－1	弥生	壺	口径(34.4)	1mm以下の砂粒を多く含む	良好	(外)白茶色 (内)白茶色	(口縁部上面)10条凹線、円形浮文、刻目(外側・内側)(下面)ナデ	
33図－2	弥生	壺	頸径(12.8)	1mm以下の砂粒(長石、石英)を多く含む	良好	(外)淡茶色 (内)淡茶色～淡灰色	(外)ナデ、貼付突帯2条 (内)風化	
33図－3	弥生	壺	口径(28.4)	2mm前後の砂粒を多く含む	良好	(外)橙褐色(内)淡橙褐色、一部スス付着黒色	(外)風化、口縁端部1条凹線 (内)風化	
33図－4	弥生	壺	口径(29.0)	1mm以下の砂粒を含む	良好	(外)黄白茶色(内)黄白茶色(断)黒灰色	(外)ハケメ、口縁端部ナデ・2条擬凹線(内)ハケメ	口縁部1/6周程度残存
33図－5	弥生	壺	口径(24.8)	1mm前後の砂粒を多く含む	良好	(外)淡橙灰色 (内)淡灰褐色	(外)風化 (内)風化	
33図－6	弥生	壺	口径(40.2)	1mm前後の砂粒を含む	良好	(外)淡黄褐色(内)淡黄褐色(断)淡黄褐色	(外)ナデ、ハケメ、口縁端部3条擬凹線(内)ハケメ	
33図－7	弥生	壺	口径(16.7)	1mm前後の砂粒を含む	良好	(外)黒褐色 (内)橙褐色	(外)タテ方向のミガキ、口縁端部3条擬凹線(内)ナデ(風化)	口縁部1/8周程度残存
33図－8	弥生	壺	口径(17.8)	1mm前後の長石、石英、他砂粒を含む	良好	(外)白橙灰色(内)白灰色(断)白橙灰色	(外)口縁端部3条擬凹線 (内)ナデ	
34図－1	弥生	甕	口径(17.6)	2mm前後の砂粒を多く含む	良好	(外)淡橙灰褐色 (内)淡橙褐色	(外)風化 (内)風化	
34図－2	弥生	甕	口径(17.0)	0.5mm前後の砂粒を多く含む	良好	(外)淡橙灰色 (内)暗灰橙色	(外)ヨコナデ (内)ヨコナデ、胴部ケズリ	
34図－3	弥生	甕	口径(23.6) 頸径(21.4)	1～1.5mm程度の長石、石英、他砂粒を多く含む	良好	(外)白黄褐色(内)白黄褐色(断)白黄褐色	(外)ナデ、口縁端部1条凹線 (内)ナデ(風化)、ケズリ	

挿図番号	種類	器種	法量(cm)	胎　土	焼成	色　調	調整・手法の特徴等	備　考
34図－4	弥生	甕	口径(18.0)	1mm以下の砂粒を含む	良好	(外)灰褐色、スス付着(内)灰褐色	(外)ナデ、口縁端部4条擬凹線 (内)ナデ、胴部ケズリ	口縁部4cm程度残存
34図－5	弥生	甕	口径(13.4)	1mm前後の砂粒を多く含む	良好	(外)淡橙色(内)淡橙色(断)黒色	(外)ナデ、口縁端部3条擬凹線 (内)ナデ	
34図－6	弥生	甕	口径(16.8)	細砂を含む	良好	(外)白灰褐色(内)白褐色(断)淡灰色	(外)風化、口縁端部1条凹線 (内)風化	
34図－7	弥生	甕	口径(19.6)	1mm前後の砂粒を多く含む	良好	(外)淡橙色 (内)淡橙色	(外)ナデ、口縁端部4条擬凹線 (内)胴部ケズリ	口縁部1/10程度残存
34図－8	弥生	甕	口径(26.8)	1～1.2mm程の砂粒を多く含む	良好	(外)明橙灰色～淡橙灰色(内)淡橙灰色(断)明橙灰色～淡橙灰色	(外)風化、口縁端部3条擬凹線 (内)風化	
34図－9	弥生	甕	口径(25.8)	1～2mmの砂粒を多く含む	良好	(外)淡橙褐色(内)淡橙褐色、一部スス付着	(外)ハケメ、口縁端部4条擬凹線 (内)ナデ、ハケメ、ヘラケズリ	
34図－10	弥生	甕	口径(29.4) 頸径(25.5)	1～2mm程の長石、石英、他砂粒を多く含む	良好	(外)白橙色(内)白橙色(断)白橙色	(外)ナデ、口縁端部4条擬凹線 (内)ナデ、ケズリ(風化)	
34図－11	弥生	甕	頸径(12.6)	1mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	(外)淡灰色(内)淡灰色～淡灰肌色	(外)ナデ、貝殻による擬凹線、波状紋 (内)頸部～口縁ナデ、胴部ヘラケズリ	
34図－12	土師器	甕	口径(15.1)	1.5mm以下の砂粒(長石、石英)を含む	良好	(外)淡褐色、スス付着 (内)淡褐色～淡茶色	(外)ナデ (内)頸部～口縁ナデ、胴部ヘラケズリ	
34図－13	土師器	甕	口径(16.0)	1mm以下の砂粒を多く含む	良好	(外)淡橙灰色、一部スス付着(内)白橙色～白橙灰色(断)白橙灰色	(外)ナデ (内)ナデ	
34図－14	土師器	甕	口径(19.0)	1mm以下の砂粒を多く含む	良好	(外)黒灰色～白褐色(内)白褐色(断)淡灰色～白褐色	(外)ナデ (内)風化	
34図－15	土師器	甕	口径(20.2)	細砂を含む	良好	(外)白褐色(内)白褐色(断)灰色	(外)ナデ (内)ナデ	
34図－16	土師器	甕	口径(20.2)	5mm以下の砂粒を含む	良好	(外)淡灰茶色 (内)淡茶色	(外)口縁部ナデ、頸部ハケ(内)口縁部ナデ、頸部ヘラケズリ、絞り痕有	
34図－17	土師器	甕	口径(17.4)	密	良好	(外)淡茶褐色 (内)淡橙褐色	(外)ナデ (内)ナデ、ヘラケズリ	
34図－18	土師器	甕	口径(16.6)	1mm程の砂粒、細粒を多く含む	良好	(外)茶褐色、スス付着黒色(内)白褐色(断)灰色	(外)ナデ (内)ナデ、ミガキ、ケズリ	
34図－19	弥生	甕	口径(12.8)	1mm前後の砂粒を含む	良好	(外)灰白茶色 (内)灰白茶色	(外)風化 (内)ナデ	口縁部のみ4cm程残存
35図－1	弥生	(胴部)		1～2mmの砂粒を多く含む	良好	(外)淡橙色 (内)淡橙色	(外)綾杉文(風化) (内)ナデ	
35図－2	弥生	(胴部)		1mm前後の砂粒を多く含む	良好	(外)白褐色～茶褐色、一部スス付着黒色(内)灰色(断)白褐色	(外)全面に文様有 (内)ケズリ	
35図－3	弥生	(胴部)		1～2mmの砂粒を多く含む	良好	(外)灰褐色 (内)灰褐色	(外)楕円形の文様、2条凹線 (内)ケズリ	
35図－4	弥生	(胴部)		1.2mm程の石英、他砂粒(茶～橙色の砂粒)を含む	良好	(外)白橙色、一部淡橙色(内)白橙色(断)白橙色～淡灰色	(外)ハケメ、連続刺突文 (内)風化	
35図－5	弥生	(胴部)		1mm以下の砂粒を含む	良好	(外)白茶色 (内)白茶色	(外)凹線、刻目 (内)ケズリ	
35図－6	弥生	(肩部)		1mm程の砂粒を含む	良好	(外)白褐色(内)白褐色(断)灰色	(外)突帯に連続圧痕文 (内)指頭圧痕	
35図－7	弥生	注口土器		1～2mmの砂粒を多く含む	良好	(外)淡橙色 (内)白灰橙色	(外)ハケ後ナデ(風化) (内)ケズリ	把手有
35図－8	弥生	高坏	口径(20.0)	1mm前後の砂粒を多く含む	良好	(外)白橙淡灰色(内)白橙淡灰色(断)灰色	(外)風化 (内)風化	
35図－9	土師器	高坏	口径(11.4)	1mm以下の砂粒を含む	良好	(外)淡褐色 (内)淡褐色	(外)ナデ (内)ヘラケズリ	
35図－10	土師器	高坏	口径(18.8)	1mm前後の砂粒を多く含む	良好	(外)淡橙褐色 (内)淡橙褐色	(外)風化 (内)風化	
35図－11	土師器	高坏	底径(11.8)	1mm以下の長石、石英、他砂粒を多く含む	良好	(外)明橙色(内)明橙色～褐橙色(断)橙色	(外)風化、裾部1条沈線 (内)ケズリ、風化	
35図－12	土師器	低脚坏	口径(16.7)	1～1.2mm程の砂粒を含む	良好	(外)白橙淡灰色(内)白橙淡灰色(断)白橙淡灰色	(外)風化 (内)風化	
35図－13	弥生	小型壺	口径(8.7)	1mm程の砂粒を多く含む	良好	(外)淡灰褐色(内)淡灰褐色(断)灰色	(外)風化 (内)風化	
35図－14	弥生	(胴部)	胴最大径(10.4)	密、1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	(外)灰褐色(内)灰褐色～暗灰色(断)淡灰褐色	(外)胴部上方3条凹線、上下に連続羽状文(内)ケズリ	
35図－15	弥生	(把手)		1mm前後の砂粒を含む	良	(外)灰黒褐色 (内)灰黒褐色	(外)ナデ	先端を欠く

挿図番号	種類	器種	法量(cm)	胎　土	焼成	色　調	調整・手法の特徴等	備　考
35図－16	弥生	(底部)	底径(4.0)	1mm以下の砂粒を多く含み、2~3mmの砂粒を含む	良好	(外)淡白橙色~明橙色(内)灰色(断)淡灰褐色	(外)ハケメ(内)ハケメ、指頭圧痕	底中央に穿孔
35図－17	弥生	高坏	底径9.0	0.5～1mmの砂粒を多く含む	良好	(外)淡橙褐色(内)暗灰橙色	(外)ナデ(内)ナデ	
35図－18	弥生	(底部)	底径(6.4)	密、1mm以下の砂粒を少し含む	良好	(外)白褐色~暗灰色(内)白灰色~暗灰色(断)淡灰色	(外)ナデ、底部ナデ(内)ケズリ後ナデ	
35図－19	弥生	(底部)	底径(7.6)	1mm以下の砂粒を含む	良好	(外)灰褐色(内)灰褐色(断)灰褐色	(外)ハケメ(内)ケズリ	
35図－20	弥生	(底部)	底径(5.4)	2mm前後の石英、他砂粒を多く含む	良好	(外)灰褐色~淡褐色(内)淡褐色(断)淡褐色	(外)ケズリ(内)ハケメ	
35図－21	弥生	(底部)	底径(10.9)	1mm程の砂粒を多く含む	良好	(外)淡灰色~暗灰色(内)白褐色(断)淡灰色~白褐色	(外)ケズリ後ナデ、底部風化(内)ケズリ	
35図－22	弥生	(底部)	底径(8.4)	2mm前後の砂粒を多く含む	良好	(外)淡黄灰色、一部スス付着黒色(内)淡橙褐色	(外)ナデ(内)風化	
35図－23	弥生	(底部)	底径(8.8)	1～1.5mm程の砂粒を含む	良好	(外)白橙褐色(内)白灰色(断)白橙褐色~白灰色	(外)風化(内)ケズリ	
35図－24	弥生	(底部)	底径(12.0)	1.5~2mmの砂粒及び細粒を多く含む	良好	(外)灰色~暗灰色(内)白褐色(断)白褐色~淡灰褐色	(外)ハケメ、底部ナデ(内)ケズリ	
36図－1	弥生	(底部)	底径6.2	1.5~2mm程の砂粒を多く含む	良好	(外)茶灰色(内)白褐色(断)褐色~灰色	(外)ミガキ(内)ケズリ	
36図－2	須恵器	蓋	器径(10.4)	細粒をわずかに含む	良好	(外)灰色(内)灰色	(外)回転ナデ(内)回転ナデ	
36図－3	須恵器	坏	口　径(11.9)受部径(14.8)	1mm以下の砂粒を含む	良好	(外)淡灰色(内)淡灰色(断)淡灰色	(外)回転ナデ(内)回転ナデ	
38図	土師器	坏	口径12.6器高 3.5	0.5~1mmの砂粒をわずかに含む	良好	(外)淡茶褐色、全体的ススが付着黒色(内)淡茶褐色	(外)ハケメ(内)ナデ	
40図	須恵器	坏	口径9.9	密	良好	(外)灰色(内)灰色	(外)ナデ(内)ナデ	
41図－1	弥生	甕	口径(11.2)	0.7mm以下の砂粒を含む	良好	(外)灰褐色(内)暗灰色(断)灰褐色	(外)ナデ(内)ナデ、ケズリ	
41図－2	須恵器	蓋	器径(9.9)	1mm以下の砂粒を含む	良好	(外)灰色~淡灰色(内)白灰色(断)白灰色	(外)回転ナデ(内)回転ナデ	
41図－3	須恵器	蓋	口径(12.0)受部径(14.1)	密、細粒をわずかに含む	良好	(外)淡灰色(内)白灰色(断)白灰色	(外)回転ナデ、回転ヘラケズリ(内)回転ナデ	
41図－4	須恵器	蓋		1～2mmの細粒をわずかに含む	良好	(外)灰色(内)灰色	(外)回転ヘラケズリ後回転ナデ(内)回転ナデ後多方向の静止ナデ	ツマミ部分は後で貼付
41図－5	須恵器	高台付坏		1mm以下の砂粒(白・黒色)をわずかに含む	良好	(外)灰色(内)灰色	(外)下部糸切痕、糸切後回転ナデ(内)回転ナデ後静止ナデ	
41図－6	須恵器	高台付坏		細粒をわずかに含む	良好	(外)灰色(内)淡灰色	(外)回転ナデ(内)静止ナデ	
41図－7	須恵器	高坏		細粒をわずかに含む	良好	(外)黒灰色(内)灰白色	(外)回転ナデ、ヘラ描きによる連続文有(内)回転ナデ	坏部のみ残存
41図－8	須恵器	高坏		1mm前後の砂粒を少し含む	良好	(外)灰白色(内)灰白色	(外)回転ナデ(内)回転ナデ、坏見込部回転ナデ後静止ナデ	3方向に透かし有
41図－9	須恵器	高坏		1mm以下の砂粒(長石、石英)をわずかに含む	良好	(外)灰色(内)灰色	(外)ナデ、わずかにハケメ残る(内)ナデ	
41図－10	須恵器	高坏		1mm以下の砂粒をまばらに含む	良好	(外)灰色(内)淡灰色(断)淡灰赤色	(外)回転ナデ(内)回転ナデ	3方向に透かし有
41図－11	須恵器	高坏		1mm前後の砂粒を含む	良好	(外)灰色(断)淡灰色	(外)回転ナデ(内)回転ナデ、坏部内回転ナデ後静止ナデ	3方向に透かし有
41図－12	土師器	甕	口径(20.6)	1mm程の砂粒を多く含む	良好	(外)淡褐色(内)白灰褐色(断)白灰褐色~淡灰褐色	(外)ナデ(内)風化	
41図－13	土師器	(把手)		1mm前後の砂粒を多く含む	良好	(外)白黄橙色(断)白黄褐色	(外)ナデ	
41図－14	土師器	(把手)		1mm以下の砂粒を含む	良好	(外)灰黄色、一部淡赤褐色	(外)ナデ	
41図－15	陶磁器	白磁	口径(15.4)	緻密	良好	(外)薄青白濁色(内)薄青白濁色(断)緻灰白色	玉縁状口縁をもつ	口縁部3cm程度残存
41図－16	土師器	柱状高台付皿	残存高3.7	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	(外)淡白黄色(内)淡白黄色	(外)ナデ、底部糸切痕跡(内)ナデ	
41図－17	土師器	皿	底径(6.4)	細粒(長石他)をやや含む	良好	(外)淡灰褐色(内)淡灰褐色	(外)底部糸切痕(内)ナデ	

挿図番号	種類	器種	法量(cm)	胎　土	焼成	色　調	調整・手法の特徴等	備　考
42図－1	須恵器	蓋	器径(10.1)	1mm以下の砂粒を含む	良好	(外)淡灰色、灰色(内)淡灰色	(外)回転ナデ、回転ヘラ回転ケズリ後ナデ(内)回転ナデ	口縁部片
42図－2	須恵器	坏	口径(11.0) 受部径(14.0)	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	(外)灰色 (内)灰色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	
42図－3	須恵器	坏	口径(10.8) 受部径(13.0)	1mm前後の砂粒をわずかに含む	良好	(外)灰色 (内)灰色	(外)回転ナデ、下部回転ヘラケズリ(内)回転ナデ	
46図－1	須恵器	坏	口径(9.6) 受部径(12.6)	1mm以下の砂粒(黒色)をやや含む	良好	(外)淡灰色 (内)淡灰色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	
46図－2	須恵器	高坏		1mm前後の砂粒を含む	良好	(外)灰色(内)淡灰色(断)淡灰色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	2方向に透かし有
46図－3	土師器	(把手)		1mm以下の細粒を多く含む	良好	(外)白黄褐色 (内)白黄褐色	(外)ナデ	
48図－1	須恵器	坏	口径(10.0) 受部径(12.4)	1mm以下の砂粒をやや含む	良好	(外)灰色 (内)灰色	(外)ナデ (内)ナデ	
48図－2	須恵器	坏	口径(11.4) 受部径(13.4)	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	(外)淡灰色～灰色(内)淡灰色	(外)ナデ (内)ナデ	
48図－3	須恵器	坏	口径(10.9) 受部径(14.0)	0.7mm程の砂粒をわずかに含む	良好	(外)淡灰色(内)淡灰色(断)淡灰色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	
48図－4	須恵器	坏	口径(10.2) 受部径(13.4)	細粒を含む	良好	(外)灰色 (内)淡灰色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	1/6周程度残存
48図－5	須恵器	蓋		1mm以下の砂粒を少し含む	良好	(外)灰色 (内)灰色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	ツマミ部分は後から粘土紐を貼付
48図－6	須恵器	高坏		1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	(外)灰色 (内)灰色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	脚½残存 2方向に透かし有
48図－7	須恵器	高坏		細粒を多く含む	良好	(外)淡灰色(内)淡灰黄褐色(断)白灰色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	脚部3方向に透かし有
48図－8	須恵器	高坏		細粒をわずかに含む	良好	(外)淡灰色 (内)淡灰色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	2方向に透かし有
48図－9	須恵器	高坏		1mm以下の砂粒を含む	良好	(外)淡灰色(内)淡灰色(断)淡灰色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	2方向に透かし有
48図－10	須恵器	高坏		密、1mm程の砂粒をわずかに含む	良好	(外)淡灰色(内)白灰色(断)白灰色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ後多方向ナデ	2方向に透かし有
48図－11	須恵器	坏	胴径(10.7)	密、細粒を含む	良好	(外)淡灰茶色(内)淡灰色(断)淡灰茶色～淡灰色	(外)回転ナデ、回転ヘラケズリ、胴部1条凹線(内)回転ナデ	
48図－12	須恵器	高台付坏	底径(7.6)	密、1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	(外)淡灰色(内)淡灰色(断)淡灰色	(外)回転ナデ、高台端部凹線 (内)回転ヘラケズリ	
49図－1	須恵器	蓋	口径(11.4)	密	良好	(外)灰色 (内)灰色	(外)ナデ (内)ナデ	
49図－2	須恵器	蓋	器径(9.8)	細粒をわずかに含む	良好	(外)黒灰色(内)黒灰色(断)灰色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	
49図－3	須恵器	蓋	口径(11.8) 受部径(14.2)	白色の細粒をわずかに含む	やや不良	(外)淡灰色 (内)淡赤褐色	(外)回転ナデ、静止ナデ (内)回転ナデ	
49図－4	須恵器	坏	口径(12.6) 受部径(16.0)	細粒をやや含む	良好	(外)淡灰色～灰色 (内)淡灰色～灰色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	
49図－5	須恵器	坏	口径(10.7) 受部径(13.4)	0.5mm以下の砂粒をまばらに含む	良好	(外)淡灰色(内)淡灰色(断)淡灰色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	
49図－6	須恵器	坏	口径(11.8) 受部径(14.7)	0.5mm程の砂粒をまばらに含む	良好	(外)淡灰色(内)淡灰色(断)淡灰色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	
49図－7	須恵器	高台付坏	底径7.4	密	良好	(外)灰色 (内)灰色	(外)ナデ (内)ナデ	
49図－8	須恵器	坏	口径(10.4)	細粒をわずかに含む	良好	(外)青灰色(内)青灰色(断)灰色	(外)回転ナデ (外)回転ナデ	口縁部片3cm程残存
49図－9	須恵器	高坏		1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	(外)黒灰色(半)、淡灰色(半)	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	2方向に透かし有
49図－10	須恵器	高坏		密、細粒をまばらに含む	良好	(外)淡灰色(内)淡灰色(断)淡灰色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ後ナデ	脚部2方向に透かし有
49図－11	須恵器	壺	口径(10.4)	1mm以下の砂粒を含む	良好	(外)青灰色 (内)青灰色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	口縁1/6周程度残存
49図－12	須恵器	壺	口径(13.2)	密	良好	(外)灰色 (内)灰色	(外)ナデ (内)ナデ	
49図－13	須恵器	高台付坏	底径(10.2)	1mm以下の砂粒を少し含む	良好	(外)青灰色(内)青灰色、高台内濃灰色(断)灰白茶色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	

挿図番号	種類	器種	法量(cm)	胎　土	焼成	色　調	調整・手法の特徴等	備　考
49図－14	土師器	高坏		1mm前後の砂粒を少し含む	良	(外)白橙色 (内)白橙色	(外)風化 (内)風化	坏見込部½残存
49図－15	土師器	(把手)		1mm前後の長石、石英他砂粒を多く含む	良好	(外)白黄褐色(内)白黄褐色(断)明黄褐色	(外)ナデ	
49図－16	土師器	(底部)	底径(4.6)	密	良好	(外)淡灰褐色(内)茶褐色(断)黒茶色	(外)回転ナデ (内)風化	
49図－17	土師器	皿	口径(9.5) 底径(7.4)	長石微粒を少し含む	良好	(外)白橙色(内)白橙色(断)淡橙灰色	(外)風化 (内)風化	
49図－18	土製品	土錘	全長4.2 幅 1.9	長石、石英を少し含む	良好	(外)灰～黒色(黒斑)	(外)ナデつけ	ほぼ完形
52図－1	弥生	壺	口径(21.4)	細粒を含む	良好	(外)白黄灰色～淡灰色 (内)白黄灰色～淡灰色 (断)白黄灰色～淡灰褐色	(外)ナデ、口縁端部斜格子文・刻目 (内)斜格子文	
52図－2	弥生	甕	口径(12.8)	0.5～1mmの砂粒を多く含む	良好	(外)淡橙白色 (内)暗灰色	(外)ナデ(風化) (内)風化	
52図－3	弥生	甕	口径(10.0)	1.5mm前後の砂粒を含む	良好	(外)白橙色 (内)白橙色	(外)頸部外面ナデ、口縁端部2条擬凹線、他風化(内)風化	口縁部1/6周程度残存
52図－4	弥生	甕	口径(12.0)	1mm前後の砂粒を含む	良好	(外)黄白茶色 (内)黄白茶色	(外)ナデ、口縁端部2条擬凹線、文様有(内)ナデ	口縁部1/10周程度残存
52図－5	弥生	甕	口径(12.7)	細粒をわずかに含む	良好	(外)白茶色、口縁外面淡褐色・スス付着(内)白茶色(断)黒灰色	(外)ナデ、口縁端部3条擬凹線 (内)口縁内面ミガキ	口縁部1/8周残存
52図－6	弥生	甕	口径(13.0)	1～2mmの砂粒を多く含む	良好	(外)淡橙白色 (内)淡橙白色	(外)風化、口縁端部3条擬凹線 (内)風化	
52図－7	弥生	甕	口径(14.4)	1～2mmの砂粒を多く含む	良好	(外)淡橙褐色 (内)淡橙褐色	(外)ナデ、口縁端部3条擬凹線 (内)ナデ、ヘラケズリ	
52図－8	弥生	甕	口径(15.1)	1～2mmの砂粒を含む	良好	(外)淡白橙色 (外)淡白橙色	(外)口縁端部2条擬凹線、他風化 (内)風化	口縁部1/8残存
52図－9	弥生	甕	口径(15.2)	密、0.5mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	(外)淡橙茶褐色 (内)淡黄褐色	(外)ナデ、口縁端部3条擬凹線 (内)ナデ、ケズリ	
52図－10	弥生	甕	口径(17.0)	1.5～2mm程の長石、石英、他砂粒を多く含む	良好	(外)淡橙色(内)淡橙色(断)灰色	(外)ナデ(風化)、口縁端部2条凹線 (内)風化	
52図－11	弥生	甕	口径(14.2)	1mm前後の砂粒を多く含む	良好	(外)淡黄白色 (内)淡灰色	(外)風化、口縁端部3条擬凹線 (内)胴部ケズリ	
52図－12	弥生	甕	口径(23.2)	1～3mmの砂粒を多く含む	良好	(外)白橙茶色 (内)白橙茶色	(外)ナデ、口縁端部5条擬凹線 (内)ケズリ(風化)	口縁部7cm程残存
52図－13	弥生	高坏		1mm以下の砂粒を含む	良好	(外)淡橙褐色 (内)淡橙褐色	(外)6条擬凹線 (内)風化	筒部3cm程残存
52図－14	弥生	高坏	底径(11.0)	1mm以下の砂粒を少し含む	良好	(外)白褐色～灰色(内)白褐色(断)灰色～淡灰色	(外)ミガキ後ナデ (内)ケズリ	脚部
52図－15	弥生	(底部)	底径(6.2)	密、細粒をわずかに含む	良好	(外)橙色(内)淡橙色(断)橙色	(外)回転ナデ (内)ナデ	
52図－16	弥生	(底部)	底径(18.5)	1mm以下の細粒を含む	良好	(外)灰褐色～白褐色 (内)灰褐色～白褐色 (断)灰褐色～白褐色	(外)ミガキ、ナデ (内)ハケメ	
52図－17	弥生	(底部)	底径(12.8)	1.5mm以下の砂粒を含む	良好	(外)橙色～褐色(内)白茶色、一部スス付着(断)黒灰色	(外)上部ハケメ、下部タテ方向のヘラミガキ(内)ヨコ方向のヘラミガキ	壺か？ ¼周弱残存
53図－1	須恵器	蓋	口径(8.0) 受部径(10.4)	1mm弱の砂粒をわずかに含む	良好	(外)淡灰色(内)淡灰色(断)淡灰色	(外)回転ナデ、回転ヘラケズリ (内)回転ナデ	
53図－2	須恵器	坏	口径(10.1) 受部径(12.5)	1mm以下の砂粒を少量含む	良好	(外)淡灰色(内)淡灰色(断)淡灰色	(外)回転ナデ、回転ヘラケズリ (内)回転ナデ	
53図－3	須恵器	坏	口径(11.6) 受部径(14.2)	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	(外)灰色 (内)灰色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	
53図－4	須恵器	高台付坏	底径(3.8)	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	(外)暗灰色 (内)灰色	(外)ナデ、底部糸切後ナデ (内)ナデ	
53図－5	須恵器	高台付坏	器径(15.7) 器高3.2	1mm以下の細粒を含む	良好	(外)灰白色 (内)灰白色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	1/8周程度残存
53図－6	須恵器	坏	口径(10.5)	1mm前後の砂粒・細粒を含む	良好	(外)濁灰色 (内)濁灰色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	
53図－7	須恵器	高坏	口径(9.8)	細粒をわずかに含む	良好	(外)黒灰色(内)黒灰色(断)灰色	(外)回転ナデ、3条凹線、クシによる連続刺突文(内)回転ナデ	坏部片
53図－8	須恵器	高坏		1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	(外)濃灰色 (内)灰色	(外)回転ナデ (内)坏部内面多方向ナデ	3方向に透かし有
53図－9	須恵器	高坏		1mm前後の砂粒を含む	良好	(外)灰黒色、外面少し自然釉かかる(断)灰紫色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	2方向に透かし有

挿図番号	種類	器種	法量(cm)	胎　土	焼成	色　調	調整・手法の特徴等	備　考
53図－10	須恵器	高坏		1～2mmの砂粒を少し含む	良好	(外)灰色 (内)灰色	(外)回転ナデ(内)坏部回転ナデ後多方向の静止ナデ	2方向に透かし有
53図－11	土師器	高坏		1mm前後の砂粒を含む	良好	(外)明橙褐色(内)橙灰色(断)橙灰色	(外)風化 (内)絞り痕	脚部
53図－12	土師器	皿	底径 (5.8)	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	(外)白橙茶色 (内)白橙茶色	(外)ナデ、底部回転糸切痕	底⅓程残存
56図－1	土師器	甕	口径 (14.0)	1mm前後の砂粒を含む	良好	(外)橙色(内)褐色～黒褐色(断)淡灰褐色	(外)ナデ (内)ナデ	
56図－2	土師器	壺	口径 (11.6)	1mm以下の砂粒を含む	良好	(外)淡灰褐色(内)淡灰褐色(断)淡灰褐色	(外)風化 (内)風化	
56図－3	土師器	(胴部)		1mm程の砂粒を含む	良好	(外)白褐色(内)白褐色(断)白褐色	(外)貝殻による連続刺突文 (内)ケズリ	
56図－4	土師器	高坏	筒部径(4.1) 裾部径(7.1)	1mm未満の砂粒を含む	良好	(外)橙茶色 (内)橙茶色	(外)ナデ、ハケメかすかに残る、外面2段の山形文(内)ナデ、指頭圧痕	脚部 ¼弱残存　粗いつくり、大きく歪む
56図－5	須恵器	坏	器径 (16.3)	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	(外)灰色 (内)灰褐色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	口縁部4cm程度残存
56図－6	須恵器	高坏		細粒をわずかに含む	良好	(外)灰褐色 (内)灰色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	3方向に透かし有
56図－7	土製品			細粒を少し含む	良	(外)灰茶色 (断)橙茶色	(外)ナデ (内)ナデ	
57図－1	縄文	深鉢		1mm前後の砂粒を含む	良	(外)黒褐色 (内)黒褐色	(外)粗いミガキ(内)上部指頭圧痕、下部付着物により不明	口縁部凸帯
57図－2	弥生	壺		1mm前後の砂粒を含む	良好	(外)白茶色 (内)黒灰色	(外)ナデ、クシによる山形文有	
57図－3	弥生	甕	口径 (46.0)	1mm以下の細砂粒を多く含む	良好	(外)白褐色～淡灰褐色(内)黄灰褐色(断)白褐色～暗灰色	(外)口縁端部4～5本凹線・5条の斜めクシ描き文(内)風化	
57図－4	須恵器	高台付坏	底径 (8.7)	細粒をまばらに含む	良好	(外)灰色(内)灰色(断)淡灰紫色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ後ナデ	
57図－5	須恵器	高台付坏	口径(17.4) 底径(14.1)	細粒を含む	良好	(外)淡灰色(内)淡灰色(断)淡灰色	(外)回転ナデ、坏部・高台の間に凹線(内)回転ナデ、口縁端部1条凹線	
57図－6	須恵器	皿	底径 (11.0)	白色の砂粒をわずかに含む	良好	(外)灰色 (内)灰色	(外)回転ナデ、底部静止糸切痕有 (内)回転ナデ、底部工具によるナデ後ナデ	
57図－7	土師器	(把手)		0.7mm以下の砂粒を含む	良好	(外)淡黄褐色～黄褐色(断)淡黄褐色	(外)ナデ	
57図－8	土師器	坏	底径 (4.8)	密	良好	(外)白橙褐色(内)白橙褐色(断)白橙褐色	(外)底部糸切痕有 (内)風化	
57図－9	土師器	坏	底径 3.6	密	良好	(外)橙色(内)白橙色(断)白橙色	(外)風化 (内)回転ナデ	

※法量の（　）内数値は復原値を表す。

Ⅲ．小　　結

今年度調査で最も大きな成果をもたらしたのが溝ＳＤ03で、以下のような重要な事実が判明した。

⑴最初に断面Ｖ字状に掘られた（下層）後、最低もう１回は掘りなおされている（上層）。

⑵下層部では水が流れていたことを示す砂層の堆積が見られ、弥生時代中期末～後期の土器の小片が出土したのに対し、上層では滞水を示す黒色泥土の堆積が見られ、下層よりもやや新しい時期の完形に近い土器が出土した。

⑶下層から出土した注口土器片と、前年度に調査を実施した溝ＳＤ01から出土した土器片が接合した。

⑷現在の耕作基盤土を除去したレベルで、溝ＳＤ03上層のほぼ底面が検出された。

以上で記した⑶より、溝ＳＤ01とＳＤ03下層部は同時期に機能していたことがわかった。具体的な時期は弥生時代後期初頭である。その用途は、⑵より導水であったと考えられる。⑴、⑵より、導水機能が不要になった時点でもう１度掘り直しがおこなわれたことがわかるが、上層の埋土は炭や焼土塊を多く含んだ泥土状であったことから、生活遺跡にともなう排水施設として利用された可能性が高い。では、なぜ周辺で遺物をともなう生活遺構が検出されなかったかという疑問が生じるが、その答えが⑷であろう。現在の耕作基盤土直下から溝ＳＤ03上層のほぼ底面を検出したということは、当時の生活基盤面は溝ＳＤ03の平面プラン検出レベルよりも高かったということを示しており、当時の遺構面は後世の土木工事によってすでに削平を受けて失われた状況であると解釈できる。

12区で掘立柱建物跡ＳＢ01を検出した際も、柱穴埋土中には焼土塊や炭が多く含まれていたのに対し、平面プラン検出面には柱穴埋土に含まれていたような炭や焼土が全く存在しなかった。このことも後世の土木工事によって遺構面が削平を受けたことを示唆している。

11区南西角や12区北東角では、二次破砕を受けた土器片や石が淡褐色砂質土上に集められたような状況で出土した。これらは土地が削平されて整地された際に、あまり重要でない場所に不要物を投げ捨てたものとは考えられないであろうか。そこで出土した土器の中で最も新しいものは11～12世紀で、それ以降の土器が出土していないことから、12世紀前後に大がかりな土木工事がおこなわれた可能性も考えられるが、遺構の平面プラン検出面が現在の耕作基盤土直下であることから、昭和初期に実施された耕地整理の結果であるかもしれない。

いずれにしても、溝ＳＤ03の調査結果から、９区以南には弥生時代後期を中心とする生活遺構が広く存在していたことはほぼ間違いないと思われる。

また、11、12区から古墳時代後期末を中心とする須恵器が多量に出土し、15区の溝ＳＤ05からは古墳時代後期初頭の土器が出土したほか、各区の包含層中からは中世の土器片も出土した。幅広い時期の遺構が広く存在していた可能性が高いが、その遺構面の標高は現在の耕作基盤土下面より高かったと考えられることから、すでに削平されて失われた状況であると考える。

6．平成13年度調査について

Ⅰ．調査の概要

平成13年度調査は、平成12年度のトレンチ調査で意宇平野の扇状地形成以前から存在した灰白色粘土の基盤層が確認されたほか、旧河道から遺物の出土が確認されたため、全面調査が必要となり調査に至ったものである。

調査範囲は１区南側半分と２区、３区北側半分にあたる、東西８ｍ、南北42mの336㎡である。

調査方法は、旧河道地は重機を使用して遺物の出土が確認できるレベルまで掘り下げ、その後に人力による丁寧な遺物の拾い上げに努めた。ただし、場所によっては地表面下２ｍ以上を掘り下げることとなり、危険な状況であると判断されたため、調査を実施する深さは湧水層直上までとした。白色粘土基盤層が確認された部分については、白色粘土層よりやや浅いレベルまで重機を利用して掘り下げ、その後人力による遺物の拾い上げ、白色粘土層上面の精査を実施した。

暗渠を壊さないように掘り下げた結果、５カ所のグリッド状となったことから、便宜上北よりＡ～Ｅグリッドと呼称して調査をおこなった。

以下、各グリッドごとに調査成果を報告する。

Ⅱ．調 査 報 告

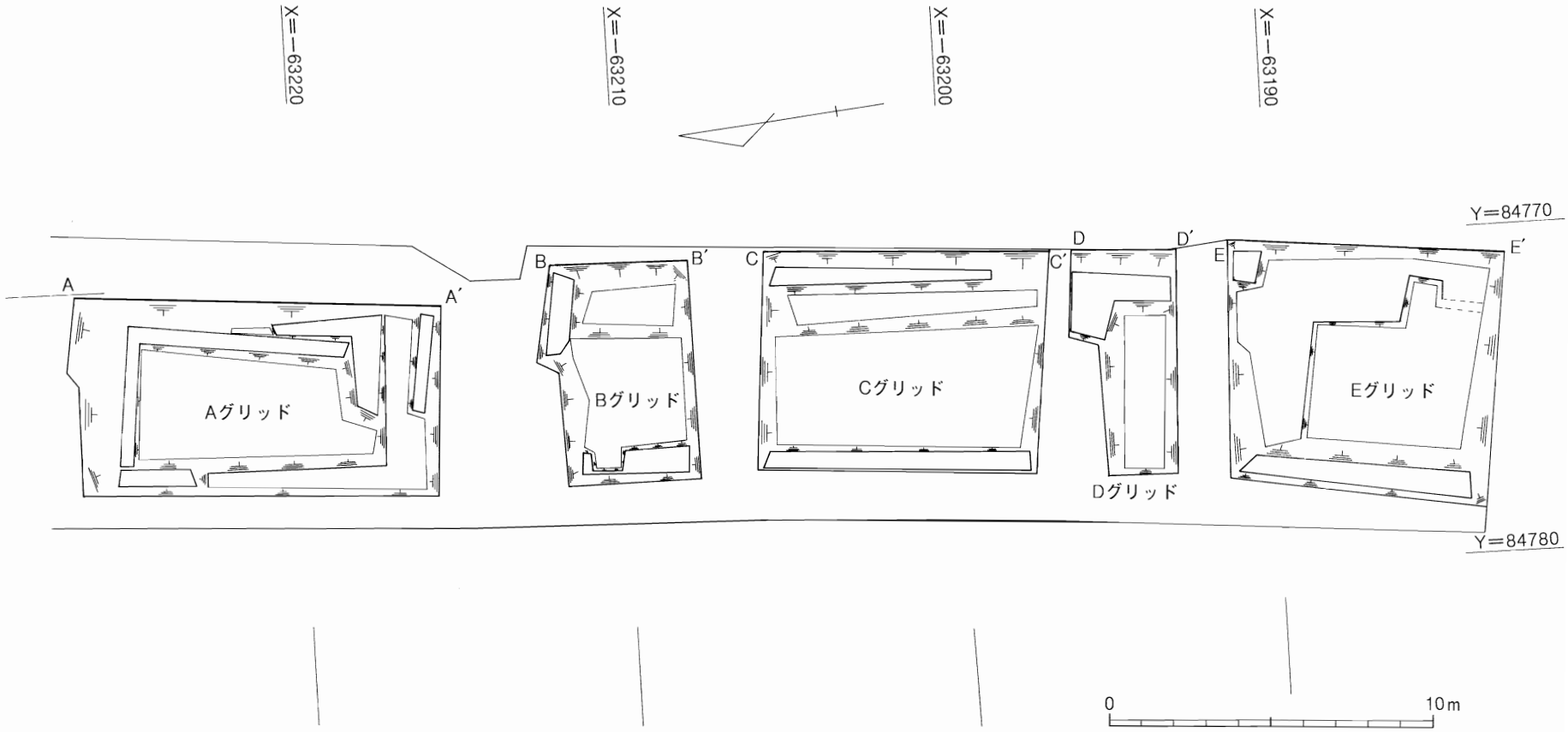
Ａグリッド

深い旧河道の痕跡を検出し、地表面下約2.5mの湧水砂層まで掘り下げをおこなった。

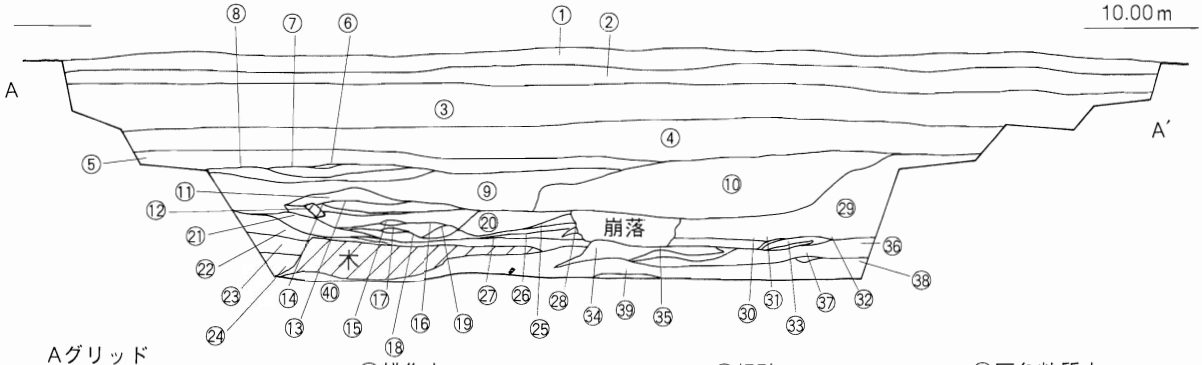
湧水砂層直上では巨大な木の幹や根が絡み合って出土し、周縁の巨大立木をも巻き込んで押し流した激しい氾濫があったことがうかがわれた。大量の自然木に混じって木製品も出土した。グリッド北端の湧水砂層に若干もぐる小礫含む粗砂層中からは、弥生時代中期の土器小片がまとまって出土した。巨大流木の下場は湧水砂層に入り込んでいる部分が見られるため、氾濫をともなう激流があった時期は、弥生時代中期以前と考えられよう。

・層序（第59図）

湧水砂層直上50～60cmは、砂層と植物遺体層が複雑に重なり合って堆積しており、川が流れたり、澱んだりを繰り返していたのであろう。植物遺体層は木の葉が大部分を占めていたが、各種どんぐりや椿の実が多く混じるものであった。その上約100cmは、南側半分では地山が風化したような細砂層が堆積し、北側半分ではところどころ薄い砂層をはさむ粘質土が堆積して湿地状の様相を呈していた。その上約80cmは濁灰色系粘質土が水平に堆積しており、さらにその上が現在の耕作基盤土、耕作土となっていた。

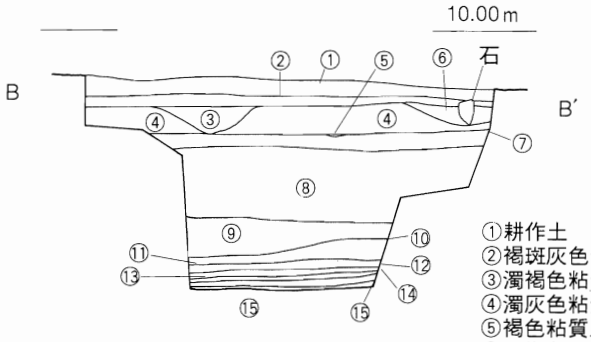

X=−63220
X=−63210
X=−63200
X=−63190
Y=84770
Y=84780
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
Aグリッド
Bグリッド
Cグリッド
Dグリッド
Eグリッド
0
10m

第58図　調査区配置図



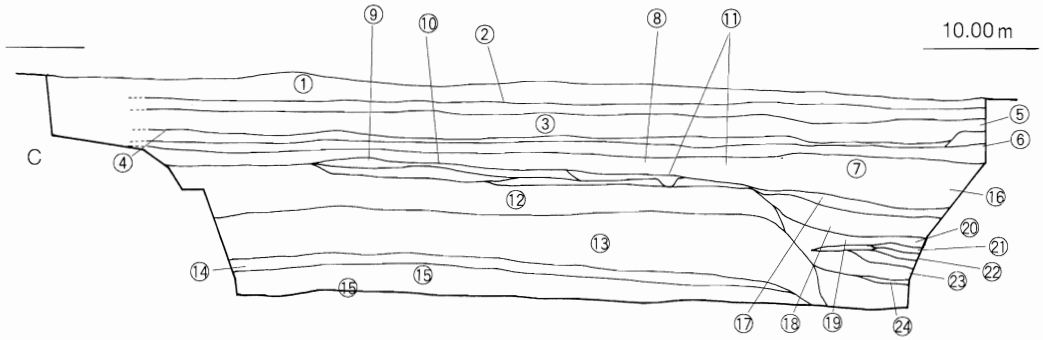
Aグリッド

①耕作土
②褐斑灰色粘質土
③濁灰色粘質土（松ぼっくり含む）
④濁濃灰色粘質土
⑤砂を含む濁濃灰色粘質土
⑥灰色粘質土
⑦灰色砂質土
⑧濁灰色粘質土
⑨灰色粘質土
⑩斑灰色細砂
⑪粗砂
⑫細砂
⑬濃灰色粘質土
⑭砂
⑮砂
⑯炭混じりの灰色粘質土
⑰砂
⑱灰色砂質土
⑲粗砂
⑳砂を含む灰色粘質土
㉑灰色粘質土
㉒砂
㉓植物遺体層
㉔砂を含む植物遺体層
㉕砂を含む灰色粘質土
㉖小石を含む砂
㉗黄灰色砂
㉘植物遺体層
㉙淡灰色細砂
㉚砂
㉛粗砂
㉜植物遺体層
㉝粗砂
㉞植物遺体層
㉟砂
㊱植物遺体層
㊲灰色砂
㊳粗砂
㊴植物遺体層
㊵砂（湧水著しい）



Bグリッド

①耕作土
②褐斑灰色粘質土
③濁褐色粘質土
④濁灰色粘質土
⑤褐色粘質土
⑥濁褐色粘質土
⑦灰色粘質土
⑧白灰色砂質土
⑨固くしまった薄灰褐色粘質土
⑩固くしまった灰褐色粘質土
⑪固くしまった灰色粘質土
⑫灰褐色粘質土
⑬灰色粘質土
⑭固くしまった灰褐色粘質土
⑮固くしまった淡灰色粘土



①耕作土
②褐斑灰色粘質土
③濁灰色粘質土（含松ぼっくり）
④灰色粘質土
⑤灰褐色粘質土
⑥濃灰色粘質土
⑦黄色ブロックを含む灰色粘質土
⑧小石を含む砂（自然河道02）
⑨灰色砂質土
⑩灰色砂（自然河道01）
⑪砂混じりの白色粘質土
⑫灰白色粘土
⑬灰白色砂質土
⑭濁灰色砂質土
⑮しまった灰褐色粘土
⑯灰色粘質土
⑰炭を多く含む灰色粘質土
⑱濃灰色粘質土
⑲砂
⑳植物遺体層
㉑灰色粘質土
㉒灰色粗砂
㉓植物遺体層
㉔灰色砂（湧水著しい）

0　4m

Cグリッド

第59図　A・B・Cグリッド土層堆積状況図

・遺構

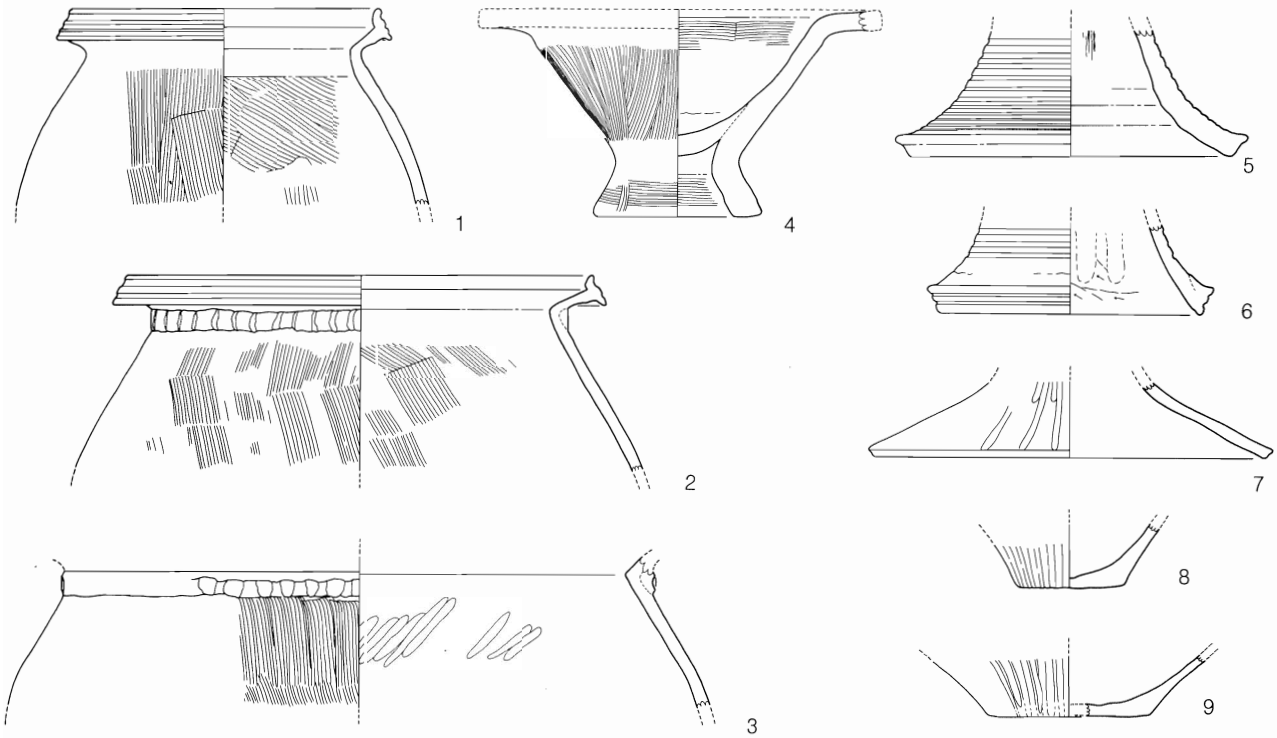
検出されなかった。

・遺物

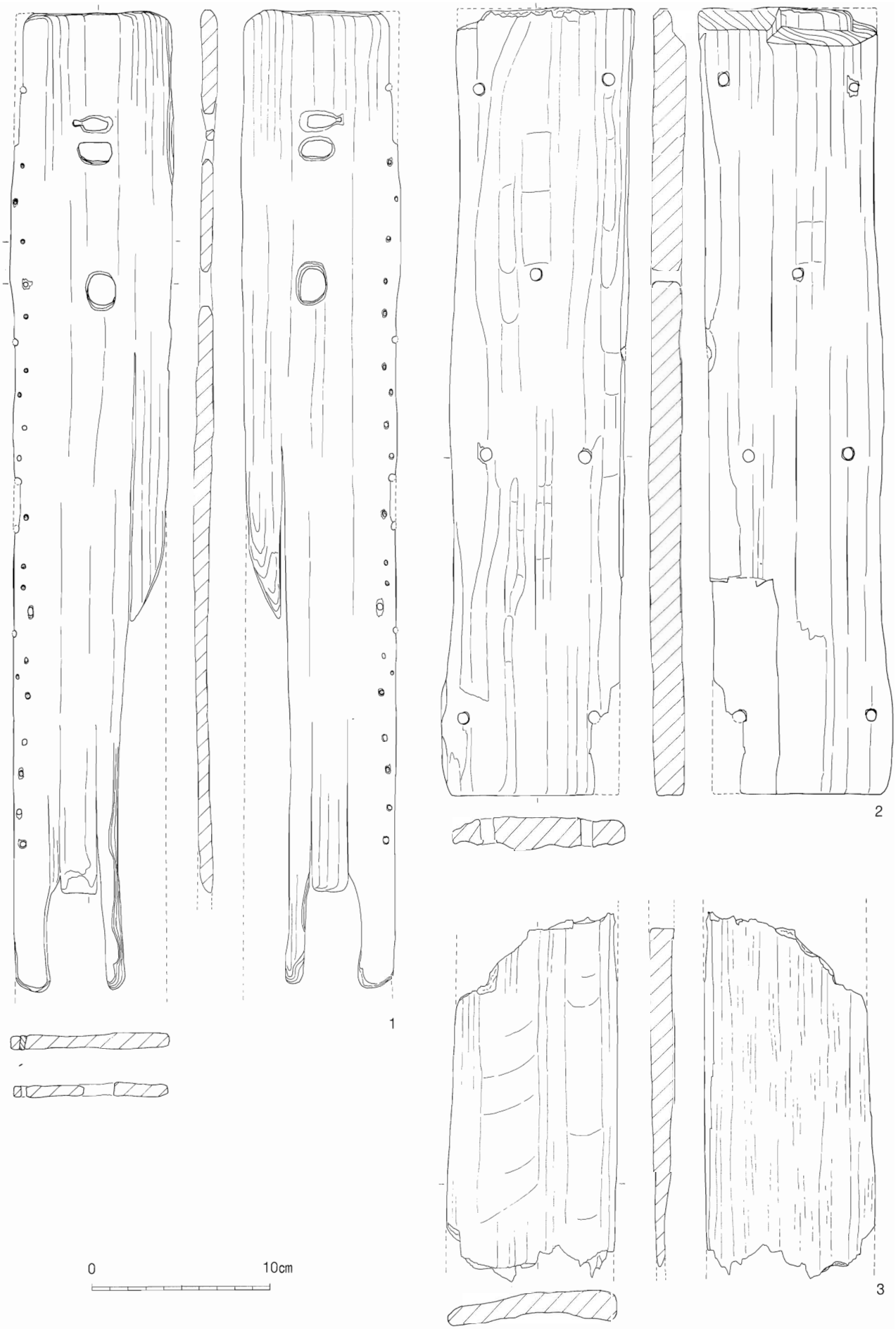
弥生土器と木製品が出土した。

弥生土器（第60図）は胴部の破片が多く、図面化できたものは少ない。器種は甕、小型の高台付鉢、高坏がある。時期は、高坏の脚（７）１点を除けば、ほかは全て中期である。壺甕類の破片を観る限り内面をケズリ調整しているものは無く、７の脚は現地調査時での紛れ込みの可能性が高い。個々の詳細については後頁の遺物観察表に記載する。

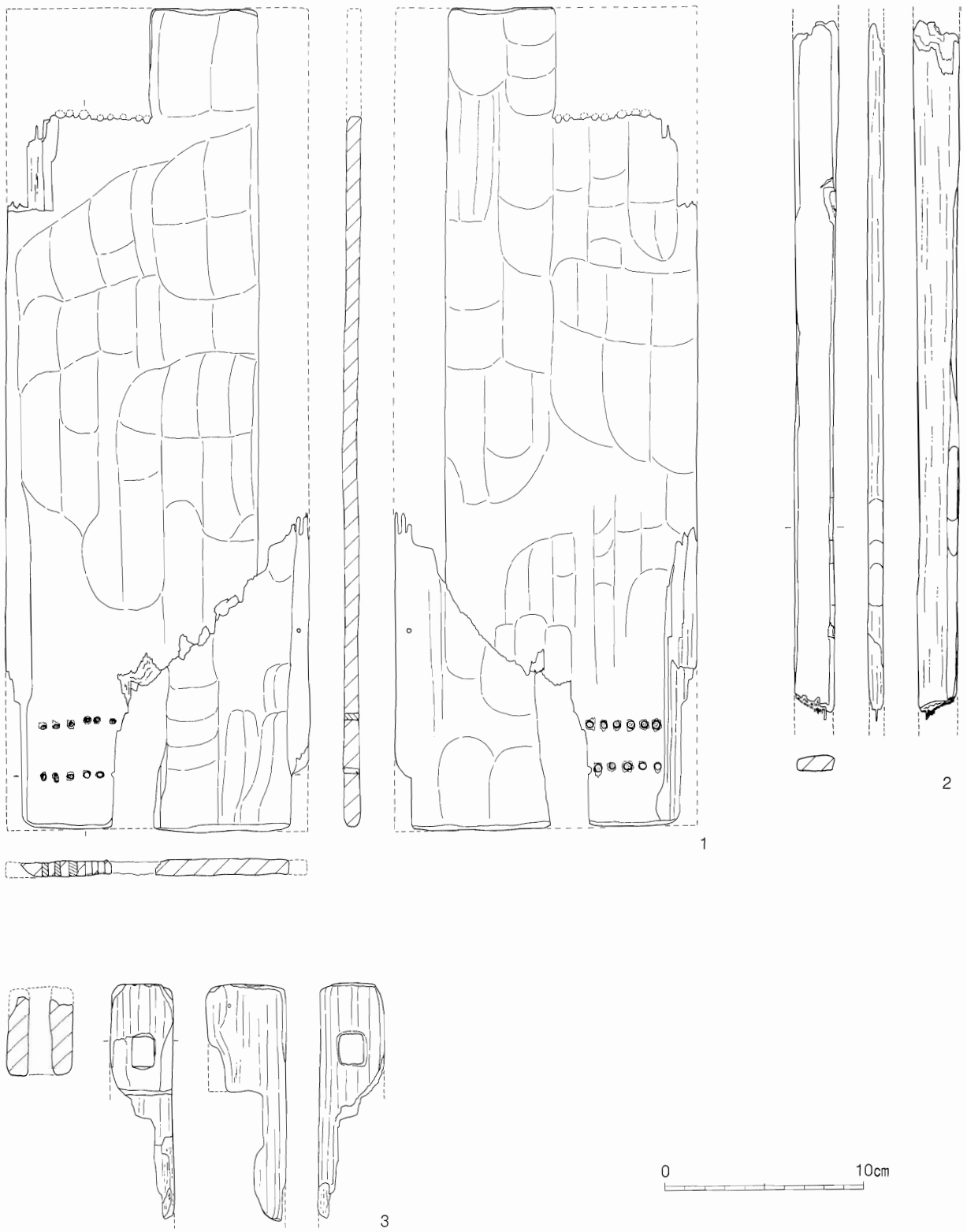
木製品は、多数出土した。第61図１は用途不明品である。幅９cm、残存長55cm、厚さ９mm前後を測る薄い板状で、上端から5.5cm、７cmのところに横方向に長い楕円形の孔（0.7cm×1.4cm、0.9cm×1.8cm）が穿たれており、上端から13.9cmのところには縦方向に長い楕円形（1.8×1.5cm）の孔が穿たれている。横端片側には３mm前後の円孔がほぼ直線、一部千鳥状に25カ所穿たれており、内11カ所に木釘が残存している。両面の調整は明瞭でない。使用材はスギである。２は枠付田下駄の足板である。幅9.6cm、長さ44.4cm、厚さ1.5cmを測る。両端には枠を固定するためと思われる直径７mm前後の円孔が２カ所ずつ穿たれており、板の中央には足を固定するためと思われる孔が二等辺三角形状に３カ所穿たれている。調整は片面のみ丁寧に削られている。使用材はスギである。３は板材の一部である。幅9.3cm、厚さ0.6～1.5cm、残存長20.1cmを測る。調整は片面のみ丁寧に削られている。第62図１は用途不明品である。幅15.3cm、長さ41.8cm、厚さ8.4cm前後を測る薄い板状で、両面とも丁寧に削られている。欠損のため定かではないが、下端から2.6cm、5.1cmの位置で、



第60図　Aグリッド出土土器実測図　0　10m



第61図　Aグリッド出土木製品実測図（1）



第62図　Aグリッド出土木製品実測図（2）

板幅の半分弱の範囲に二列平行して直径３mmの円孔が６カ所ずつ穿たれいる。２カ所を除いては木釘が残存している。上端から5.1cmの位置にも同様の円孔が穿たれていることから、上下対称に木釘を打つための円孔が穿たれているものと思われる。使用材はスギである。２は用途不明品である。幅２cm、残存長35.1cm、厚さ0.8cmを測り、断面長方形で幅の狭い板状を呈している。各面とも丁寧に削られている。３は用途不明品である。幅4.5cm、厚さ4.1cm、残存長12cmを測る。上端から2.6cmの位置に縦方向に長い長方形の孔（1.1×1.5cm）が穿たれており、上端から5.4cmの位置では2.7cm長さのくり込みがみられるが、残存部分が小さすぎるため全体の形状を復原することはできない。

Ｂグリッド

地表面下2.3mまで掘り下げたところ、扇状地形形成以前の基盤層（灰白色粘土以下）を確認した。湧水はほとんどみられなかった。

・層序（第59図）

地表面下1.5mのレベルで固く締まった淡灰褐色粘質土に至った。さらに80cm掘り下げたところ、固く締まった灰色粘質土層と淡灰褐色粘質土層が縞模様状に堆積しており、これらの層から水の湧き出しはみられなかった。したがって、淡褐色粘質土以下を地山層と解釈してよいであろう。淡灰褐色粘質土の上には約80cm厚さの灰色細砂層が堆積しており、その上に灰色系粘質土が約50cm堆積し、その上が現在の耕作基盤土、耕作土となっていた。

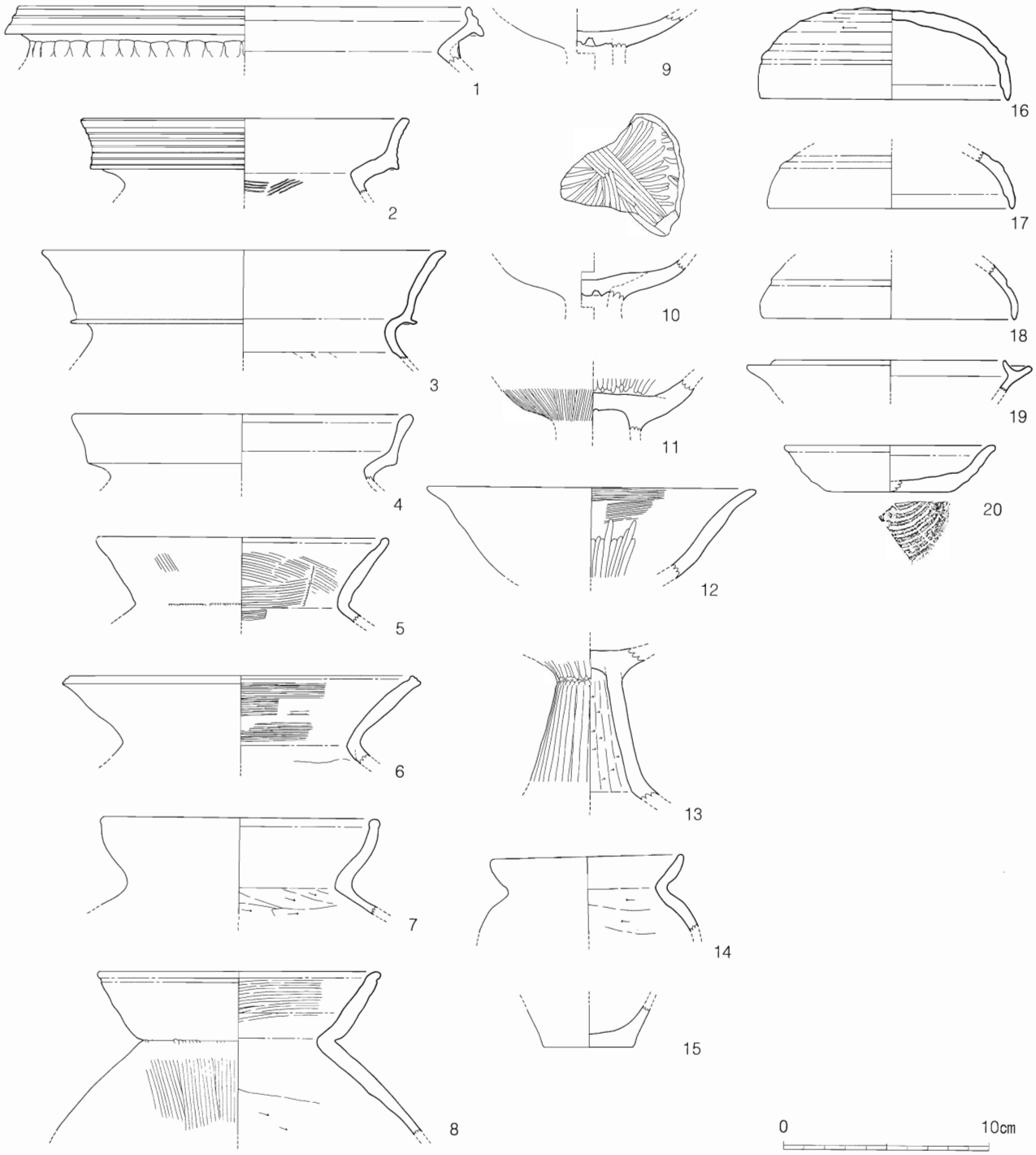
・遺構

検出されなかった。

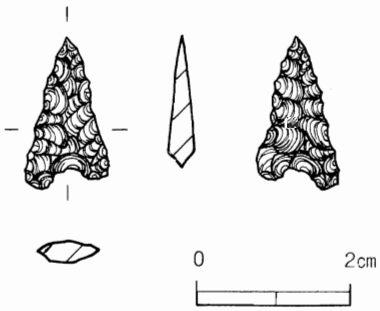
・遺物

出土しなかった。

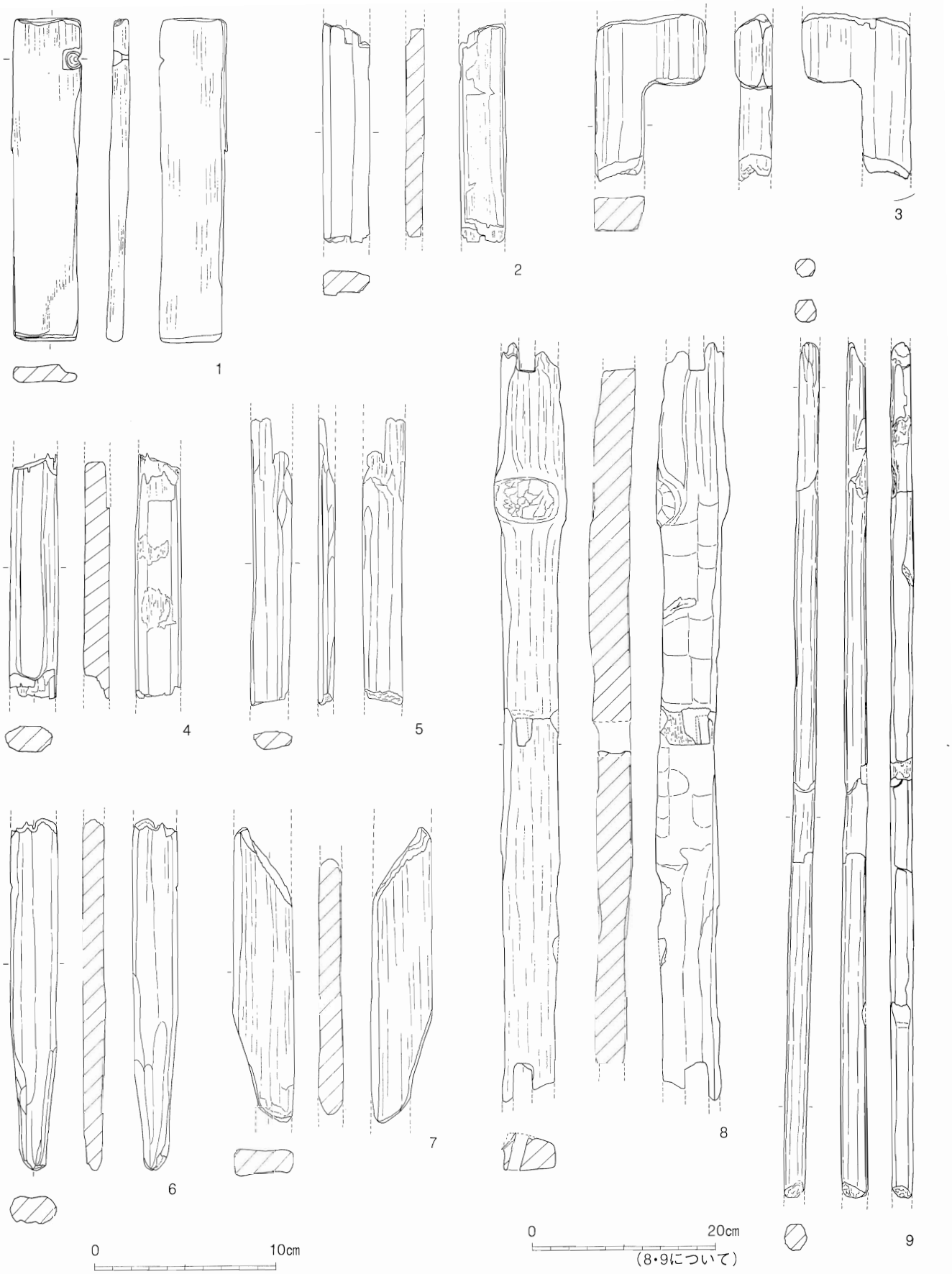
第63図　Ｃグリッド自然河道検出状況図



第64図　Cグリッド出土土器実測図



第65図　Cグリッド出土石鏃実測図



第66図　Cグリッド出土木製品実測図

Ｃグリッド

Ｂグリッドとほぼ同じ状況であった。灰白色粘土の上面を精査したところ、一面に葦類の植物遺体が観察されたほか、灰色砂が堆積した自然河道０１や小礫を含む灰色砂が堆積した自然河道０２があり、この面が湿地となっていた時期があることがわかった。灰白色粘土層の上面からは弥生時代後期～古墳時代後期にかけての幅広い時期の土器多数（第64図２～19）と石器、木製品少々が出土した。

・層序（第58図）

地表面下２ｍのレベルで固く締まった灰褐色粘質土（地山）に至った。この層はＢグリッドでも観察された層で、Ｃグリッドでは約50cm深いレベルとなっていた。淡灰褐色粘質土の上には地山が風化したような薄い灰褐色砂質土が堆積し、その上には厚さ約60cmの灰色細砂層があり、その上に灰白色粘土が約40cmの厚さで堆積していた。グリッド南端では、灰白色粘土層以下が浸食されて落ち込んだ状況を確認した。そこでは、灰白色粘土層上面のレベルまで灰色砂層や植物遺体層、灰色粘質土層が複雑に堆積しており、川が流れたり澱んだりを繰り返した痕跡が観察された。灰色粘質土層からは弥生時代中期の土器片が出土した（第64図１）。灰白色粘土層の上は、灰色系粘質土がほぼ水平に堆積していた。濃灰色粘質土中からは須恵器の灯明皿（第64図20）が出土した。上層の濁灰色粘質層は多量の松ぼっくりを含んでいたことから、松並木が存在した近世以降の層と考えられる。その層の上が現在の耕作基盤土、耕作土となっていた。

・遺構

存在しなかったが、灰白色粘土層上面で小川状の自然河道０１、０２を検出した。検出時の自然河道０１は深さ５cm前後と非常に浅く、底面から第64図７、11、16、18の土器、第65図の石鏃が出土した。出土遺物の時期幅が広いことから流れ混みの遺物と考えられるが、16の須恵器は残存状況が良く自然河道０１の時期指標遺物と考えてよいかもしれない。

・遺物

土器多数、石器１点、木製品少々が出土した。

土器の種類は、弥生土器、土師器、須恵器があった。第64図１は弥生時代中期の甕で、地山を切って流れた川の埋土中から出土し、20の須恵器灯明皿は上層から出土したもので、その他が白色粘土上面から出土したものである。若干ではあるが古墳時代前期の土器の割合が高いようである。個別の詳細については後頁の遺物観察表に記載する。

石器は鏃１点である（第65図）。石材は黒曜石で、長さ2.05cm、最大幅1.1cm、最大厚3.5cm、重さ0.45gを測る。

木製品は第66図１が火鑽臼で、幅3.5cm、長さ17.7cm、厚さ0.9cmを測る。使用痕は１カ所のみである。使用材はヒノキ科アスナロ属である。２は両面が削られた、断面長方形を呈する細長い板状木製品で、幅2.6cm、残存長12cm、厚さ9.6mmを測る。３は全面が丁寧に削られて、直角にくり込みが入るものだが、小片であるため全様は不明である。幅６cm、残存長8.6cm、厚さ1.8cmを測る。４は、幅2.6cm、残存長13.5cm、厚さ1.4cmを測るもので、全面が丁寧に削られ、断面は楕円形を呈するものである。５は幅2.1cm、残存長15.6cm、厚さ0.9cmをはかるもので、全面丁寧に削られ

ており、断面は楕円形に近い。６は先端を削って細く加工したもので、幅2.4cm、残存長19.2cm、厚さ1.1cmを測り、断面は楕円形を呈している。先端部分には火を受けた痕跡が残っている。７は幅3.3cm、残存長16.2cm、厚さ1.2cmを測る。削りは丁寧で、片端は斜めに削り落とされている。８は幅６cm前後、厚さ5.6cm、残存長83.1cmを測る。欠損した両端とほぼ中央に方形の孔があけられている。９は何かの柄と考えられる。全面が丁寧に削られており、断面は径3.2cm、残存長124cmを測る。

Ｄグリッド

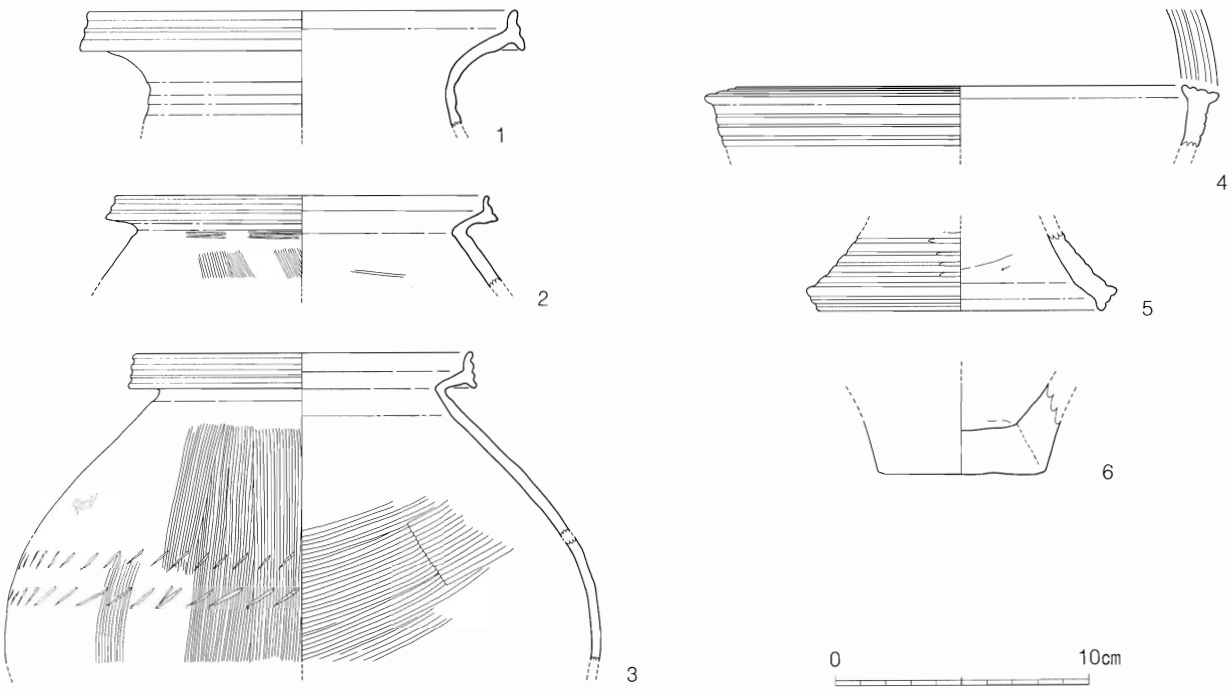
暗渠に挟まれた非常に狭いグリッドで、危険であるため地表面下約1.6mで掘り下げを中止した。掘りあげ直後に壁面が崩落したため、土層堆積状況の記録はとれなかった。地表面下約1.5mの暗灰色粘質土中から弥生土器片が出土した。

・遺構

検出されなかった。

・遺物

弥生時代中期後葉の土器小片が約20点程度出土した（第67図）。Ａグリッドで出土した土器とほぼ同時期のもので、器種は壺、甕、鉢、高坏があった。個々の詳細については後頁の土器観察表に記載する。



第67図　Ｄグリッド出土土器実測図

Eグリッド

・層序（第68図）

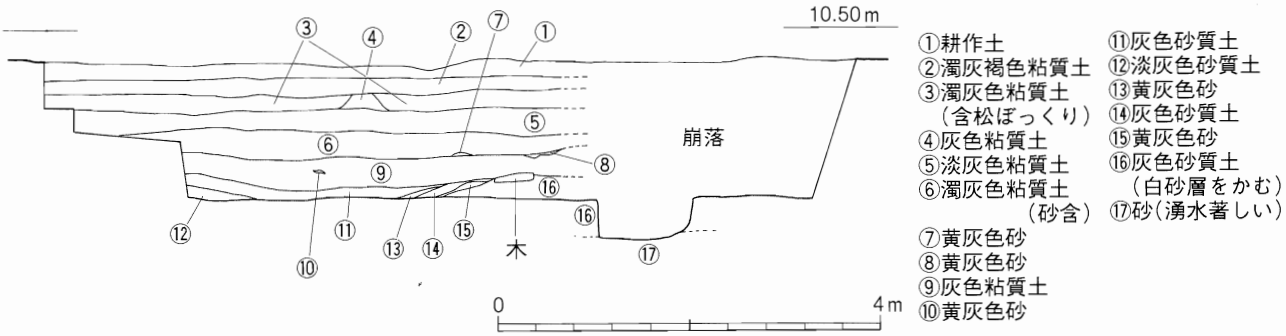
耕作土、耕作基盤土（濁灰褐色粘質土）の下は松ぼっくりを多く含む濁灰色粘質土で、近世以降の堆積土である。一部畦状に立ち上がる灰色粘質土が観察される。その下に淡灰色粘質土、濁灰色粘質土（含砂）、灰色粘質土と水平の堆積が見られ、ところどころに黄灰色砂層をかんでいる。その下は北下がりの灰色砂質土（白色砂層をかむ）で、北側の下がったところでは黄灰色砂質土と灰色砂質土が交互に堆積しており、地表面下約1.8mで湧水が著しい砂層に至る。この砂層を部分的に掘ってみたところ下には植物遺体層も堆積していたが、湧水の勢いが尋常では無く、細かい観察をおこなうことはできなかった。

・遺構

検出されなかった。

・遺物

地表面下１m以下の灰色粘質土層、砂層から自然木に混じって、わずかに加工痕が残る木製品が出土した。いずれも小さな木片で原形をとどめるものは無かった。土器は出土しなかった。



第68図　Eグリッド土層堆積状況図

土　器　観　察　表

挿図番号	種類	器種	法量(cm)	胎　土	焼成	色　調	調整・手法の特徴等	備　考
60図－1	弥生	甕	口径(12.3) 頸径(10.8)	長石、石英微粒を密に含む	良好	(外)褐色(内)褐色(断)黒色	(外)ヨコナデ、タテハケ(内面より密)、口縁端部3条凹線(内)ヨコナデ、斜めハケ、ナデ、タテハケ	約1/6周弱残存
60図－2	弥生	甕	口径(18.4) 頸径(16.4)	長石、石英微粒を密に含む	良好	(外)黒褐色(内)黒褐色(断)褐色	(外)ナデ、ハケメ、指頭圧痕文帯、口縁端部2条凹線(内)ナデ、ハケメ	約1/5周弱残存
60図－3	弥生	甕	頸径(23.4)	長石、石英微粒を多く含む	良好	(外)濁褐色(内)濁褐色(断)濁褐色	(外)タテハケ、指頭圧痕文帯(内)ヨコナデ、ナデ・一部ミガキ	約1/8周弱残存
60図－4	弥生	高台付鉢	底径5.6 器径(8.2)	長石微粒を多く、石英微粒を少々含む	良好	(外)濁褐色(内)濁褐色断面中央から外面にかけて黒色部分有	(外)ヨコナデ、タテハケ、ヨコハケ後ヨコナデ(内)ヨコナデ、ヨコハケ、ヨコハケ後ヨコナデ、円盤充填	口縁端部全周、体部約2／3欠損、高台部完存
60図－5	弥生	高坏	底径(13.8)	長石、石英微粒を多く含む	良好	(外)黒褐色(内)黒褐色(断)黒色	(外)タテ方向のミガキ後ヘラ描き沈線、ヨコナデ(内)ヨコナデ、軽くナデ、絞り痕	脚部　約¼周残存

挿図番号	種類	器種	法量(cm)	胎　土	焼成	色　調	調整・手法の特徴等	備　考
60図－6	弥生	高坏	底径(10.2)	長石、石英微粒を若干含む	良好	(外)淡褐色(内)淡褐色(断)黒色	(外)ヨコナデ、凹線、粘土の継目 (内)ケズリ後タテナデ、ヨコナデ	約1/10周残存
60図－7	土師器	高坏	底径(16.0)	長石、石英微粒を密に含む	やや軟	(外)淡褐色(内)淡褐色(断)淡褐色	(外)ナデ、風化・ところどころタテミガキの痕跡(内)ナデ(風化)	底部1/5周残存
60図－8	弥生	(底部)	底径4.2	長石、石英微粒を多く含む	良好	(外)黒色(内)黒色(断)黒色	(外)ナデ、ミガキ (内)ナデ	底部のみ9/10残存
60図－9	弥生	(底部)	底径(6.4)	長石、石英微粒を密に含む	良好	(外)黒褐色(内)淡褐色(断)淡褐色	(外)ナデ、タテ方向のミガキ、下端軽くヨコナデ(内)風化	底部のみ約⅓周残存
64図－1	弥生	甕	口径(22.0) 頸径(20.8)	長石、石英微粒を多く含む	良好	(外)淡褐色(内)淡褐色(断)淡褐色	(外)ヨコナデ、指頭圧痕文帯、口縁端部2条凹線(内)風化	口縁部約1/8周残存
64図－2	弥生	甕	口径(16.0) 頸径(11.6)	1mm弱の長石、石英粒を多く含む	良好	(外)淡褐色(内)淡褐色(断)淡褐色	(外)ヨコナデ、貝殻腹縁を利用した6条擬凹線(内)ヨコナデ、貝殻状工具によるヨコ方向ナデつけ	口縁部約1/8周残存
64図－3	土師器	甕	口径(19.6) 頸径(14.8)	長石、石英微粒を密に含む	良好	(外)淡褐色、スス付着 (内)淡褐色(断)淡褐色	(外)ヨコナデ (内)ヨコナデ、ケズリ	口縁部約⅓周残存
64図－4	土師器	甕	口径(16.6) 頸径(12.6)	1mm程度の長石、石英粒を密に含む	やや軟	(外)黒褐色(内)黒褐色(断)黒褐色	(外)風化 (内)風化	口縁部約1/8周残存
64図－5	土師器	甕	口径(14.2) 頸径(10.4)	長石、石英微粒を多く含む	良好	(外)淡褐色、スス付着 (内)淡褐色(断)淡褐色	(外)ヨコナデ、一部ハケメ有、ハケメ原体による押圧(内)ヨコナデ、ハケメ、ナデ	口縁部1/6周程度残存
64図－6	土師器	甕	口径(17.4) 頸径(11.6)	長石、石英微粒を多く含む	良好	(外)淡褐色、スス付着(内)淡褐色、スス付着(断)淡褐色	(外)ヨコナデ、ハケメ後ヨコナデ (内)ヨコナデ、ハケメ後軽くヨコナデ、ケズリ後ヨコナデ	口縁部約¼周残存
64図－7	土師器	甕	口径(13.6) 頸径(11.0)	長石、石英微粒を多く含む	良好	(外)濁褐色(内)濁褐色(断)濁褐色	(外)ヨコナデ (内)ヨコナデ、ケズリ	頸部約1/5周残存
64図－8	土師器	甕	口径(13.8) 頸径(9.2)	長石、石英微粒を多く含む	良好	(外)淡褐色、スス付着 (内)淡褐色(断)上方黒色	(外)ヨコナデ、タテハケ、ハケ後軽くヨコナデ(内)ヨコナデ、ケズリ、ヨコハケ後ヨコナデ、不定方向のナデ	約¼周残存
64図－9	土師器	高坏		1mm弱の長石、石英粒を少々含む	やや軟	(外)淡橙褐色(内)淡橙褐色(断)淡橙褐色	(外)風化、円盤充填刺突有 (内)風化	坏底部付近のみ残存
64図－10	土師器	高坏		長石、石英微粒を多く含む	良好	(外)黒色をおびた赤褐色(内)黒色をおびた赤褐色(断)赤褐色	(外)ヨコナデ、円盤充填刺突有 (内)放射状のミガキ	坏底部付近約1/5周残存
64図－11	土師器	高坏		1mm弱の長石、石英粒を密に含む	良好	(外)淡褐色、一部淡黒色・淡赤色(内)黒色、一部淡褐色(断)淡褐色	(外)ハケメ(風化) (内)ミガキ、ナデ	坏底部のみ残存
64図－12	土師器	高坏	口径(16.0)	長石、石英微粒を密に含む	良好	(外)淡濁褐色(内)淡濁褐色(断)淡濁褐色	(外)ヨコナデ、不定方向のナデ (内)ヨコハケ、ミガキ	口縁部約1/8周残存
64図－13	土師器	高坏	脚つけ根部径 3.2	長石、石英微粒を密に含む	良好	(外)淡褐色(内)淡褐色(断)淡褐色	(外)ミガキ (内)ナデ、ケズリ、坏部内風化	坏底部と脚部の筒のみ残存
64図－14	土師器	壺	口径(9.4) 頸径(7.2)	長石、石英微粒を密に含む	良好	(外)赤褐色(内)赤褐色(断)黒色	(外)ヨコナデ (内)ヨコナデ、ケズリ	口縁部約1/7周残存
64図－15	弥生	(底部)	底径(4.4)	長石、石英微粒を密に含む	やや軟	(外)淡褐色(内)淡褐色(断)淡黒色	(外)風化 (内)風化	底部のみ約⅓強残存
64図－16	須恵器	蓋	口径12.2 器高 4.5	1mm弱の長石、石英粒を多く含む	良好	(外)灰色(内)灰色(断)灰色	(外)ヘラ切、回転ヘラケズリ、回転ナデ(内)回転ナデ	ところどころ約1/6程度欠損　ろくろ右回転
64図－17	須恵器	蓋	口径(12.0)	長石、石英微粒を少々含む	良好	(外)灰色(内)灰色(断)灰色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	口縁部約1/5周残存　ろくろ右回転
64図－18	須恵器	坏	口径(12.2)	長石、石英粒をわずかに含む	やや軟	(外)白褐色(内)白褐色(断) 白褐色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	口縁部約1/6周残存　ろくろ右回転
64図－19	須恵器	坏	口径(11.2) 受部径(13.8)	長石、石英微粒をわずかに含む	良好	(外)灰色(内)灰色(断)灰色	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	口縁部約¼周残存　ろくろ右回転
64図－20	須恵器	皿	口径(10.2) 底径(6.0) 器高 3.3	長石、石英微粒をわずかに含む	良好	(外)淡灰色(内)淡灰色(断)淡灰色	(外)回転ナデ、底部糸切 (内)回転ナデ	約1/6周弱残存　ろくろ右回転
67図－1	弥生	壺	口径(17.0)	長石、石英微粒を密に含む	やや軟	(外)白灰色(内)白灰色(断)白灰色	(外)ヨコナデ(風化)、ナデ凹線、口縁端部2条凹線(内)風化	口縁のみ約1/3周残存
67図－2	弥生	甕	口径(14.8) 頸径(13.0)	長石、石英微粒を密に含む	良好	(外)淡褐色、スス付着 (内)淡褐色(断)淡褐色	(外)ヨコナデ、ヨコハケ、ハケメ、口縁端部2条凹線(内)ヨコナデ、ハケ後ナデ(風化)	約1/6周程度残存
67図－3	弥生	甕	口径(13.4)頸径(11.3)胴最大径(23.4)	長石、石英微粒を密に含む	良好	(外)淡褐色(内)淡褐色(断)黒色	(外)ヨコナデ、タテハケ後軽くヨコナデ、タテハケ大部分風化、ハケメ原体による2段刺点文、口縁端部3条凹線(内)ヨコナデ	口縁周辺約¼周残存
67図－4	弥生	鉢	口径(20.2)	長石、石英微粒を少々含む	良好	(外)淡褐色(内)淡褐色(断)淡褐色	(外)ヨコナデ、ヘラ描き沈線多条有(風化)、口縁端部3条凹線(内)ヨコナデ、風化	口縁部約1/12周残存
67図－5	弥生	高坏	底径(11.1)	長石、石英微粒を多く含む	良好	(外)淡褐色(内)淡褐色(断)黒色	(外)ナデ後凹線 (内)ケズリ後ナデ、ヨコナデ	底部約1/7周残存
67図－6	弥生	(底部)	底径(6.4)	1~3mmの長石、石英粒を密に含む	やや軟	(外)淡赤褐色(内)淡褐色(断)淡褐色	(外)ナデ(風化) (内)ナデ(風化)	底部約⅓強残存

※法量の（　）内数値は復原値を表す。

Ⅲ．小　　結

平成13年度調査の結果、意宇平野の扇状地形が形成される以前から存在した基盤層（灰白色粘土層以下）をＢ、Ｃグリッドで確認した。この基盤層の広がりは南北には狭かったが、かつての意宇川はこの場所では西から東へ流れていたと考えられることから、基盤面は東西にはもう少し広く、島のように残っているものと推察される。基盤層上面で精査を試みたところ、遺構は存在せず、浅い小川状の自然河道の痕跡だけが検出された。基盤層の上の堆積土中からは比較的多くの土器片が出土し、それらの時期は古墳時代前～中期が多く、最も新しい土器は古墳時代後期であった。風化が著しいものが多く、大半は上流から流されて来たものと思われるが、湿地帯中の比較的安定した場所として利用されていたのかもしれない。

調査区内での基盤層は、南側ではＣグリッドの北端で旧河道によって浸食されていた。その時期は特定できないが、浸食した川の勢いが失われて滞水した時の堆積層、灰色粘質土中から弥生時代中期の土器が出土していることより、その時期以前に浸食を受けたものと思われる。Ｅグリッドでは比較的浅いレベルからおびただしい湧水がみられたが、それはＥグリッドが扇状地形である意宇平野の扇端部が基盤層に接する場所にあたるからであろう。

基盤層の北側は、ＡグリッドとＢグリッドの間の調査を実施できなかった場所で浸食を受けたようで、セクションで明確にすることはできなかった。Ａグリッドでは巨大な流木をともなう激流の痕跡を検出した。このような流れによって基盤層は深く浸食されたのであろう。巨大な流木の下場とほぼ同じレベルの砂層中から土器片がまとまって出土したため、その時期よりこの旧河川は弥生時代中期頃には流れていたものと推察される。ＡグリッドはＥグリッドと比べて深く掘り下げたわりに湧水量が少なかったが、それは基盤層が伏流水の直接の浸入を遮っているためであろう。

今回の調査区は、かつて意宇川が様々に流路を変えながら流れ、低湿地となって現在に至ったであろうと漠然と考えられていた場所である。それが、発掘調査によって意宇平野西部北端の地面下の様子を具体的に解明することができたことは、今後周辺の歴史的環境を語る上でも貴重な資料となり得ると考える。

7．結　　語

意宇平野西部をほぼ縦断する大坪遺跡の発掘調査を３年度にわたって実施した。期待されていた古代山陰道を遺構として検出することはできなかったが、有意義な調査成果を得たので以下で簡略に記す。

調査区の土層を観察したところ、８区以北は灰色系粘質土と砂層を主とする低湿地の様相を呈していた。旧河道の跡も明確となり、１区では大木の根をも押し流した弥生時代中期以前の激流の跡、５区では弥生時代中期以降の大河が形成した河原の跡を検出したほか、２、３区では、意宇川による扇状地形成が始まる以前から存在する白灰色粘土層が、北・南部を浸食されながらも島状に残っている状況を確認した。現在の意宇川は意宇平野に入るとすぐに東方に流路を変えているが、かつては意宇平野の北縁部を流れていた時期のあることが、土層から明確にとらえることができた。

６、７区では、湧水砂層の直上に葦類や昆虫の羽根を多く含む沼地状の堆積土があり、６区の沼地状堆積土層中からは、小型の木製品に混じって３点の木簡が出土した。木簡の内１点には、「延暦八年」と年号が記されたものがあり、字体からも奈良時代のものであると判断された。そこは葦類がたくさん生えた沼地状の場所であったと思われることから、上流から流されてきたものとは考えられず、この木簡はほぼ元位置を保つものと推察される。６、７区は奈良時代においては沼地となっていたことがわかった。

沼地跡の南側が古代山陰道の最も有力な候補地で、８区はやや深めに掘り下げてみたところ、土層は７区とは全く違っていた。この土層の違いが条里の界線にあたることを示唆すると思われる。深いレベルで橋脚と思われる柱根が出土し、砂層を挟む深い灰色系粘質土は近世の絵図[註1]に描かれているという水路の痕跡かと思われたが、伴出遺物が無いため明らかにはできなかった。柱根の広がりを追って西へ深掘りの範囲を広げたが、湧水量が尋常ではなく、東の車道側の壁面が崩落して危険な状況に陥ったため、急遽埋め戻しをおこなわざるを得ず、深いレベルの遺構や土層堆積状況の記録はとることができなかった。今回の調査の中で最も悔やまれるところである。

９区以南ではしっかりした基盤の淡褐色砂質土層の広がりを確認した。大草町では出雲国国庁の遺構面となっている層である。

９区、10区では、淡褐色砂質土層の上面から弥生時代後期初頭の溝ＳＤ０１とＳＤ０３を検出した。溝の下層埋土には砂層や礫が含まれていたことから、導水機能の役割も果たしていたものと思われる。この２本の溝は、それぞれから出土した土器が接合したことより同時期に存在したことがわかったが、ＳＤ０１がほぼ東西方向を、ＳＤ０３は南南東－北北西を指向していた。調査範囲が狭いため、この２本の溝がどのような位置づけをもって掘られたのかは明らかにできなかった。溝ＳＤ０３は、ほぼ溝が埋まりかけた時点で再度掘りなおして利用されていたようである。掘り直された後の埋土には弥生時代後期～古墳時代前期のほぼ完形の土器が多く出土し、周辺には生活遺跡が広く存在していたことをほうふつとさせた。

しかし、その時期の生活遺跡を遺構として検出することはできなかった。現在の耕作基盤土直下から溝ＳＤ０３の掘り直し後のほぼ底面が検出されたことから、当時の溝の上場はさらに高いレベルにあったと推察され、現在ではその遺構面はすでに削平された状況であると考えられる。11区では溝ＳＤ０３のほか多くのピットや土坑を検出したが、その埋土はやや濁りがみられる程度で、炭や焼土塊等を伴うものはみられなかった。ピットの中には古墳時代前期の土師器破片を包含するものと、古墳時代後期の完形の須恵器が正位置で出土したものがあったことから、ピットには時期的に大きなばらつきが存在することがわかった。

12区でも多くのピットが存在し、掘立柱建物ＳＢ０１を構成するものがあった。ほかにも方向性のあるピットが見られたことから、周辺には複数の掘立柱建物が存在していたものと思われる。掘立柱建物を構成していると思われる柱穴の埋土には炭や焼土塊が多く混入していたが、平面プラン検出面からは炭や焼土、定位置を保つ遺物等が全く出土せず、ここでも遺構面は後世の削平によってすでに失われていることがわかった。したがって、掘立柱建物の時期を明確にすることはできなかった。

13区は、大型のビニールハウスが設置されているため今回は調査を実施していない。

14区は、現在の耕作基盤土の下に一段階古い時期の水田耕作土の層があり、その下に薄く淡褐色砂質土層が堆積していた。ここでは１２区から続く遺構は全く検出されなかった。淡褐色砂質土層の下には、弥生時代中期末～後期初頭の土器小片および焚き火の痕跡を含む薄い濁灰色砂質土層が堆積していたが、明確な遺構面は検出することができなかった。

15区では、大きな角礫が南北方向に山なりに堆積した意宇川の顕著な氾濫原の土層を観察した。この層の上に堆積した土層の上面からは古墳時代後期初頭の遺物を伴う溝ＳＤ０５を検出した。意宇川は国庁設置に伴い現在の流路に変更する工事がおこなわれたのではないかという説があるが[註2]、この場所については古墳時代後期初頭には安定した基盤として利用されていたようである。

さて、以上で調査成果を記してきたが、調査区内では大草町において出雲国国庁の遺構面となった淡褐色砂質土（シルト）層上面のほとんどが削平されていた。したがって、きっと存在していたと思われる弥生時代後期の集落や、検出された掘立柱建物の時期等を明確にすることができず、非常に残念であった。この削平はいつおこなわれたのか不明であるが、９～12区では現在の耕作基盤土直下が削平された淡褐色砂質土の上面になっていたことから、昭和初期に実施された耕地整理の影響を受けているのかもしれない。

註１　真名井神社宮司によれば、真名井神社に保管されている近世の絵図には、真名井神社参道の３カ所に橋が架けられている様子が描かれているという。ただし、その絵図は非公開であるため、実見することはできなかった。

２　山中敏史「国府跡」（平成11年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修「官衙遺跡調査課程」配布資料）国立奈良文化財研究所　1999年

松江市大坪遺跡出土木製品の樹種調査結果

（株）吉田生物研究所　汐見　真

1．試　　料

試料は松江市大坪遺跡から出土した農具２点、文房具３点、雑具１点、用途不明品２点の合計８点である。

2．観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作成した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3．結　　果

樹種同定結果（針葉樹３種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1）スギ科スギ属スギ〔*Cryptomeria japonica* D. Don〕

（試料№２・５・７・８）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で１分野に１～３個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

2）ヒノキ科ヒノキ属〔*Chamaecyparis* sp.〕

（試料№６）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行が急であった。樹脂細胞は晩材部に遍在している。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で１分野に１～２個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。ヒノキ属はヒノキ、サワラがあり、本州（福島以南）、四国、九州に分布する。

3）ヒノキ科アスナロ属〔*Thujopsis* sp.〕

（試料№１・３・４）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で１分野に２～４個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

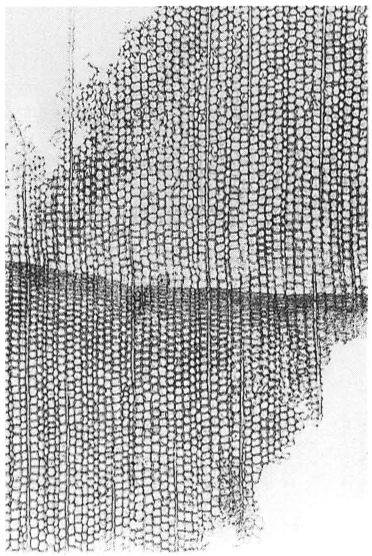
参考文献　島地謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）
島地謙・伊東隆夫「図説木材組織」地球社（1982）
伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所（1999）
北村四郎・村田源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社（1979）
深沢和三「樹体の解剖」海青社（1997）

使用顕微鏡　Nikon　ＭＩＣＲＯＦＬＥＸ　ＵＦＸ－ＤＸ　Type　115

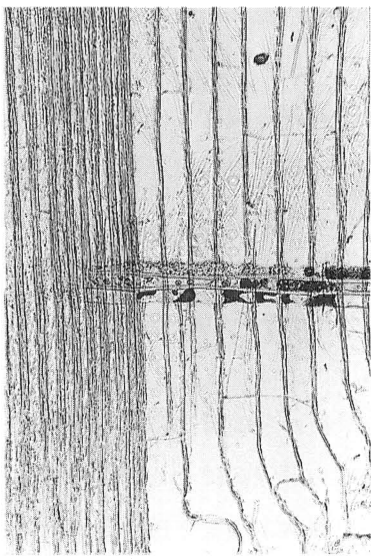
松江市大坪遺跡出土木製品樹種同定表

試料No.	品　　名	本文中挿図番号	樹　　種
1	木簡①	第10図 1	ヒノキ科アスナロ属
2	木簡③	第10図 3	スギ科スギ属スギ
3	木簡②	第10図 2	ヒノキ科アスナロ属
4	火鑽白	第66図 1	ヒノキ科アスナロ属
5	田下駄	第61図 2	スギ科スギ属スギ
6	枠付田下駄縦枠	第25図 1	ヒノキ科ヒノキ属
7	用途不明品	第61図 1	スギ科スギ属スギ
8	用途不明品	第62図 1	スギ科スギ属スギ

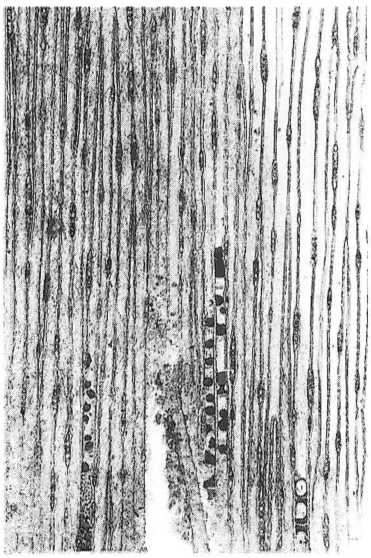
樹種鑑定顕微鏡写真



木口×40

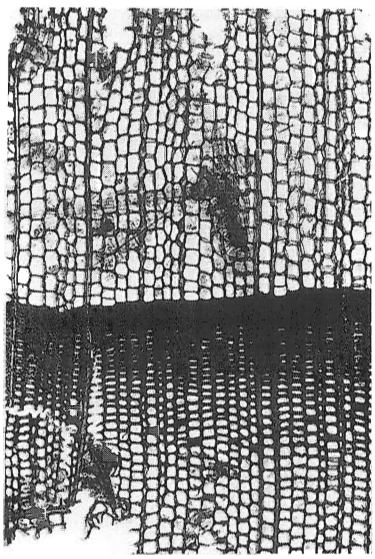


柾目×100

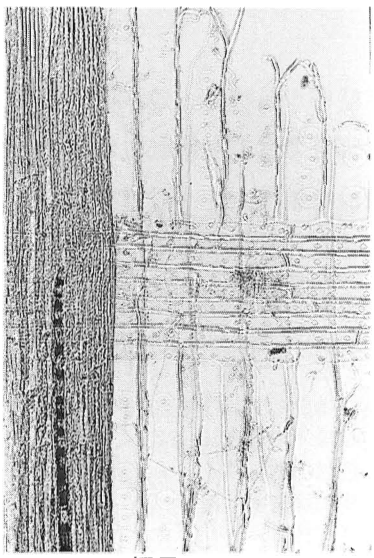


板目×40

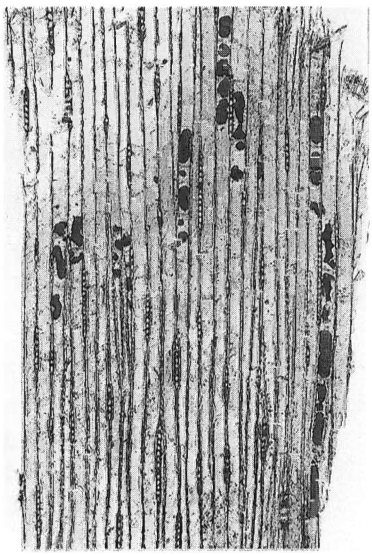
試料No.1　ヒノキ科アスナロ属



木口×40

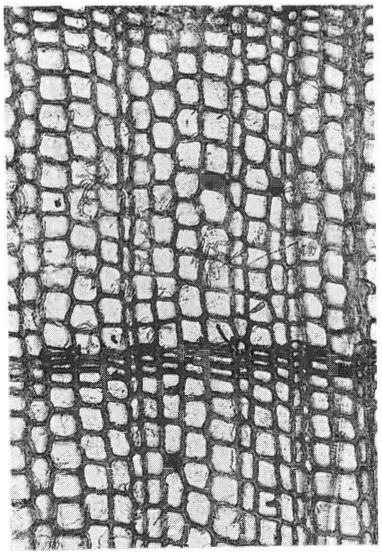


柾目×100

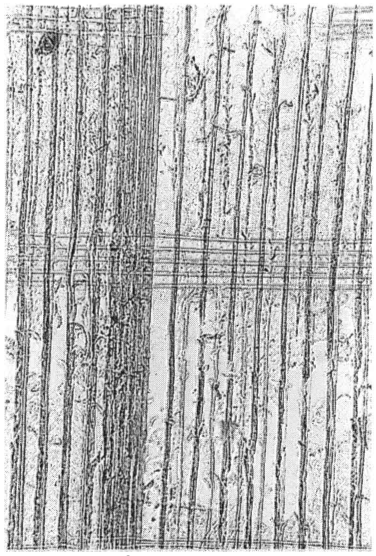


板目×40

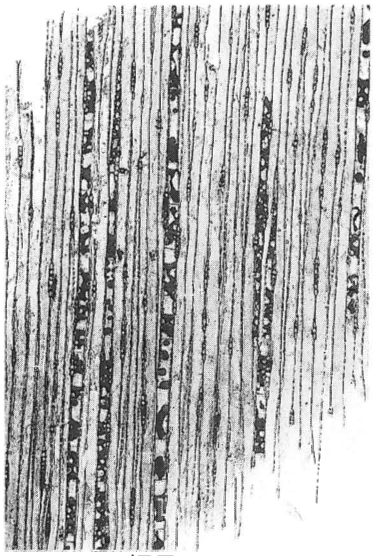
試料No.2　スギ科スギ属スギ



木口×100

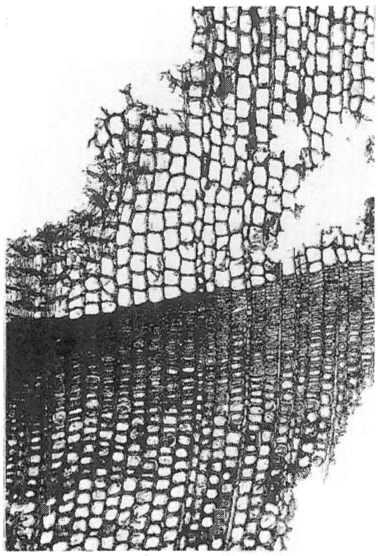


柾目×100

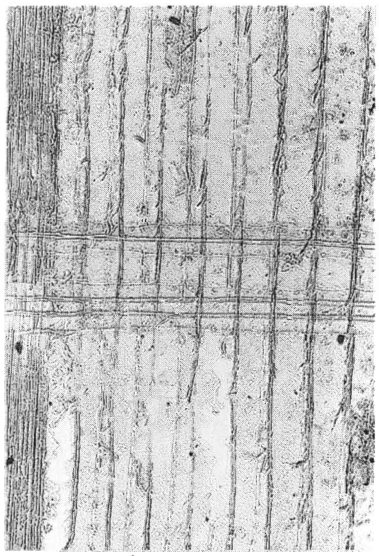


板目×40

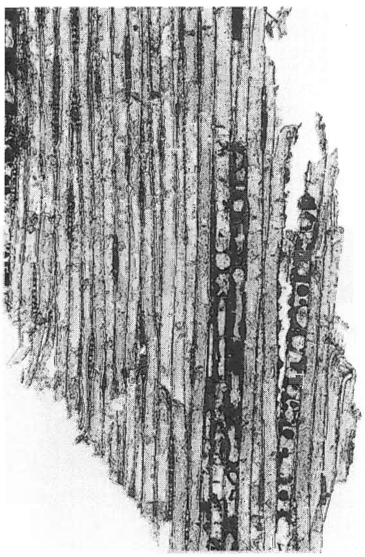
試料No.6　ヒノキ科ヒノキ属



木口×40

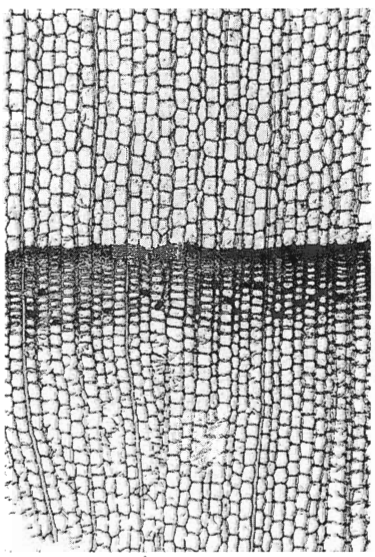


柾目×100

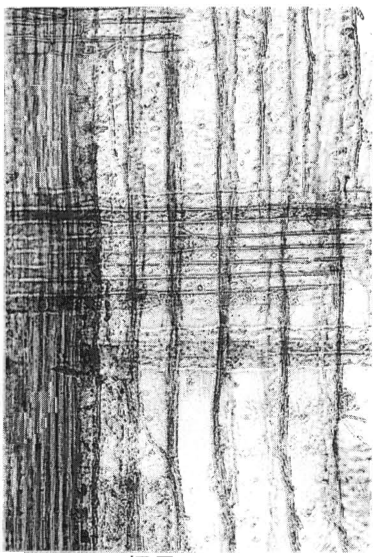


板目×40

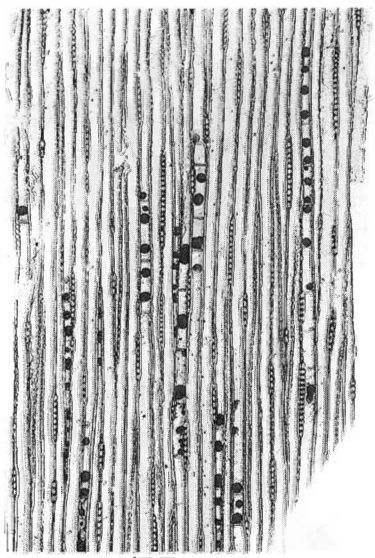
試料No.7　スギ科スギ属スギ



木口×40

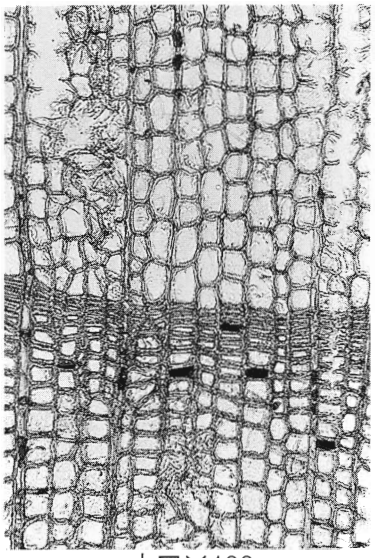


柾目×100

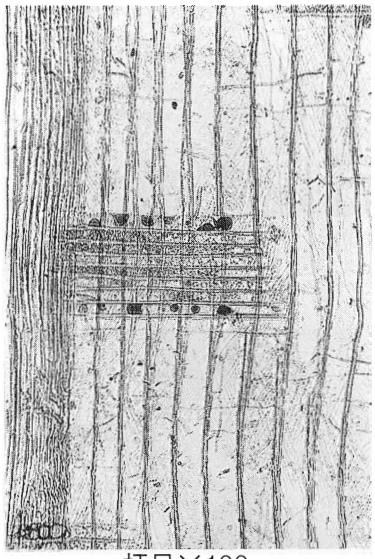


板目×40

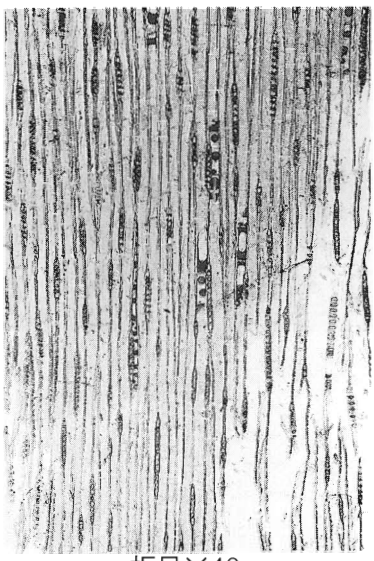
試料No.8　スギ科スギ属スギ



木口×100

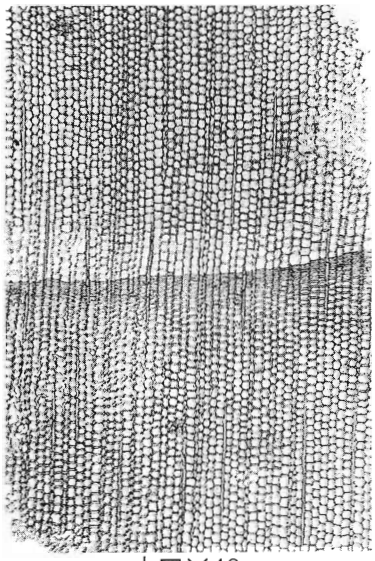


柾目×100

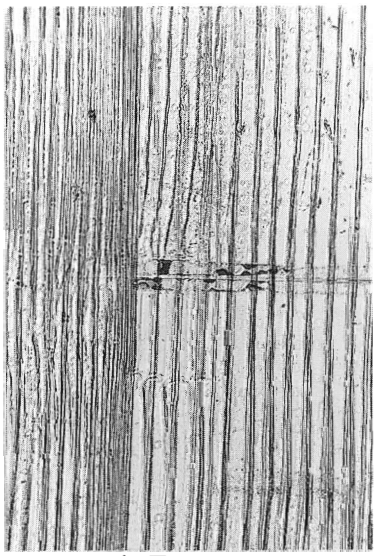


板目×40

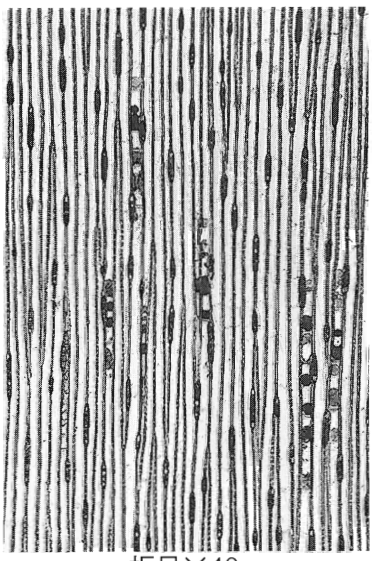
試料No.3　ヒノキ科アスナロ属



木口×40

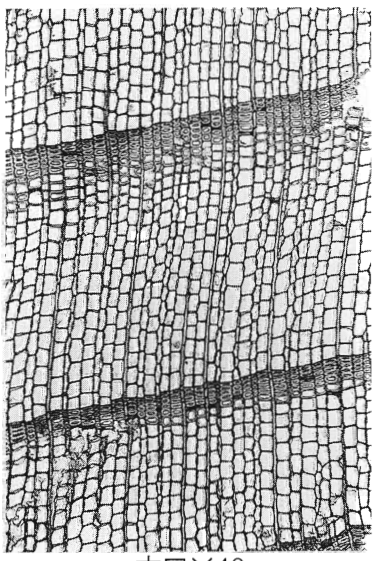


柾目×100

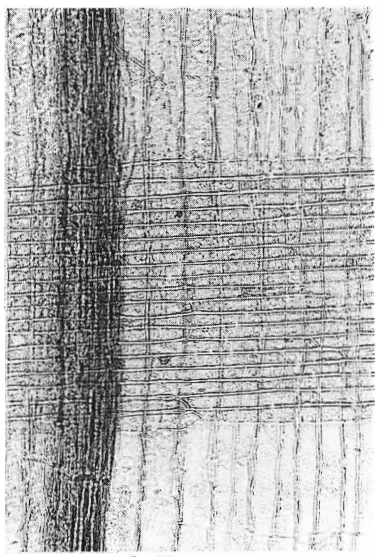


板目×40

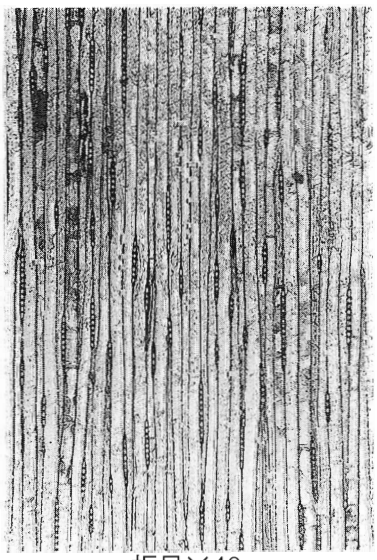
試料No.4　ヒノキ科アスナロ属



木口×40



柾目×100



板目×40

試料No.5　スギ科スギ属スギ

図　　版

図版1

大坪遺跡遠景（西上より）

大坪遺跡近景（北より）

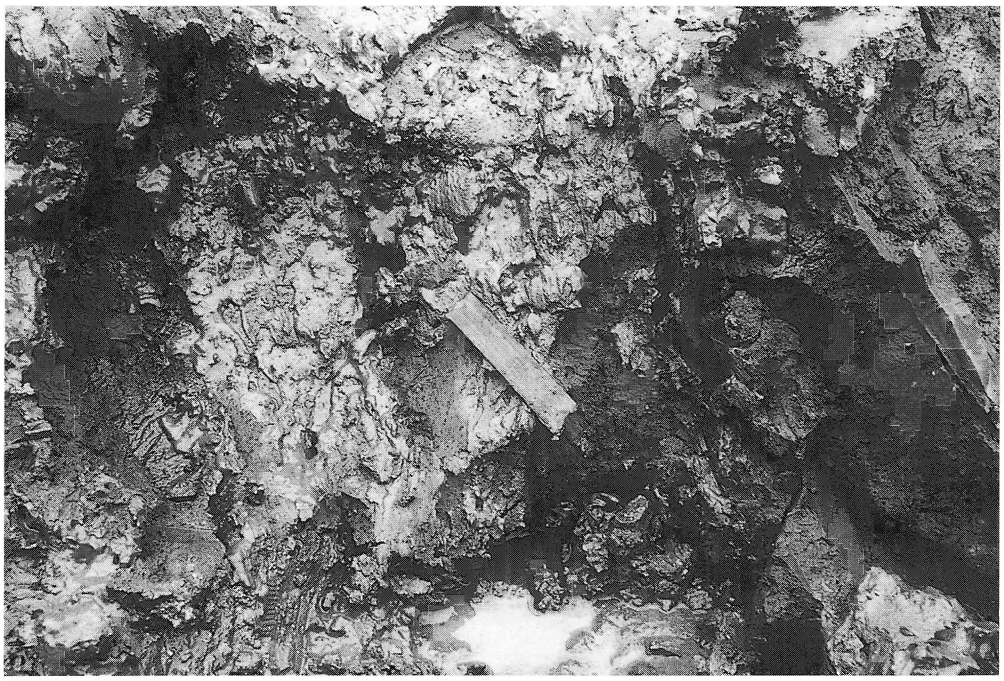
4～6 区完掘状況

4 区トレンチ掘削状況

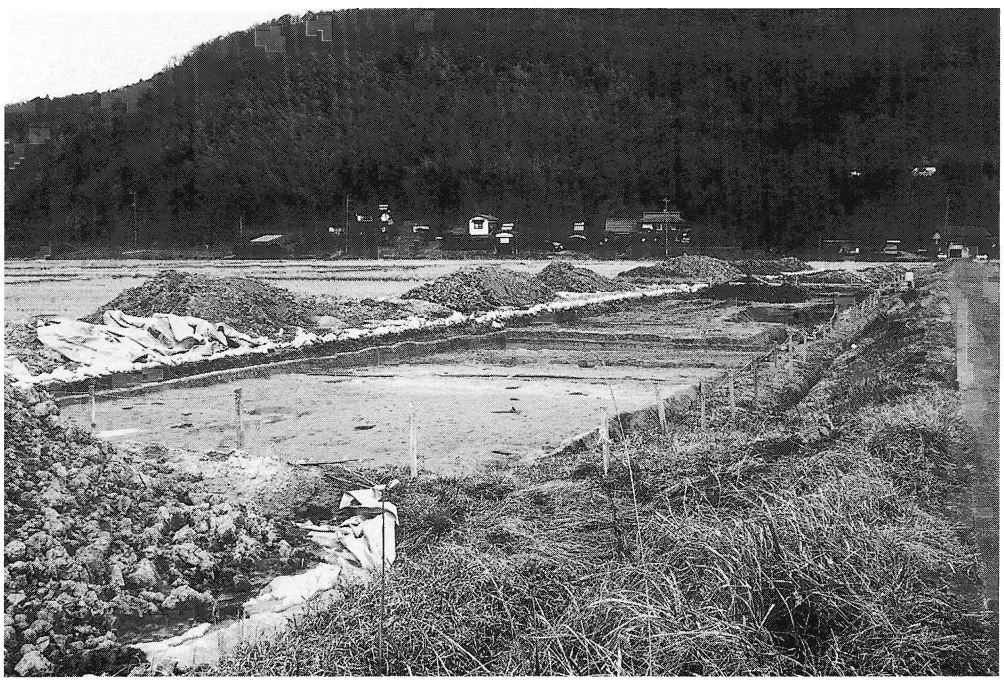
5 区河原石検出状況

図版3

6区1号木簡出土状況

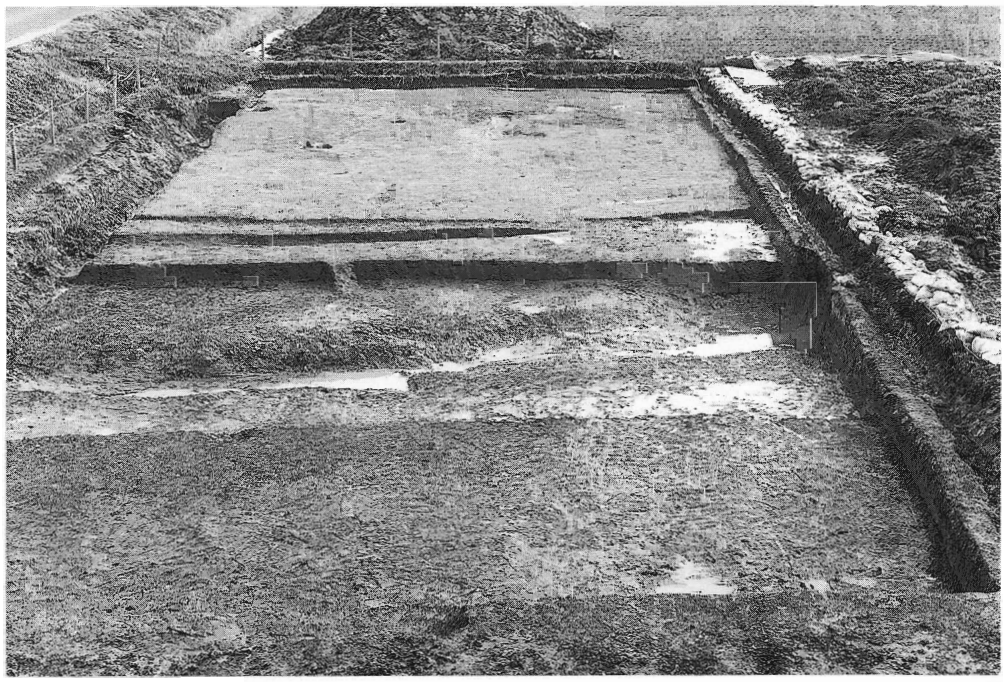


6区3号木簡出土状況



7〜9区完掘状況

8区トレンチ掘削状況



9区完掘状況

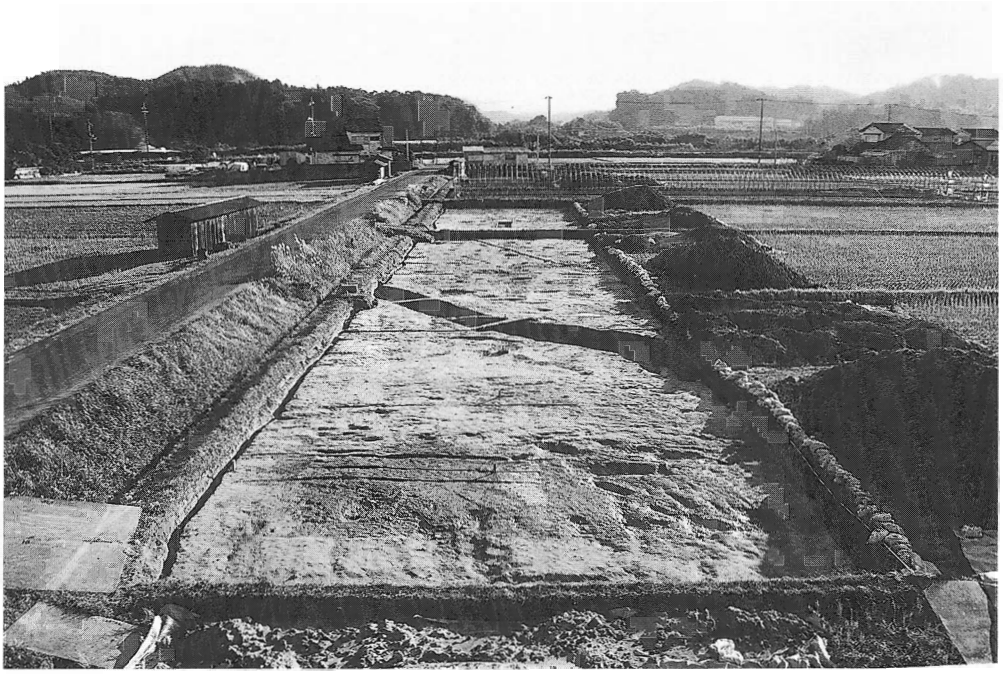
9区溝SD01完掘状況

図版5

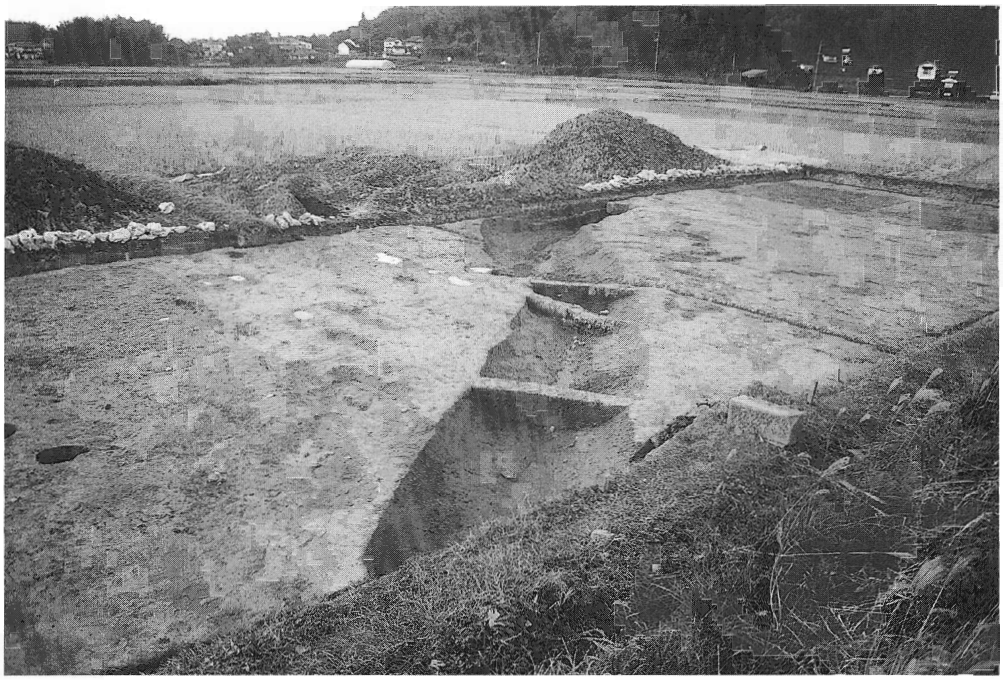
1区
トレンチ壁面土器出土状況

1区拡張調査区完掘状況

1区
拡張調査区木製品出土状況



10～12区完掘状況

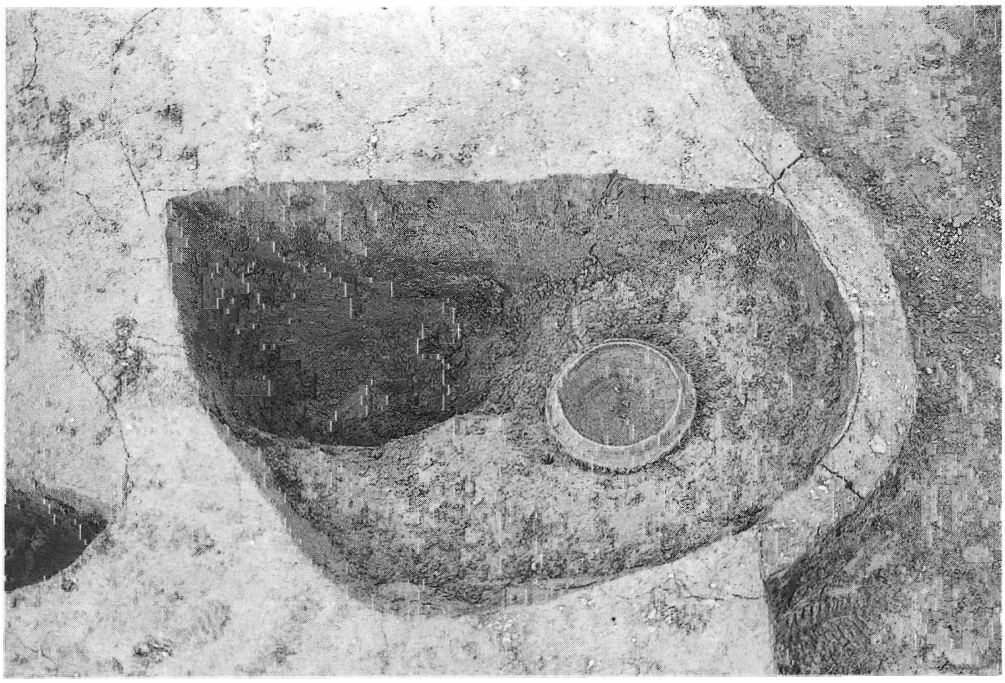


10区溝SD03完掘状況

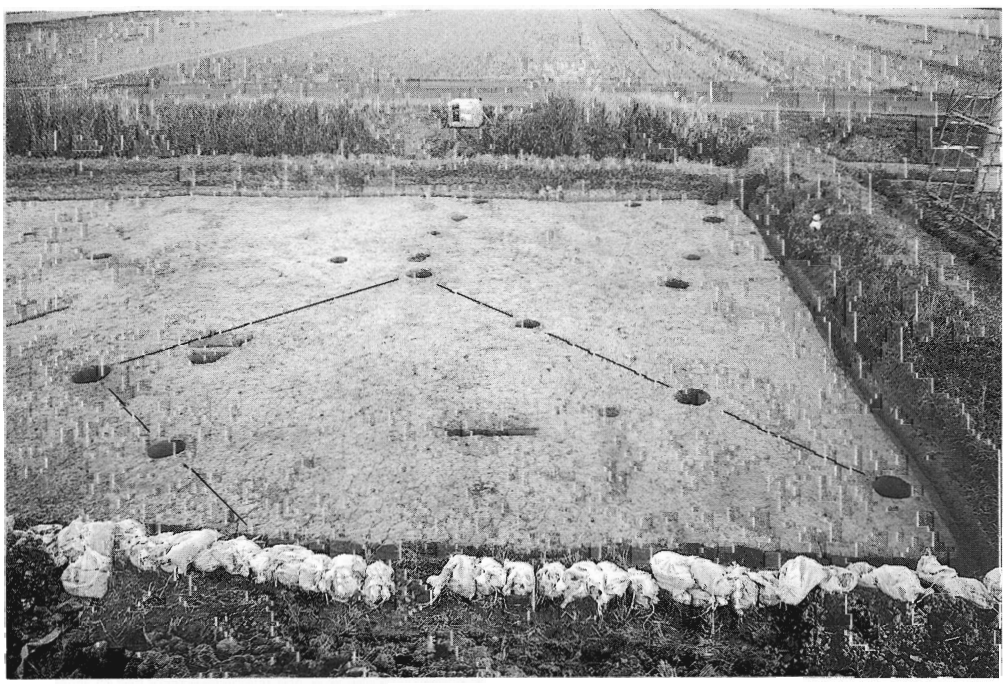
10区溝SD03
上層土器出土状況

図版7

11区完掘状況

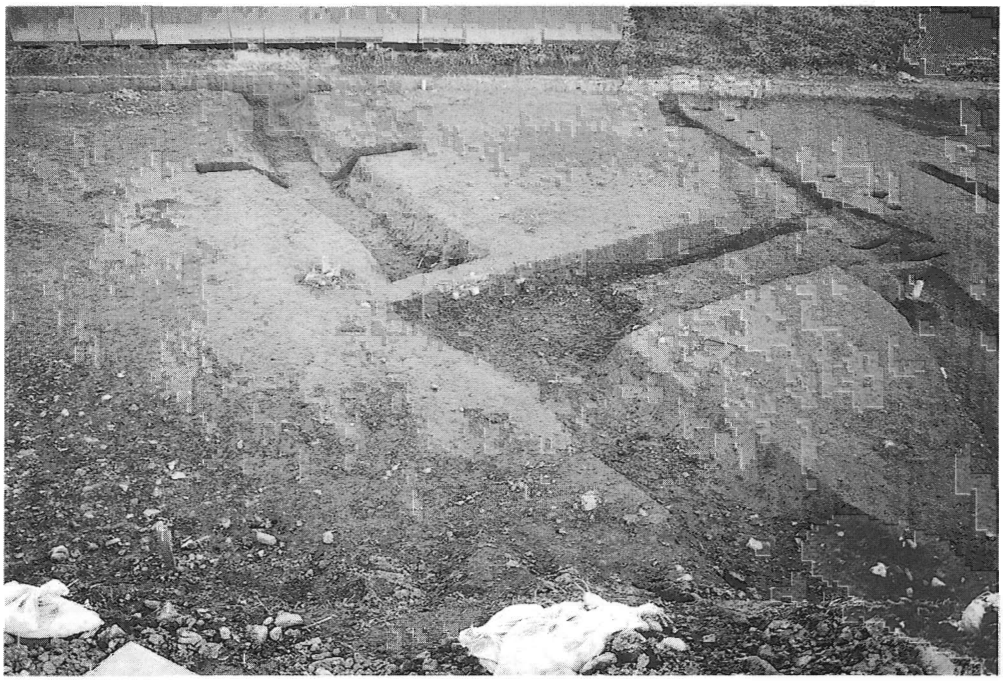


11区P2土器出土状況

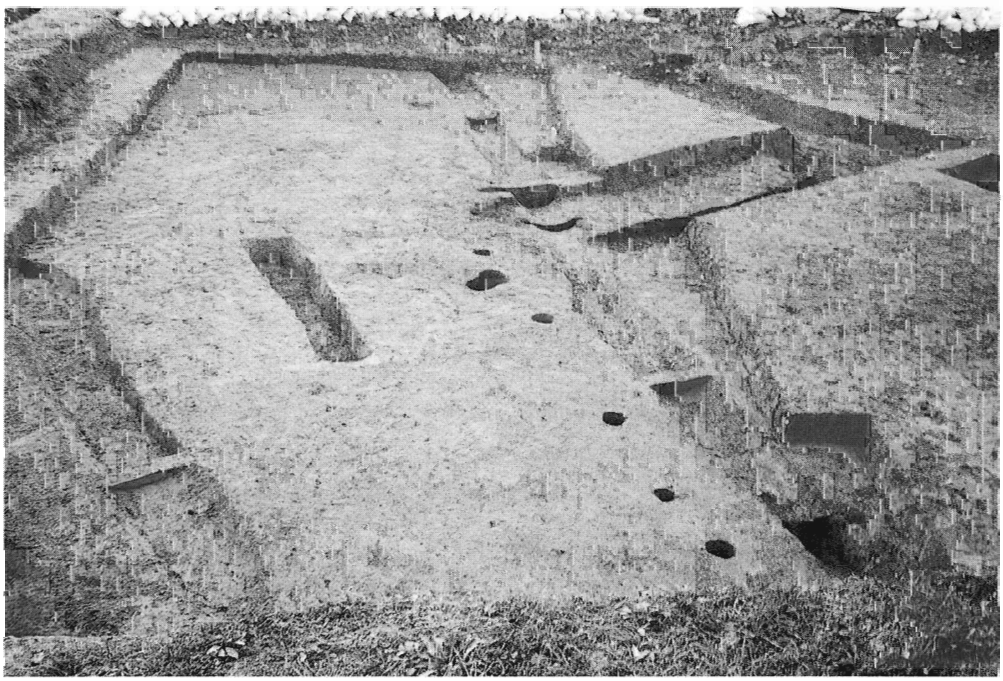


12区
掘立柱建物SB01検出状況

14区土器出土状況



15区溝SD05完掘状況



15区溝SD06完掘状況

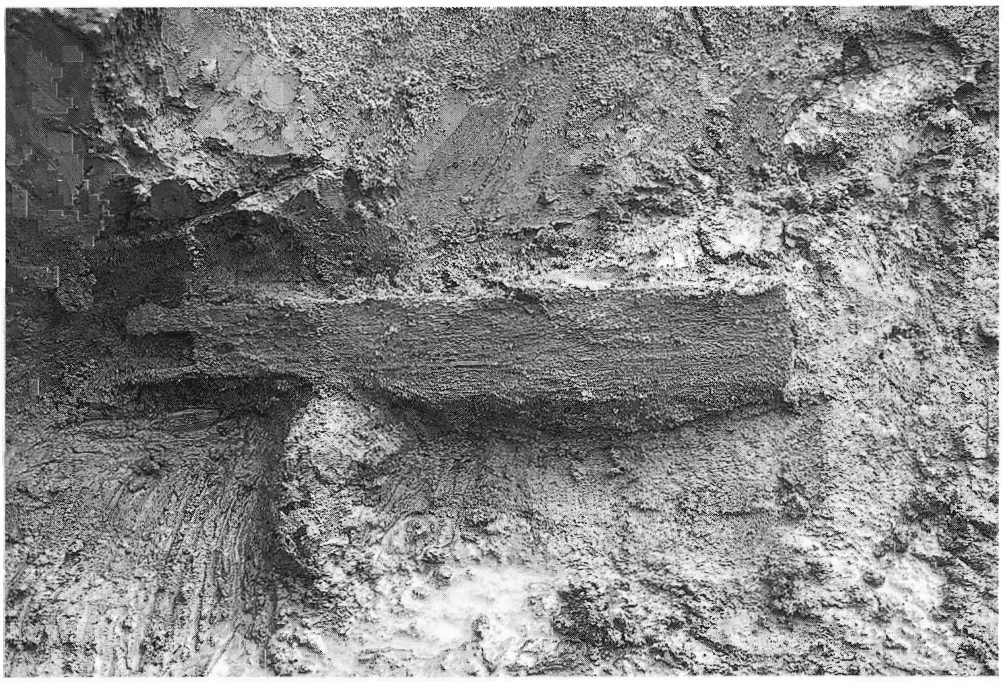
図版9

A～Eグリッド完掘状況

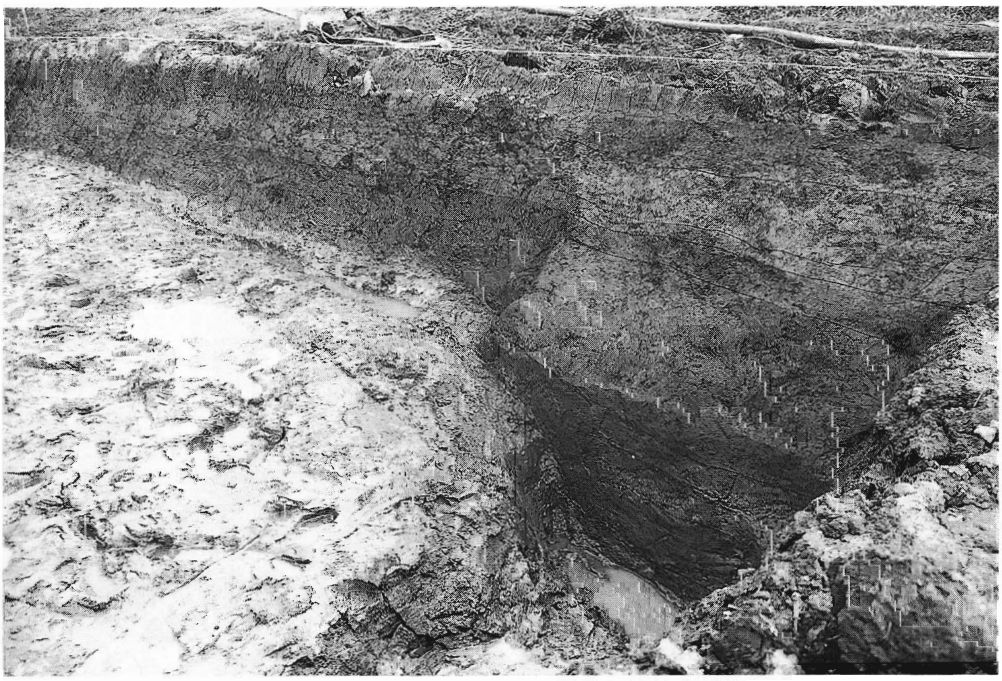
Aグリッド土層堆積状況

Aグリッド土器出土状況

Bグリッド
土層堆積状況

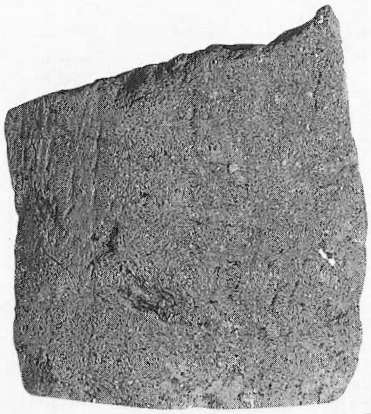


Cグリッド
木製品出土状況



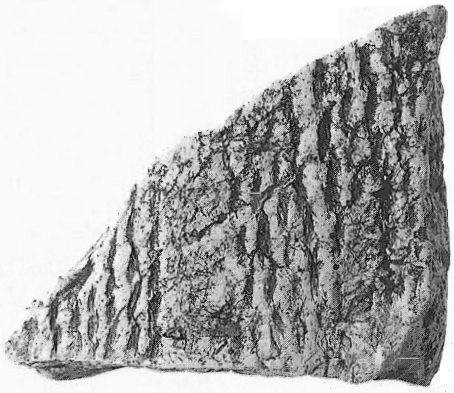
Cグリッド
南端基盤層浸食状況

図版11

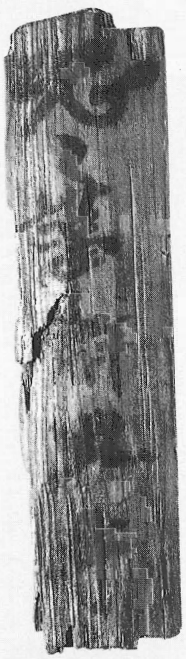


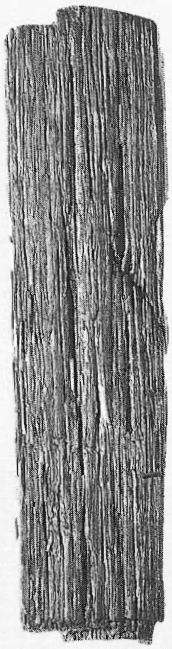
7

8



9

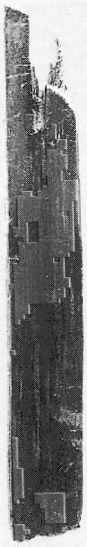




10-1

10-2

10-3



11-1

11-2

11-3

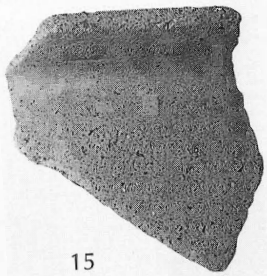
11-4

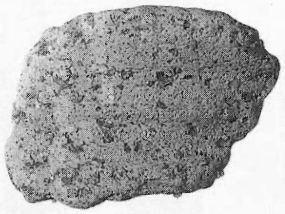
11-5

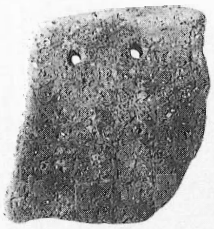
11-6

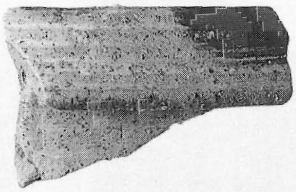
11-7

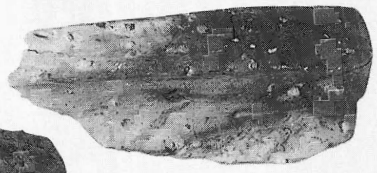
11-8

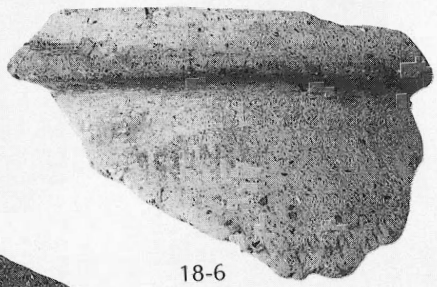

15

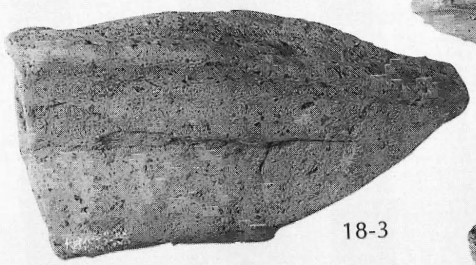

18-1


18-2


18-4

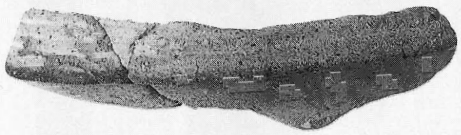

18-5

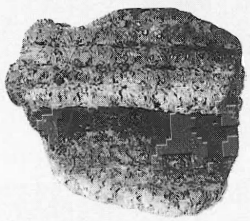

18-6

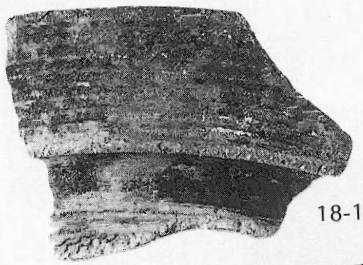

18-3

18-8

18-9


18-7


18-10

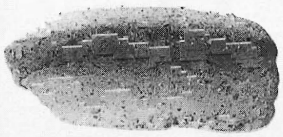

18-12

18-11

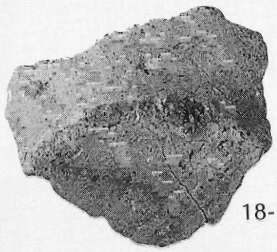
18-16

18-13

18-14

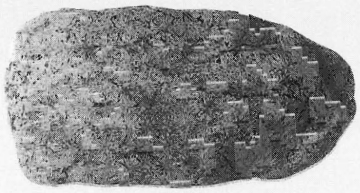

18-15

18-18


18-19

19-1

19-2


19-3

19-5

19-4

図版13

20-1

20-2

21

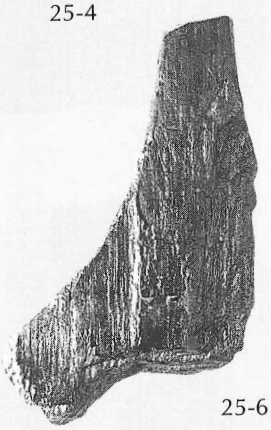
25-1

25-2

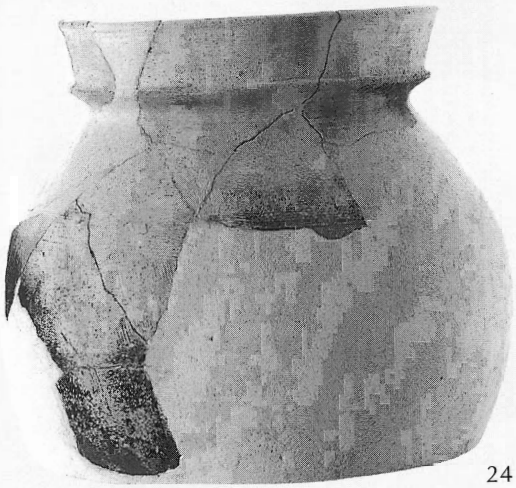
25-3

25-4

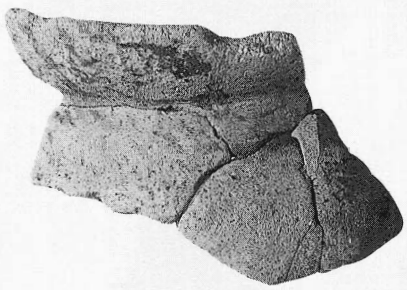
25-5



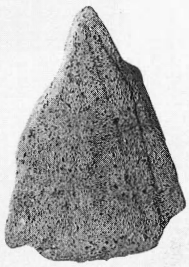
25-6



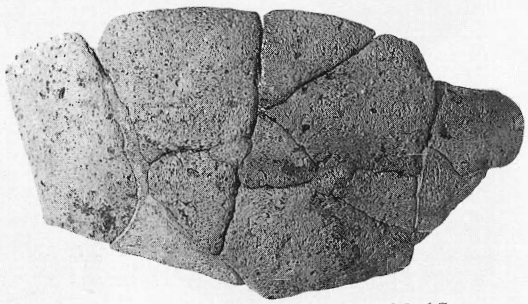
24



32-7

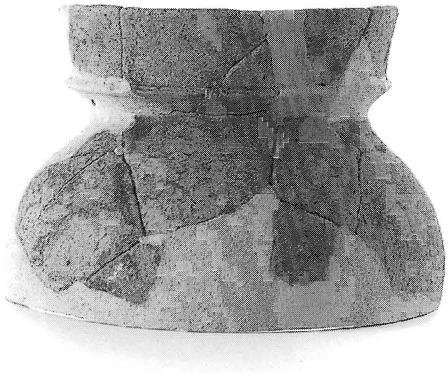


32-12

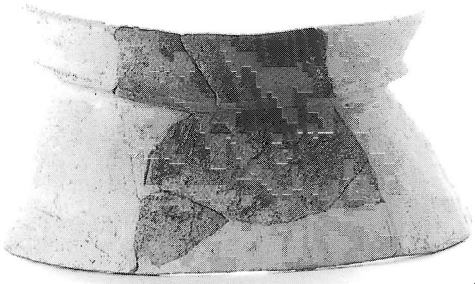


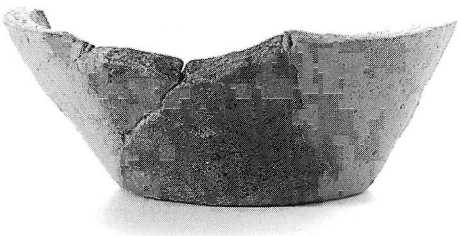
32-15

32-1

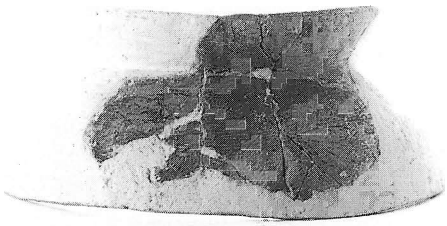

32-2

32-3


32-4

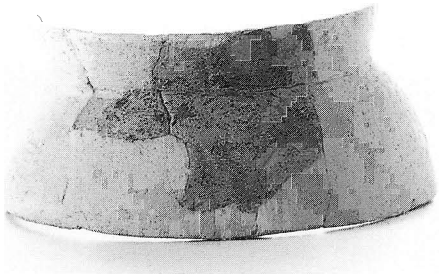

32-5

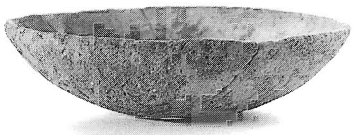
32-6


32-8

32-9

32-10


32-11


32-13